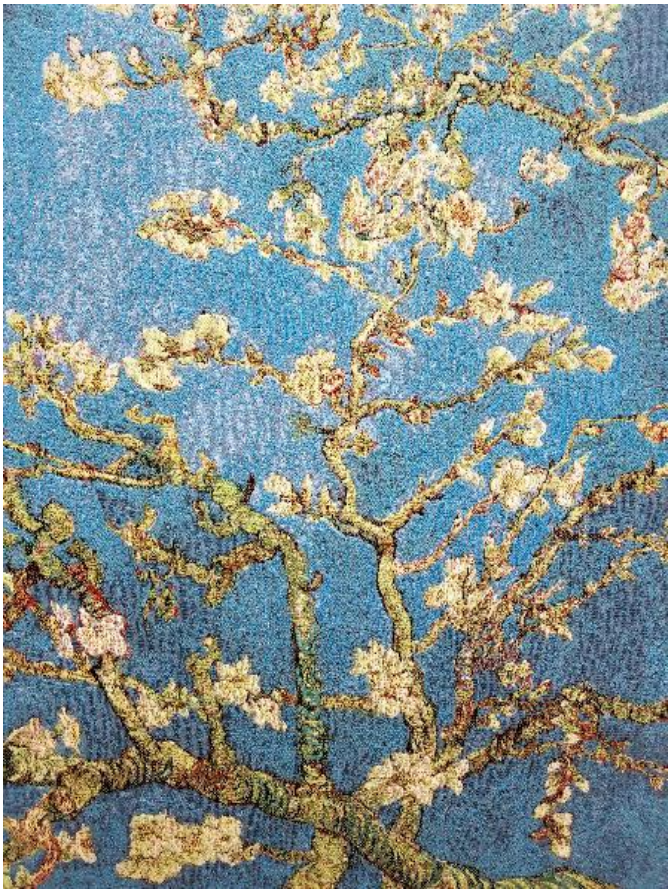
# 金澤詩人



金澤詩人第 15 号
2018 年度金澤詩人賞発表

# 目　次


—金澤詩人賞—
阿部静雄
プロフィール　5
選評　7
作品　8

—次席—
末永卓哉　24
中村利恵　29
山田留那　38

—招待席—
Eli in hurch　47

—候補作—
★北海道
林　栄子　53
はだゆうり　55
小篠真琴　57
伊藤結菜　62
★青森県
竹森絵美　64
★岩手県
三浦恵子　67
★宮城県
来栖　優　70
★山形県
阿部みずほ　73
★福島県
渡辺八畳　75
★群馬県
西谷恭介　77
★埼玉県
吉村健二　80
★千葉県
森　由右子　83
青木さえ　84
潮 寝子　87
★東京都
タナカジュリ　88
浅井かおり　90
赤穂肇　91
窪谷沙織　92
花沢菊男　93
三休　健　96
金澤　汀　97
吉田有花　98
しるる　99
沢木遥香　100
冠　ゆき　102
絶　歌　106
藤真ユイ　112
石川大貴　114
★神奈川県
田中修子　115
武重路子　117
佐々木由里　118
落知之仁美　119
佐々木裕雄　127
★新潟県
駿二　129
★富山県
笹川　雪　132
片口理恵　133
草野元瑛　134
★石川県
西村　薫　139
Ａice　144
★福井県
みかん　148
★岐阜県
後藤　順　152
★静岡県
神谷美幸　156
★愛知県
田代真耶子　158

★三重県
藤川六十　160
★京都府
江口久路　166
成瀬真綾　170
ＨａＮａ　173
★大阪府
井上　稔　177
塚本正治　179
★兵庫県
板倉　萌　180
村松　瞳　183
旅ダルマ　186
★奈良県
福田智子　188
尾上　文　190
★岡山県
夕凪　旭　192
★広島県
リュッツオ　194
上田しお莉　196
若宮恭子　197
大瀬名　凜　198
★福岡県
佐倉伊由子　200
近藤尚文　201
感王寺美智子　202
廣渡まゆみ　205
★熊本県
前津　光　207
★大分県
幸亜有美　210
★鹿児島県
久保田　渚　212
★沖縄県
比嘉景哲　215
———
近岡 礼　221

# 二〇一八年度
# 金澤詩人賞

## 阿部静雄

**――プロフィール**

一九四五年生まれ
静岡県　沼津市出身　ニューヨーク在住
大学を卒業後、出版社玄光社に入社。だが、高校時代からの日本を飛び出したい内面の促しが米国の地を踏ませることになった。当地では長い間、日系企業に従事。引退後は文学と哲学に専心、今日に至る。
詩作を始めたのは二〇一五年。

**――受賞の言葉**

このたびは栄えある金澤詩人賞を賜り、心より御礼申し上げます。
私には思索の経験はありましても、私の会社人生におきましては詩作の経験はゼロでした。
それが、引退と共に、胸の内にあるものをいつか吐き出したい気持ちで私は逡巡していました。
そのような時に、思いがけず、金澤詩人を知っ

たのです。そして、発表の機会を与えて頂きました。ゼロから出発した私は、ともかく、吐き出したいことの願望で、それを、「徒然日詩」として、私の誕生日を開始日として、一年間、毎日、詩作を続けたのです。
その結果、嘔吐になったものと言えば、私という自身の暗い内面でした。それでも、幼年時代を遡りますと、私は孤独な太陽の賛歌を全身に浴びました。うれしかった。まるで私は、巻いては活動を始めるゼンマイ仕掛けの一個の時計の存在のようでした。そうしているうちに、私は、詩作の楽しみとは、その時計を、ふと思ったこと、頭に浮かんだことなどに沿いながら動かせたり、あるいは狂わせたりできる自由ではなかろうかと、思ったのです。今では、その楽しみが私の暗い内面を少しでも明るくしているように思えます。
今回の受賞が再度、ゼンマイを巻きなおし、詩作を続けるうえで大きな励みとなりましょう。
ありがとうございました。

# 選評

二〇一八年度の応募作品は三〇一九篇でした。

金澤詩人賞の阿部さんの詩は老いをテーマにしています。そこには一匹狼の武士が、刀折れ矢尽きるまで闘って倒れるような哀愁が漂っています。故郷、若き日のロマン、現在のニューヨーク生活を往還することによって、立体的に来し方を彫琢しています。

愛執―その激しさからくる孤独を、直截に詩に昇華してゆきます。故郷への悔恨―若くして夫を亡くし未亡人として生きた母を捨て、渡米した負い。若さへの憧憬。老いを突きつけられ、諦念がスモッグのように視界を覆い、たじろぐ。芸術と宗教への関心が、それらの陰影をより深め、時には光ともなっています。

しかしそれはどこまでも、誰にとっても個人の風景に過ぎません。世界は淡々と生死流転し、空虚なままに澄明であるという彼岸的な眺望が、これらの詩から開けてくるでしょうか。

阿部さんは自分を「逃亡者」と言っていることからも、生煮えの老いに宙づりにされています。この救いのなさが表現されているので、詩として成り立っているのです。

次席を三人選びました。末永卓哉さんは筋ジストロフィーを患いながら、一口詩のように短詩を連ねています。自己分析や真っ当は社会批評や眼差しのあたたかさに魅かれました。中村利恵さんと山田留那さんはともに情念と苦悩を生命の流れの中に自在に編み込み、楽曲のように詩を奏で、天性がkg案じられました。

二〇一七年度金澤詩人賞のEli in churchさんには散文詩を寄稿していただきました。

候補作は北海道から沖縄まであり、日本という島国に美しい四季と荒々しい自然があるように、詩も豊かに躍動しています。詩によって見つめられる日本、をお読み下されば幸いに存じます。

（近岡　礼）

# 阿部静雄

## アメリカの悲劇

鳥の群れをなぜ撃ち落とすのか
無垢に生きているものが
それ程憎いのか
老いた身であれば
理由なき反抗でもあるまいに
それともおまえの破壊魔の遺伝子ゆえか
この魔物　野蛮人め！
極悪の野蛮人！
湖底から浮上してくる非人間
次から次へと事件を起こす非人間の牙
湖底に魔物を住まわせる文化
誰も中絶させることはできぬ
神さえも
永劫に病的魔物がのさばる社会
空き缶のような人間が人間の影に住まう
空き缶を死体で埋めるために
自分でさえ何のためか知りえずに・・・

## 人生の旅人よ

人生の旅人よ
小さな島にひしめく多種多彩な人種
マンハッタン島
毎秒利害にからんだ激流
世の中の動きの激しい流転
取り残された汚濁の淀み
孤独と死が住まう

教会といえば
ここも人種のるつぼ
満席にはならず
取り残された孤独の顔
俗事と雑事に悩んだ顔
深い皺を寄せ合っている

夜ともなれば
自己実現に疲れ切った人間

ひとり寂しく酒を舐める
私もかつてそうであったのだ

ああ人生の旅人よ
今や世間の利害のしらがみを中絶した
老づものよ
気ままな暮らしに浸っている
おまえよ　それだからこそ
この島の狂乱と騒音を遮断して
ひとり孤独に沈む場所に住め
おまえの内面という場所に
そこにおまえ自身を忘却させ
深く沈めさせえれば
高層ビルの影であろうが
ハドソンの川べりであろうが
セントラルパークの大樹の蔭であろうが
大型フェリーの船上であろうが
どこでも内面の孤独の場所になる

人生の旅人よ

さあ孤独の存在がおまえの存在になって
孤独を人格とせよ
感情ではない孤独を！

## ヴェネツィアの旅

冷えた水に足を濡らしながら
ためらうこともなく
恋人を探し続けた
運河の橋から橋へ
教会から教会へ

老婆が一人
青白い足を凍えさせながら
暗い教会でひっそりと祈る
その傍にいるのではと
影を探す
ためらうこともなく

美しい讃美歌の響く教会
合唱に耳を澄ましているのではと

天上を仰ぎ聖壇に眼を落す
こうして席をあたためることもなく
古都の死の漂いのうちで
恋人を探し求める
ああおまえよどこにいったの
どこに？

水の古都ヴェネツィア
ゆりかごのように揺れる
棺のような黒いゴンドラの中にか
ああためらいもなく
消えてしまった恋人よ
私も黒いゴンドラに横たえて
いつまでも古都の水に
おまえと一緒に揺られていよう

## 若き日の幻想

ボッティチェリの絵から世俗に
飛び出してきたヴィーナスのような
バーカウンターの中で働く女

一目で恋してしまったのだ
炎の中で耐え尽くした日々
美神が私に心ゆるし働きかけるまで

ああ悦びが　チャンスが巡ってきた
デートを重ねるうちに
ヴィーナスの故郷に飛んだ
離婚した母親のもとに
その母親も美しく知的でさえあった
私の休暇は愛に包まれるようであった
ＮＹでの逃れえない孤独が消えてゆく
灼熱の砂浜
海からあがってきたあの美神
輝きの裸身になって
これは現実などではない
愛に渇いた私の幻覚に違いない

ひとり私だけがＮＹに戻った
死に触れそうな孤独が次第に
大きくなっていった

遠くに去った恋人
二度と私のもとに駆けつけることはなかった
ああ諦められず諦められない
私がそこに苦しく立ち往生していた
若き日の神経症
それにいじめられた日々が
昨日のように思い出される

秋雨のような寂寥が
ガラス窓を叩く頃になって・・

## 夢

脅えたように
何度も寝返りを打ちながら
夢を払うように
夢のなかにいた
無力な老体が無力な子どもに
戻ったように
子どもの心のなかにいた
母の姿

戦後直後に逝ってしまった良人
日々の賄いのために
自分ひとり出稼ぎにどこかに去って
父の家に戻ることはなかった
置き忘れたのではない
取り残された幼子
親を頼るほかない無力な私が
誰からも愛されることもなく
愛するひとも身近にいない
淋しい無力な魂が
日向ぼっこした日々
近所付き合いもなく
無口な子どもになって
遊びの仲間にも入れず
ひとり運動場に佇む
そんな光景を夢のなかで見たのだ
夢は突然中止する
寝返りを打ちながら
その風景がかすんでいかないように
夢のなかに再度入ろうと

また寝返りを打つ
ああああの日向ぼっこの光景
それこそ私がおとなになっても
無力感に苛まされ
私の内面をみせない自分に
なったのではなかったのか
そうに違いない
自分を閉じ込め
失敗を繰り返させる私の
青春・壮年時代ともなったのだろう
恋愛さえも
ふと私の脳裡に横切るその直観
無力な老体に襲った子どもの頃の夢
なれど私に真実を見極めさせようとする
夢でもあったのではないのか

## 都会の孤独

乱立する高層ビル
オフィスであれマンションであれ
ビルの狭間に厳しい冬の
寒風の乱気流
孤独を紛らわせるように

ビルの谷間を杖つく老者が
瓜二つの顔の
老いた犬を連れて
てくてくと歩きながら
ああ死が待っている
待っていると息を吐く
それに連呼して犬までが
死が待っている
待っていると独り言

寒風が撫でまわす街角の花屋
白ユリが売春婦になって
買ってくおくれ買っておくれ
とはやし立てる
聞き耳もたぬ私だが
老人よどこへ行くのか
暖房のきいた暖かな部屋であれば

私を連れていっておくれとせがむ
聞き捨てならぬ独白
そこで　白ユリよ
私の棺に飾られるのはおまえ
それまで待ってくれと・・・
孤独を分かち合う

強風に晒された街中の
一本の老木
喘息のような激しい咳のため
今では枯れ葉散り去った
殺風景な裸木が
おまえよ
枯れ葉よ
と告げる
ああ私に向かって枯れ葉とは！
確かに私も長年
喘息に苦しめられた老木と変わりなし
思えば葉という葉を散らした身だ
今では枯れ葉に違いない

老木の根元に植えられた花
小さな声で私を呼ぶ
あなたは冬の夕暮れ時の
老人にそっくり
私をつまんで飾りにしてね

夕暮れの空には渡り鳥が
高層ビルを横切ってゆく
甲高い声を絞りだして
暑い南に南にゆくのよと
私に嫉妬させるように告げ去ってゆく

ああ私を暖めるものはないのか
摘まんだ冬の花
おまえも
なんと寒々しいことか！

## 樅の木

街角の樅の木の香りが淋しい

切られ売られる運命に生きる
おまえよ
薪の燃える暖炉のそばに
たとえ飾られようと
人形の天使が羽を休めようと
どんなにかおまえの美しさが
家族みんなに讃えられようと
イエス・キリストの生誕の祝祭が果てれば
おまえは厄介者　無残に捨てられる
それでもおまえはイエスと子どもたち
悪人たちを楽しくさせると言い張るのか
言い張るのは人間の神と
計らい無しで生きられない俗様の人間だ
おまえの自然の神は悲しむよ
私だっておまえに共感して悲しいと言えば
おまえは私を偽善者！と認めて突き放そう
だけどそうであっても
捨てられるおまえが悲しいよ
おまえはやっぱり野に置かれるのが一番
私だって老いを生きるうえで
汚れた俗世を抜け出して
せめておまえの自然（じねん）の世界に
住まいたい故に・・・

## 都会を歩む

都会を歩めば
あらゆる欲望という名の付いた通りが
縦横に開かれている
どれも招き猫の通り
金　権力　名誉　セックス
からくりを隠しつつ・・・
愛さえも幸福さえも
からくりと絡みついて
火花・花火をあげる

都会のおまえよ
からくりに染まって生きた
おまえの招き猫の通りはどれか
いやいや過去は聞くまい聞くまい

老いたおまえの通りは
唯々一つの通りが
宿命の道になるだけなのだから

## 都会に生きる望み

摩天楼の中腹の小さな踊り場
真っ白な一羽の孤独な鳩が
愛する仲間を見失ってしまったと
涙を零している
見渡しても見渡しても
人間と自動車の洪水で狂い立っている下界

淋しげな冬の太陽
雲間からいっとき顔を出す
ひとりぼっちの鳩を暖めるように・・
勝手気ままな闘争心むき出しの都会人など
眼に入れることもなく

下界を一瞬照らす一条の陽の光
真っ白な鳩

何かを見たように
国連ビルの方に飛び去ってゆく

## 母の人生

老いをかさね
縮まった
悲しみのその心臓を
えぐると
結婚指輪と
小さな仏像が
おかれていた

## 闘い

イエスは不正と激しく闘った人間であった

イエスが超自然の力で
昇天したあとに
イエスは一度たりとも
なにも与えなにも求めない
偉大な石像になった

求めるのは人間
苦と貧ゆえに　痛みと冨ゆえに
慈悲を
救済を
恵みを
そして愛を

だが石像　なにも語らず
石の石

生ある人間のみが
鏡に語り
こころひびくこだまを記録し
鏡のじぶんを慰める

幕に覆われたイエスの石像
偉大な父なる神も
静寂なる石の山

なにも恵みはしない
闘い　得るのは与えられた生ある
おまえなのだ・・・

## 四月の雨

おまえたち
冬に耐え尽くし
天にむかって欠伸と背伸する樹木よ

画家が聖なる処女のヌードを
はらはら見つめるように
春の太陽がおまえたちの素っ裸を
ほらほらと親身になって優しくふれる

初芽の点火した枝だって
赤子になって陽光の乳を吸うようだ
足を凍らさせた大地だって
四月の雨で五月の装い
きらめく青春のよう

夜の窓からみる一本の樹木
一切に無関心な美しさ
そこに在る

## 夢（む）

カラスよ　カラスよ
声絶えず　鳴け　泣いてくれ
夢にもみた　二度と来ぬ栄光の春に
おまえの羽風で　夢見心地の花々が
散ってしまおうが・・

過ぎし日の
生死の難破船
嵐の中での桜花の枝の切断
苦闘と孤独とのあとの
黄金テープを切る長距離ランナー

かつては甕に黄金色で満たした
煌めく酒　数多（あまた）の祝盃を重ね
血潮を煮え滾らせた野心と嵐の欲望

ああカラスよ　カラスよ
声絶えず　鳴け　泣いてくれて
今日という日の萎む記憶に
甕に二度と満たせぬ酒に
おまえの羽風の不安の楽の音（ね）に
絡ませて　追憶のともしび　もう一度
その栄花の春を味あわせてくれ
夢であろうとも・・・

## 悲しくないか

悲しくないか
生気あふれ　太陽の美しい時空に
理想を殺してしまった　残酷な
眼のない深海魚よ

悲しくないのか
駿河の磯の小石の陰の
孤独を忘却してしまった
蟹よ

悲しくないか
無頓着な富士の大空に
永劫に翼をひろげ　殉教者のごとく
不毛の時空に無益に生きる
白いカモメよ

悲しくないのか
富士も駿河も捨て去って
蒼めいた太陽のもと　蒼穹と蒼い海に
染色されずに　あなたを打ちのめした
たった一人の罪作りの息子を思う
小さく軽くなってしまった母よ

悲しいものか！
薄氷となった幽かな五官
魂の孤独の楽しみ
色あせぬあるがままの宿
空さえ死なぬ故郷（ふるさと）に
一つになった心の凱歌の
耳鳴りがする母なのだから

## 現代の夜景

私には皮の剝いたあなたが見える
墓に埋もれた　宝石箱に隠した
欠伸した記録のデータなればこそ

呼び出そうとすれば
あなたの花弁の真紅な唇
揺れに揺れ　そそのかす私を

白百合の裸　麻に絡めようと
鏡の中の小さな乳房
春を待つ小さな葉むら
瞳に移る　私の水晶に

でも革命的進軍は中絶
ぶち当たる鉄の壁
背後は荒野の空白

あなたには皮の剝いた私が見えるか
記録のデータも　情熱的な暑い唇が
曙の青い裸身が

見えない見えない
あなたの天使と神　あなたの
思考と意志　記録の空洞ゆえに
私も？

咲かせよう咲かせよう蕾の花を
欲情　交情　絡みつき
大都会の夜景に
二人の孤独が沈んでゆく

## 虐殺

染みついた憎悪の禿鷹
激烈な暴力となって大爆発する
シナゴークで　教会で　はたまたモスクで
狂気の禿鷹悲劇は止めようがない
永劫の車輪となって　生きる地球が暗さを増す
黒い轍をつける

染みついた憎悪の轍
消しゴムで消し去ることは
絶体に不可能なのだ
政治　経済　科学技術　宗教　人間愛
あらゆる手段をもってしても・・・

今日もまた　狂気・狂乱の憎悪の大爆発
大量虐殺が　シナゴークを赤い血で染めた
兄弟を夫婦を静かに生きる家族の人々を
ああ　なんという悲しみの晩秋の一日であった
ことか

また今日も　偏向メディアが　分断させた右と
左とで
その責任の所在を暗に右は左にあり　左は右に
ありと
愚かなインテリに拡声器を持たせて　どくろか
ら

ひねり出した　因果をがなり立てさせている
ああ　なんという深い分断の溝が　このアメリカで
膠着しまっていることだろう
政治的ゲームではないのだ　右も左も　人種のるつぼをも
超克して　極悪非道　人間に潜んいる憎悪の禿鷹を呪うべきなのだ

自由である人間　は　誰もが勝手自由ではない
人間でもあることを
それが　自由の国の人間が護るべき尊厳であることを　右も左も
一緒になって　電波に乗せるべきなのだ

それなのに　右も左も　派に有利になるように
利用する
自由の国とは　なんと精神の汚染がおぞましく
激しいことか

悲しい米国の陰の時代精神　今日も　孕んだ大気の中を
その憎悪の毒矢が　飛びかっている
私と言えば　溝の中で　息を潜めているのだよ

## 資本主義

資本主義とは　自由なる劇場の舞台で
火花を散らす　創造の情熱なくしては
天に穴を開けることさえ　できない　生死の様式だ
徹底的に人間を利用し　利用される　死活のドラマ

創造的天才が　死活ドラマを創設すれば
観客は没我となって　感涙　咽び　感動で
精神を高揚させ　至高の芸術の薫りを味あう
死ぬか生きるか　芸術では決定的な死とはならず
虚構の死となって　ぎりぎりの死が利用される

現実を象徴したものとして・・・

ああ　おまえよ
資本主義社会に人生を埋没させるおまえよ
おまえに　白熱した燃える創造の情熱がないならば
せめても
他人に利用されるな
他人を利用するな
おまえができる唯一のこと
静かに坐禅のごとく　瞑想せよ
おまえの主観も　観念も　権力の意志　さえも
全て　吐き出してしまえ
そうせねば　おまえの真の存在の自由はない
芸術上の死さえ空っぽだ
それが嫌なら　資本主義社会の中で
薄っぺらに生きよ
おまえにできるか　そんなたわいのない人生を・・・

## 失われた軍旗

俺の身体には　幼い頃から　あらゆる言葉が
書き込まれている
九十まで生き切った母の　若くして逝ってしまった父の
叔母・叔父たち　友だちの
それに加えて　思想家　哲学者　政治家　事業者の　言葉が
器官のない身体に　消化されることもなく
ランダムなデジタルのごとく　記号となって・・・

積層された　曖昧模糊の記号の身体
今では　死という権力が　その記号を旨そうに
食いつぶしている

ああ　権力に抗う　俺の軍旗はどこにいったのか！

## 掌の陰

晩秋の陽が西に落ちてゆく
マンハッタンの古色のビルの樹林
刻一刻　影を舐めている

私の前の法廷には　九人の判事のみが　ベーコンの画のごとく
歪んだ醜い狂気を吐き出した法王たちとなって
居座っている
深閑なる空間を映し出す　判事の背後の　窓ガラス

私は私の陰を通して　暗いビルの窓を見る
うっすらと　亡霊のような全裸の女
瞳が光った　私の内部に貫通したごとく
女が私に　薔薇の棘で突き刺した
甘美なる空痛
私も突き刺した　雲から千切ったカモメの嘴で
空（くう）なる　青空にはヘリコプターが舞っている

ああ　憂鬱なる日々を　不条理のままに　過ごせねばならぬとは
記憶とイマジネーションの混乱と不安
脳髄の弔いの時間がいつか
おまえに埋め込まれた　あらゆる記号が
死の時刻を刻むことだろう

## 幸福の収穫

愛をほとばさせる天の炎
磯の美しい白い鳥たちが
翼を膨らませ　喜び戯れ
光芒となって大気をはじき
無心の安らぎの調べを奏で
故郷の母の家を包む

それなのに　ああ　嫌だ嫌だ
貧相な無人の滅びゆく
母の家を見るのは耐え難い

母の愛する里　母一人子一人
その家から　時計をひっくり返し
唐突に異邦に飛びたった若い私
家を捨てたように・・・
魂なき犯罪者の逃亡のごとく・・・
母が唯一勝ち得た一人息子なのに

老いゆく母　一人息子の突然のいっときの帰郷
たとえそうであろうと　柘榴の幸福の実りもなく
あるのは悩み重い孤独の収穫
母の仮面の内の断層とまでなった　それが

異邦で老いゆく私が突如　急いで　駆けつけたのは
母が深く愛した　天の炎　白い鳥たち　磯の平穏な
調べ　全てが暗闇の海に没した頃
私が決して見たこともない

仮面を付けた母が沈んでしまっていた

ああ　今でも母の家を見るのは
恐く　辛く　耐え難い
老いて未だ　逃亡者なのだから・・・

# 次席

## 末永卓哉

―宮城県在住―

### 努力せず

医師の理想に従わないくせに筋ジスの私が
奇跡と神様に難病の完治などを期待するな
素振りもせずにホームラン狙うほどあほだ
そんな正論を病床で面会に来た母にいう私

### 罪にならないなら

鱗を包丁で取られるタイをカウンター席で
みながら憎き彼らもそうしてやりたかった
私はそう思って出来た刺身を日本酒で嗜む
外は北風と雪が料亭の玄関をノックします

### 自衛隊に

民衆を守るために泣きながら打つ銃
災害対応として瓦礫の街を探し回る
私は正義のために違憲な存在と非難するが
彼らの悲しみも少し考えてと思う

## 自暴自棄

あああああああああ！もう嫌だー疲れた
北のミサイル、中国の海洋進出とかに
ああああああああ！もうわからんのだ
福祉と財源に、環境と雇用維持の調整
あああああああ！あああああああ！私は今
眠りながらハート止まりやがれと願う

## バンダイナムコ

仙台市内のゲームセンターで太鼓の達人
両親に車椅子押してもらい私は遊んだな
この想いでくれたあなた達に感謝と激励
込めて筋ジスの私はこのポエムを紡ぎ送る

## こころのなか

人のうっかりミスも　意図的な嫌がらせ行為と
人のポロポロなみだ　打算的な感情操作行為と
人の本心と関係なく　そうみえるのは私の部屋
こころのなかが　ぐちゃぐちゃに崩れるから

## 他力本願

私は筋ジスの三十路近いから自身で
才能もないから輝くことをやめました
好きな政治家や芸能人を応援して
他人に輝き託すことにした夜の病床

## 世の中に一石

あなたたちの正義に基づいて調べた結果
綴られた社会の歪みを正す伝道師よいけ
国民の一部にいる苦情と暴力に負けずに
私はジャーナリズムの勝利を信じている

## 宣言

黒いけど癖になり　暗いけど希望ある
そんな詩人個性　筋ジスの私は欲しい
拙いけど味があり　簡単でも奥深く
そんな文学特性　込めて死ぬまで綴る
病床から沢山の作品パソコン駆使して
好きな音楽 iTunes でリピート再生し

## あわれなり

きらいきらいきらいきらいなんだおれ
なぜかなぜかなぜかなぜかきみらがな
ちせいとひんいをしかくでこじとかし
かがやきとさいかくあびてひけらかし
おれをあざわらうようにみえたからだ
たぶんおれのひがみとちいさいうつわ
つうかんするからだときんじすからの
れっとうかんにゆきふるびょうしょう
なおしたいとなげきをぽえむにたたく
すぐにむりするとわれるがらすゆびで

## ポイズン

人のことをけなしていると自身も傷つける
そう思って汚い言葉をガラス瓶にしまった
私は代わりに人のことを励ますことにした
自身の心を希望の青い錠剤で癒したいから

## 生きることなんて

何かある生きていて　なんて言われると
何もないというだろう　筋ジスとか無関係に
でもねサーティワンアイスうまいとか
乃木坂の新曲や番組楽しみだとか
ちっぽけな蠟燭の希望が火に灯る
竹内涼真の演技やアスリートの動き
政治家の語り合いや多様な商品に
無限ループほどの色彩が広がる
世界や宇宙の課題や神秘に
計り知れないページの事象がある
昨日は嚥下出来ても
明日は嚥下出来ない
そんな不安を脳裏に
眠れない夜に病床で嘆く
昨日は日本があっても
明日は日本がないかも
そんな未来を妄想し
笑えない現在に仙台でやけくそ
私はだから生きているか語れないが
少しずつ可能な範囲で美と喜び
手にしたいから生きてやる

私はだから煩悩と試練に苦しむが
命になれた責任として命以前達に
申し訳ないから生きている
再放送といえるほどのデジャヴな
テレビ番組やYouTubeみたり
不条理と思わせる対応他人にされたり
不毛な時間浪費といえるほどの
ポエムを綴り
随筆を記して
レターを綴り
絵画を描いて
今を生きる　過去を歩んできた
足跡残して

## 雄叫び

ううううおおおおおおと
世の中の不条理叫びながら
病床のベッドから午後八時
喉奥から痰を吸引器に

## 図星

他人に言われた真実は侮辱といい
自身の言われた侮辱は真実という
そんなもんと野党と与党のやり取りに
人の本質みた病床のベッドからテレビみながら
タイトル本当の権利を
国の奉仕者　専門の知識人　情報の伝道者
企業の聖戦士　文化の表現者　魂の救済人
そんなあなた達よ　市民の不条理な要請に
奴隷でなく対等だと　沈黙の行進で赤旗降れよ
対価は払ったとしても　幸福追求権は労働者あってこそ
私は病床のベッドからマルクス主義電子書籍読む九月夜

## 波紋

一石満月浮かぶ池に投げる
時間ゆっくりと世界に変化が出る
私は病床の夜筋ジスとして無謀な
意見で変化させるか世界を

## あの世から私は

私の遺影で泣き出してしまう
母と恋人の姿にやめてくれと
肉体のない私は梅雨に騒ぐ

## 線香花火

夏の夜にチチチパパーと火花咲く
それは密かな信仰と似ている自宅前道路

## 小学校

祖父は一階から二階の教室
私背負って大変そうに向かう

## ロシアンルーレット

環境、空間、時間、対人関係により
死の実弾数が変化しているだけで
誰でも日々回して運よく生きると思った
夏休み期間公園のベンチ水鉄砲遊ぶ

## 親子丼

実家で夕飯に母の手作り嗜んだ
懐かしさから涙がぽろぽろと頬に

## 幼少期夏

虫がちちちち　風鈴がチリーン　窓開けて
茶の間は自然と統一されたのは今の私は
実家での記憶病床のベッドから忘れて

## アルバム

今から過去にめくります
家族の思いと命感じた
実家で懐かしさ嗜み窓から秋風

# 中村利恵

―北海道在住―

## せめて愛だったと云ふ事にしておこう

それは
長い 長い
逡巡 でした。

私には
ひとつ だけ
どうしても 払拭 しきれない
ココロに へばりついて 離れ ない
根っこ のようなものがあって、

十歳の時
二十歳の時
三十歳の時

その時々
受けた この 『生命』が

ゆるり ゆるり 過ぎていくには
長い ものだと
どうしても 思えず

すべてが
『一炊の 夢』

それは あまりにも 儚くて
それは あまりにも 頼りなげで

だから
どうしても
生き急いで しまうんだ。

ある時は
ヒトと 自分の中にある
『砂時計』の落ちる 速さの違いに 愕然 とし

また ある時は
ヒトと 自分の カタチの違いに 腰を抜かし

オドロキ ながらも
ガク然と しながらも

短かすぎる 人生、
思うように
生きてゆかなきゃ

短かすぎる人生
あっというまに
過ぎて しまうよって。

伝えようったって
伝えきれるはずもない
想いのたけも

今 伝えなければ。

あの ね
「また会おうね」と云って

また会うヒトと会えなかったヒト
正直、会えてないヒトのほうが
あたしは多い。

もう 会えないかもしれないということは

死ぬまで会えないということで
死ぬまで会えないということは
死んだって 会えないいうことで
死んだって 会えないいうことは

もう
それは 未来永劫 会えないいうことで。

そんな恐怖に
アナタ 耐えられますか？

だから
私は
どうしたって

生き急いで しまうんだ。

今 云わな ければ。
今 伝えな ければ。

なんとも
わがままな 愛で
ごめんなさいね。

そんな 愛が
あったって いいでしょ

だから
ごめんなさいね。

貴方に 伝わら なくて。

## ヒトに云わせれば

他人に云わせれば
それは 戀では ないそうだ。

他人に 云わせれば ただの
あたしの
勝手な 思いこみ。

へぇ。
いろんな ひとが
いろんな ことゆって
いろんなこと するけれど
そんなヒトたちの
勝手な思い込みが
地球を廻してるんじゃ
なかったでしたっけ。

うちの父は
『ジャガ芋のお味噌汁が好き』
母は せっせと つくり続けて 何十年。
ある朝 父の
「父さん…ジャガ芋の味噌汁 苦手だな。」
ぼそっと云った一言に

爆笑 する。

おと―さんが 黙って食べてるから
おか―さん 好きなんだと思って
せっせこ 作っちゃってたでしょうよ。

三十年連れ添って これ。
あんな坂 こんな坂

共に 寄り添って
お互いの 知らない事など 有り得ない ふたりで
さえ これ。

母の大爆笑 と
父の テレ笑い に
あたしは かなり
安堵 する。

ぁ、いんだ それで。
ぁ、いいのね それで。

いろんな ひとが
いろんなこと 云って
いろんなこと するけれど
感じたことが すべて。
それが すべて。

## 奇妙な世界

重タイ 鈍色ノ 空ガ
縦方向ニ 細切レ ニ 動イテ

刃物デ 切リ刻ンダリスルモノダカラ
アタシノ 意トハ 全ク 逆ノ
奇妙ナ世界ヲ 造ッテシマウ。

歩ク 為ニ
足ハ 一歩 一歩 踏ミ出ス ケレド
足ノ 裏ニ 伝ワル感触ナンテ
今ノ アタシ ニハ 何ノ
手立テニナド ナルハズモ 無ク。

痛ミ　ナンテ
ソレハ　モハヤ　モウ
御伽話ダカラ。

一秒 前ニ　コノ足ガ
自分ヲ　ドウ　支エテイタノカ
思イ　出セナイ。

眠ラヌ魂　モ
鎮マラヌ魂　モ

アタシノ意　トハ
全ク　逆ノ

奇妙ナ　世界ヲ
造ッテ　シマウ。

## 暖かな　暗闇

普段 使わない
エレベーターを地下迄 降りて

普段　通らない
鎮まりかえったロビーを歩く。

非常灯が　カラカラ 音をたてて
昼間の喧騒が闇に吸い込まれて

自然
心拍数が　おちる。

誰も居ないはずの辺りから　してくる　たくさん
の
『気配』　は

私を　斥ける者達か
それとも
私を

護り　見続ける者達か。

長い　長い　廊下の　その先を
ほの暗い闇の　その先を
私は　ゆっくり
睨みながら　わたる。

本当の　『孤独』　が
このての　ものだと
どうしたら　証明できるのだろ。

## 瓔珞

さまざまの　飾り荷持を　ぶら下げて
鶯いろの　男が　通る
―男が　通る

さぁ　さぁ　皆さん　見てください。
私は　ここに　居りますよ
どうです　皆さん　素敵でせう。

―そして　男の　知らぬ間に
肩に　ひとつ　また　ひとつ
腰にも　ひとつ　また　ふたつ
飾り　荷物は　増えてゆき

どうです　皆さん
とても　きれいで…

飾り　荷物の　増えるたび
威勢の　良さは　すこしづつ、

飾り　荷物の　鈴の音に
はたまた　鳴り物　金物に

男の　声も　かき消され

さ…ぁ…　さ…　みなさ…
わた…　こ……　おりま…
ど……　みな…　、すてき……せう…

さまざまの　飾り　荷物を　ぶら下げて
うぐゐす　いろ　の　男が　通る
―男が　通る。

## キリェ・エレイソン

キリェ・エレイソン
自分と　同じピースを捜すのは　もう　やめよ。

いびつなカタチ
どこ　捜したって
あるわけ　ないんだった。

似たような　カタチが　あったとしても
同じカタチの　ピースで
夢　や　自分　や
ひとつの　絵が
完成は　しやしないんだ。

同じものを求め過ぎて
同じじゃないものが許せなくなって

それで　息苦しかったんだ。

なんでこんなに
絶望しながら
生きなきゃならないのかって
眠れない夜も
もう　さよならだ

絶望したとしても
もう　絶望しなくて　いいんだ

どうしても
自分と　同じ　ピース
どうしても
捜し続けてしまったとしても

もう
捜さなくて　いいんだ。
あたしの　まわりには
あたしと　違うカタチの

ピースしか ないんだから。

違う カタチを 捜そう
違う カタチを 求めよう

絶望 しながら。
傷付き ながら。

キリェ・エレイソン
主よ 導き たまえ。

## 綴じない 傘

紐がちぎれて
傘が綴じなくなった

結ぼうと したけれど それは 短すぎて
てのひらで まとめようにも
それは 冷た すぎて

雨に うたれて わずらわしくて

まとわり ついて わずらわしくて

遠ざけようにも 雨は 未だ やみそうにもない し
揺られる 電車の 鈍色の
硝子に 落ちる 雨粒の

ふくらんで なす術もなく 堕ちる その
苛立ち にも 似て

いたしかたない から
輪ゴム で
留めた。

## 名残る雪

もう この冬も
終わりだね

昨日降った雪が ほら
もう 溶けて 水溜まりになってる。

不思議な もので
あしたには
消えてなくなると
思えば さみしい。

だのに
名残る 雪は
せつせつと その身をつのらせ

名残る 雪は
夜に あした に降りつのり

名残る　雪は
音も なく

名残る 雪は
ただ しんしんと 胸に つむ

名残る 雪 よ

明日には 消えてしまうのに

名残る 雪 よ
取り残された　私のことなど　おかまいなしに

名残る 雪 よ
跡形もなく
名残る 雪 よ
消えてしまえば　いい

## 薄紅

秋は
薄紅。

手稲の　稜線。

雲間より 光 出でて
神々たちへ
祈り 仰ぎ。

いくばくかの
希望と ともに
永遠に 幸 あれ。

秋 は うすべに

こもれび
さやけさ。

はなかわの
いまだ 残れる 深緑の
もれいずる 静けさ。

秋 は うす べに。

## 山田留那

―東京都在住―

### 美しい歌のためのエチュード

私は歌を歌おう
美しい歌を

美しい歌を作るなら
私は小瓶一杯の疑問符と
豆電球の小さな光をそれに閉じ込めるだろう

美しい歌を作るとしたら
彼女は心地良い柔らかなパイ生地と
ひと匙の恋心をそれに閉じ込めるだろう

美しい歌を作るとしたら
ふたりは爽やかな風と甘酸っぱい心を
それに閉じ込めるだろう

美しい歌を作るとしたら

彼はコップに入った寂しさと後ろめたさ
それと四分の一の希望を
それに閉じ込めるだろう

私はそれを歌おう

そして誰かは楽譜に憎しみを綴るだろう
美しい歌の為に
何故人は争うのかと
世界への憎しみを
綴るだろう

私は全部受け止めて
歌を歌おう
それが恐らく美しいということだから

## ちゅうがくせいたち

ここは学校
放課後の学校
で

夏の青空遮りながら
遊ぶ子達

じゃれあって
ふざけあって
しょうもない事で笑って
でも
なかよくしてはいけない
中身を知ってはいけない
そんなタブー
コマンタレブー

For example

君と触れ合う
澄んだ心のあの子
とずっと一緒にいたいなら
喉奥に潜めたその気持ち
告白とかそういうのは
解き放っちゃならんのだよ

情と能が摩擦する
恋愛関係純情衛星
どっと どっと
溢れ出す
のを抑えて
艦橋 社交辞令
すっとご健全に
お淑やかに

音楽室
たむろする
華奢で陰気な
お友達

窓の
アルミの桟から
乗り出す身を
大事に育てた
子供達

自分にゃ
どうでもいい事なのに
睫毛の長く煌めいた
君だけ
君だけ目が追ってしまう

あゝ

そうか
これが恋というものね
じゅんて じゅんって
絡みついて
死んじゃいたくなる

しんぞうにわるい青春なのだ

## 愛と genius

十六才
今 私は空を仰ぐ

窓際の　馬鹿なくらい　青い　青い空　狭い空
少しだけ古臭い机と教室の匂い
遠くに置かれた口煩いスピーカーを
聞き流しながら

（授業の内容。天才児であったとある人の事を
習っている）
そんなの私には関係無いけど

誰しも皆んな天才なのさ気付いていないだけで
でもまあ
闇雲に探して走り回らなくてもいい
きっと明くる日が　その日が来る　来るから
今は木偶の坊でもいい
後少しだけ待っていて

世界中の人間は
生まれつき
それぞれ一つの音を持っていると思うの

聴こえないけれど
きっとそうなの
この捻くれた音も
きっと『私』に違いないわ

だからね
『アイデンティティ』って言う私の武器で
いつか音叉をぶっ壊して
自分にしか出来ないことを
しでかしてみせるの
今
ほら！

私のなか、で

ぱっ

と騒いだ心の中で何かが出ようとしている　殻を
破ろうとしている
産まれようと　叫ぼうとしてる！！

# 僕が思うに夢とは

僕が思うに
夢とは
ah lalala
夢とは
アスファルトからシロップに変わるためのあぜ
道
空っぽの体で夢を見る
カスタネットが雨のように
サラウンドは鹿の歌で
満たされる 満たされる

五月雨の映る コップ（水溜り）に
ゆらゆら映る僕は
どうやら どうやら
朝を辿る
朝を辿る
ようで

嗚呼
浅瀬を泳ぎながら歩いていると
ふと
寛容な土たちに足を取られる
深い所まで
置いてけぼりにされるみたい

足のつかない
足のつか
ない
其処は
何か
何かなんだ分からないものがある

得体の知れないものがある

いや　知っている
何かに似ている

そ

れ
は、
？

（ふと 重い扉を開ける）
ふと 重い扉を開ける
明後日 明々後日
今日も駆けよう

夢の

## 駆けていく乙女

卯月皐月水無月
七月の校舎
休み期間の今日は
人が人っ子おりません

ぶりかえす
男の子の瞳が
左頬を撫でる感じ

勘違いもいいトコだ
僕は少なからずそう思った
フェザータッチなど言語道断
私 清き乙女
セーラー服に身を包んだ女ですから
紺碧の空の下

白い校舎
捨てられた短冊を
元の場所に戻して置いた
真心込めて戻してあげた
気でいたな
でも本当の僕は？
ぐるぐるぐる羊回って行く
身ぐるみ剥いだ本性は
明日はどっちだ

私は走っている
爆速で心の中を駆けていく
左頬に

涙みたいな汗を垂らしながら
校庭のクリーム色を
陸上部が数人走っていく
のを窓辺で見ていた私です

頭が遠くなって
みんなみんなを嫌いになって
三角を参画し
たりらったった
空いた教室鍵はなく
灯りもついていない
空だけが光るくらくら
駆け込んで
バッタの瞳が
じーっと私を見てる
ＪＳの時だけ好きだったバッタが
外見の私を見てる
トイレの隅で
静かに佇みこちらを見ている
うざいなー

僕の気持ちを
この季節を
忘れることはないんだろな、
詐称感と無表情で悟る
棒付き飴を
しゃぶってリップ音付きで
農村部を歩きながら思っていたんだ

花火大会の
誘いを無視して
電車へ乗り込む
誰かが僕を乗っ取って
動かしているに違いないから

今日は
蒸して涼しい夏なのさ
この空が煽って言う
つもりなのさ

黄色い電車が
僕の気持ちみたいに走っていく
明るい今夜
さよならみたいに走っていく
カストリ記者を
跳ね除けて僕が走っていく
なんだかうさぎみたいです
白夜

花火の音が遠くなって行く
花火の音が遠くなって行く
花火の音が遠くなって行く

頭の中が遠くなって行く

## 極彩色ぱすてる

肌寒い二月
朝を怨む
貴方の声が微か聞こえる
嗚呼そういえば身体が火照るの

今日は小春日和

すっ、と
舌を噛む貴方の
ピンクの中の紅が色濃く見えた

白い肌にそっと赤が映える
それきりなんだ嗚呼

黒の髪に紅白の媚薬が交じった
それきりなんだ嗚呼

それだけじゃ何もわからんと思うが
確かにそれだけなんだ

何も理解されないだろうが貴方は
陽の光に照らされたベンチのようだ

ふっと笑ったみたいに僕の名前呼んだ
それきりなんだ　嗚呼

なあ
それからなんだ
嗚呼…なんだ
言葉に言い表せないけど
それからなんだ
極彩色

# 招待席

## Eli in church

―東京都在住―

### 夏隣の亡魂

山奥の精神病院へ、一時期、人目を忍んで通ったことがある。あまり快い記憶とは言えないが、私の心許ない根幹を支えているものの一つだ。極めて重度の患者を収容した施設が外来の隣に別棟として建っていて、一度、見学に入った。カウンターを飾る、ＯＴで制作されたと思われるアート作品の類はどれも色調がいやに明るく、その分底知れない不気味さを感じさせた。その一線を越えるだけで容易く手に触れた、人々の、あらゆること（生、時間、注射針を手に行き交う看護師）に対する無関心な態度や立ち昇る痛苦に、不思議な居心地の快さを感じたことを鮮明に覚えている。おそらく当時の私も同じように病んでいたからこそ、剥き出しのコンクリートのように冷えて固い、無機質とさえ受け取れる透徹な彼らの心根に呼応したのだろう。

精神を病むということは人にとって欠かせない成長過程の一つで、おそらく誰しもが体験するものだが、また多くがそれを軽度ないし中度で済ませ、大人へなっていく（しかし彼らが味わう辛酸は人と比べようがない苦悩を有しているので、ここでいう軽度などの尺は彼らの辛酸がどれほど‘病的’かによって区別されるのだろう）。私は永らくその過程の或る一か所に留まっていた。

病んでいる間、私は己を巣食う病魔と斜め下から話し合った。内容と言えば専ら己の保身に関わることばかりで、成長や回復の兆しを見せることもなければ、後退するばかりだった。私は十代のあの頃へ、或いはそれよりもっと以前、母の胎にいた頃まで遡り、意図の掴めない愛の意味を、自らの裡で蒼白い炎を噴く鬼火によって煮詰めて嚥下し、ありもしなかった青春を組み立て解体しては、悦に浸っていた。今でも病魔と言葉を交わすが、彼と私の視線の高低差は以前ほど大きく開いていないだろう。それでも私は大人に成り損ねている。帰ることが許されるなら帰りたい、戻ることが可能なら今すぐにでも時間を遡行したい。そう願って死を思い詰めるのは幼子のやることだといつか、見知らぬ人に諭されたことを覚えている。

その日、昼過ぎだったと思うが、私は狭苦しい待合室で荒い息を吐いては卒倒し兼ねない震えを持て余した患者の列に紛れて、診察に呼ばれるのを待っていた。彼らの狂気に比例して、院内は薄暗く、夏場に入る頃だというのに何処か薄ら寒かった記憶がある。手繰り寄せた薄手のセーターにほつれがあるのを知り、私は平常心を保てなかった。細い糸の先が針のように見えて、治療のために私を羽交い締めにする医師の亡霊が眼前を幾度も往復した。一人の患者が奇妙に湾曲した足首を引き摺って歩く音、鼓動をはやめていく心臓に反比例して遅々と進まない時計の秒針、院を囲むように植えられた樹々の

激しく伸び縮みする影、私は覆しようがなく怯えていた。小兎のように身を竦ませて、視線は常に定まらず、額に奔流のように流れる汗が眼に沁みて涙が出た。弔衣を連想させる漆黒のワンピースに落ちた一粒の涙は真珠のように尊いものだったが、それを知るのはもっと後のことだった（そしてそれを理解する頃には私の眼は乾涸びていた）。

自分の名が呼ばれて、命からがら診察室へ入った私を待っていたのは担当医の辛辣な言葉だった。迸ると思われた涙はどうしてか堰き止められ、震えていた脚が不意に静止した。ときが停まったかのような静寂の間、担当医はカルテに一言二言とってつけたようなことを加えただけで、追い払うように私を診察室から放り出した。待合室を出て長い廊下を歩いている間、なぜ自分が正気を保てているのか、不思議だった。狂気はすぐ隣にいた。担当医の指摘は的確だっただろう。その分だけ、狂気は私との距離を詰めていた。私の身体にしなやかな腕を絡ませて、喉笛に触れる狂気の手をまざまざと感じていた。猫の喉を撫でて飼い殺すように、雁字搦めになった私の心を手懐けようと画策する真っ白い手はやがて窓から射し込む昼下がりの陽光に照らされて溶け、どろどろと蝋のような手触りで背を濡らした。私はなけなしのプライドを思って狂気を噛み殺したのだろう。やはり砂を噛んでいる心地だったことを覚えている。

人も車も滅多に行き交うことのない、沈黙の裡に閉ざされた道路を一本挟んだ薬局で、再び震えが走った。理解者だと（一方的に）信じ込んでいた担当医から否定されたという事実が私の病魔を活気づかせ、新たな生気を吹き込んだのだ。彼は私を詰り、貶し、かと思えば奮い立たせるようなことを言っては底へ突き落とした。担当医が実際に口にした言葉に様々の尾鰭を靡かせて、彼は私を嘲笑し、手助けする。すっかり参ってしまった。薬が処方されている間、おそらく番号が呼ばれるまであと五分もないが、私は

椅子を引っくり返し、自動扉が開くのを待ちきれずに蹴飛ばし、番号札を千切って風に預けてから、山道を登った。

時折、前方を過る猫がいたが、昼どきだというのに宵闇を吸ったような深みのある暗がりを湛えたまなこは私の気を惹き、さらに奥へ誘った。屈託のない澄んだ声で鳴く小鳥が私の頬を掠めて飛び去り、何処からか滾々と湧く水が地を穿つ音が私の足どりを確かなものにする。死へ向かうことだって願った私の虚ろな足音はせせらぎに浄化され、研ぎ澄まされ、あと一つこの山を越えれば黄泉が広がっているような気さえした。中枢部でぐるぐると回っていた様々の罵倒が徐々にほどけ、細かく散らばっている数多の神経へ吸い込まれていく。吸引性の高い私の神経は悦びのように罵倒の残滓を引き寄せ、昂っていく死への衝動に火を点ける。道は少しずつではあったが確実に狭まれ、そこから先は枝垂れる木々を飾る豊かな新緑が夏の予感を引き連れてゆく手を塞ぐ。頭や肩に降り積もった、夏が噎せ返る葉に見惚れながら、私は息を潜めて、視界の奥に佇む茫漠の薄明かりへ手を伸ばした。薄明かりの下になにかの啓示のように置かれていたのは、切断された鹿の足首だった。

或る程度の時間が経っていると思われた。その証拠に、血生臭さは全くなく、傷口に蛆が這っているわけでもない。その小さな死を祝福されたように、傷口には新たな植物の根が這い、つぶらな雌蕊を覗かせる愛らしい花が咲いていた。

（この一帯では鹿が町まで下りて来て悪さをする、ということで、鹿狩りが幾度か行われていたそうだ。おそらく眼前に放置された足首も、トラバサミなどの罠にかかった鹿の落とし物だろう）

私は嵌めていた手袋をそっと外し、脇に放った（手袋をせずして何ものにも触れられなかった私の臆病さが、身体の中枢に吹き込む涼風によって快く拭い落とされていくようだった）。そうしてなんの怖れもなく触れた鹿の足首は、生暖

かった。陽射しを吸って、生きている頃よりものびやかに寛いでいるそれは、私の眼に聖具のように映った。或いは傷口の生々しさが余りに現実離れした美しい花に覆われていることによって、目眩のような美への敬意が私を支配した。掌に包んで持ち上げると、幾匹かの子蟻がぱらぱらと地へ落とされた。私の真っ黒い悪意を全て吸ったかのような、蟻の漆黒の頭部は、かろうじて残っていた邪気をも奪い、四肢も心もからっぽになった。肉体の内側でどくどくと煩かった血の脈動も、心に走った裂傷が疼く様も、もう感じられなかった。刃先にテトロドトキシンを塗り込んだような担当医の一言も、死に急ぐために山道に分け入ったことも忘れ、私は若干饐えたような鹿の野性味ある香を嗅ぎ、ときには舌を這わせ、今度こそ自然に湧き出た涙を降らせた(テトロドトキシンは一般的には猛毒であるが、或る条件内では神経保護作用を持つ。当時の私にとって、担当医の一言は猛毒に比類するものだったが、数年経った今では神経を守る盾として活用出来ないわけではないため、この表現を用いた)。

一年だけ、本当に狂ってしまった人たちの巣窟へ足を運んだことがある。山奥の、濡れそぼつ藍色の紫陽花を入り口にした廃墟のような病院で、担当医の気分によって吐かれた邪険な言葉に対し発作が起きたように死を望み、薬局を脱走した先で視界を覆った新緑、清涼な水声、生に忠実な動物たちの死を予期しない真っ新な瞳、暖かくもあり冷え冷えとした足首が今も瞼の裏に載っていて、懐かしさに殺されそうになる。それでも今、私は生きていて、殺されそうになっている自分に恍惚と拒絶を覚えながら、時折手袋を外し、乾涸びたまなこを覆い隠すまぶたに執拗に触れて、真珠色の涙よ零れ落ちておくれと祈ることを、やめられない。

候補作

# 北海道

## 林　栄子

### 石を抱く
### ～ある戦争未亡人の手記によせて～

その日も
陽は昇り
わたしたちはいつものように
朝早くから起きだした

食卓には
あなたと
子どもと
わたしのお膳が
仲良く並んでいます

生まれた我が子を
ひと目見て
出征したあなた
終戦から十三年ののちに
国から届いた白い箱には
一枚の紙切れが入っているだけ

これが
あなたであるはずがない
きっと
どこかで生きている

そう信じることで
今日まで生きてきた
そうして
これからも

ある日
河原で
あなたを見つけた
あなたの足によく似た石を

家に持ち帰ると
こどもたちも
とても喜び
一緒にお風呂に入り
笑いあい

語りあう

やがて
夜の深みのなかで
わたしはひとり
冷たい石を抱く

手足がひんやりと
いつまでも冷たいのは
石になったあなたが
わたしのなかにあるから

からだの奥深くしずめて
何度も　何度も
あなたを呼び戻し
産み落とそうとした

でも
生まれたのは
冷たい石のこどもたち
今宵もまた

わたしのからだをこごえさせ
仮死の道をたどる

何十年たっても
頭の中から消えない

戦争は人殺しではありませんか

もう
おんなたちに身ごもらせてはならない
おんなの腹に
今も重く沈む
ひとつの石

## はだゆうり

### 泣けるなら泣きたい悔しさ

今までの悲しみや悔しさは
その当人にしか解らないものだから

だからこそ儚いのでしょうね
愛する尊さや慈しむ尊さを
最近見渡したら見渡す程に
尊さを忘れている様な気がするわ

此の世界で今まで女だけれど
一家を背負い死ぬ思いで
生き抜いて駆け抜けてきたの
背負わず無いものばかり
当たり前ではない暮らし
罵倒や否定の嵐から
私は小さな君を守って来たわ

昔の友人は私は逃げていただけで
小さな君が可哀想だと言ったわ
私の中で生きる為には方法は
私の心と身体を売るしかなかったの
小さな君を守る為には仕方なかったの

昔の友人は許してくれないでしょうね

私のしていた事は最低としか思えないでしょう
から
苦しくてもがいても私には
助けてくれる人は居なかったわ
周りの友人には助けて下さる血縁者がいたから

外では私は大丈夫そうに見えています
外では息子も大丈夫そうに見えています
ならば家族は私をサンドバッグに
する事を辞めはしかなかった
幼い頃からお月様になりたいと
心の底から願っていたのは
今も余り変化が無いのが小さな君には
本当に失礼だし生きる希望の背中を見せれない
よね
小さな君も私にも人に見せられない傷がたくさ
んあるね

もうサンドバッグじゃなくて良くなったけれど
新しい土地は人にすれ違い様に平気で暴言を言
われ
若い男性も女性も私には
恐怖の対称でしかなく
だからかといっても満員電車で
私の臀部を触る輩も居る訳で
苦しくてもがいても誰も助けてくれない

私の様に生まれながら
棘道を歩くしか方法しか無く
其なのに高校に行けて大学にも行ける
努力無く入った一般企業の中の学力社会で生き
て
やる気の無い目そして死んだ魚の様な目をした
人間を

一番私はえげつない方法で
一番私は苦しみに悶える
顔を見ながら処刑したくて堪らないの
当然の報いなのかしらと私は思いますわ

働けないんじゃないでしょう？
全身の筋肉が張り裂けそうな痛みが
毎晩毎晩毎晩毎晩やってこないでしょう？
やって来るなら私と手を取り合いたいです
やって来ないなら死ぬ気で一回で良いから
働いて欲しいのです

此の手の取っている
スマートフォンは何れ程の行程で
一代に何れ程の人が関わっているか
知っていますか？
調べたことありますか？
ギャンブルに生活保護のお金や
障害者年金使わないで下さい

そう言う人の半分はきっと
地べたに落とされた食事を
お前の飯は此れだから
姉と弟は普通に椅子に座っていました
私は箸等はなく犬同然の扱い

そんな扱いされた事は無いでしょう？
ならパチンコや入る前に働いて下さい
私は身体も精神も障害者の筈なのに
医師のモルモットなのです

未だに私はお月様に為らない様に必死です
未だ未だ這いつくばるしかない様で

## 小篠真琴

### 無意味

かつての、
古びた音符が戸惑う唄の数々は
もう既に過去の遺物となりました
腐った肉片が
まっ白な耐用年数を過ぎた太陽を拝むのなら
ぼくは、いつまでも

喫茶店で時間を潰す、にぎやかな日々
その節々にある肉声を
この皴のすき間にうめ込むように
語り尽くすのでした
語り合いたいのでした
語ることで
理解し合えると思っていたのですよ、本当

救急車が走るたび
お前は何者だ、と言われている気がして
空砲が鳴る狭き町中を
両手を伸ばしてつかめるような気がしていたから
まだ、毎日を
くり返すように過ごしているのです
本当の事です
すこやかなる日は
訪れないでしょう
私には聞こえません
天使の産声は

消し飛ぶのが常なのです

「わたし、こう見えても」
「いや、やっぱり、私
私以上にはなれないんだわ
そうよね」
それが言いたかったのか、
今生を込めた蟠りを抱えた音声が鳴る
「そうよね、やっぱり、私」
「いや、わかったから
雪虫の毛をひん剥いて、はだかにして
その綿飴をくちに含んで
涎だらけにできたなら
有り余る日射しの後に
都会の隠れ家を見つける
そうだろう」

そうらしい
それが我らの目的らしい
本音では言えない音階が泣きつづけている

どうやら、うつくしさは
必要ないらしい
ぼくは無意味だ
無意味を体現している日々だ
そう思う
思える
思いたくない
思い込む
思い出した
俺は、俺は、湯豆腐の昆布だ
昆布飯を喰らってやるぜ
アルカリイオン水に身を任せ

## さよなら

三分おきに化粧を変えて
ぽっくり青空、あおいでみようよ
ここち良くなるあさってに
ぼくらは視線をかんじてた
かんじた視線を糸でむすんだ

だんごになった糸くずを
容姿端麗、美少女に
洗顔しながら問いかける
「ちょっと、目尻にしわできて」
「いつも以上に、気になって」
「おこった顔したあの人を」
「きょう、想い出し」
「なんだか、会いたい」

赤とんぼだけ飛んでいた
じぶんの姿も見られない

青信号ではてくてくあるく
ふだんはいつも立ち止まり
きょうくらいだけ
あるかせてよね
まっ黄色なの、町の信号
どうして、あの子はすくわれて
どうして、あの子はすくわれない

みんな、みんなで輪をつくり
輪を切りはなし
また、輪をつくる

泣き声あげた、赤ちょうちん
鼻水垂らした交差点
たしかに、ぼくらはここにいた
きのうの夜もここにいた

また、いたずらか
かばいきれない
ひと息、ふた息
各駅停車
中央線では分離帯

ガソリンスタンド混みあっていた
港の灯台、ゆれていた
観光名所は大海原で
青い岩礁、深海目指す

わがまま言って、さようなら
恋した夏に、さようなら
恋した雪は
もう帰れないと
いつも以上に
さよならいった

## あさひが見たい

お風呂上りって、ねむくなるよね
そうだね
地球温暖化なんだって
だれが言ってるの？
さっきまで青空だったよね
そう思ってただけじゃない
そらの青さは、光の加減で変わるんだって
寝てても、青空見えたっていうじゃん
少し肌寒いね
でぶには蒸し暑いくらいだよ
さっき、友だちと電話して楽しかったな
話した気になってるだけじゃない

職場でいじめられてるんだ
あなたがそう思うからでしょ
いま、午前二時だって
時計が狂ってるだけよ
お腹空いたね
お腹いっぱいって、もう食べれない
ぼくは、あした死ぬんだ
いま、生きてんじゃん
彼女に振られちゃった
来週会うんでしょ
上司に嫌われちゃった
お前とは縁を切るって、言われたの
函館が好きなんだ
新聞で読んだんでしょ
お金がないんだ
みんな、ないのよ
からだが融けていく
目をつぶれば大丈夫よ
憧れの人は実在しないんだって
あなただって、いてもいないようなもんよ

だれが世界をつくったの？
あなたの世界はあなたがつくるの
とんぼが泣いている
ほんとだね
夕日がきれいだね
ほんとね
地球が回ってるね
そうね
美人は得だね
ほんと
贅沢したくない
うそおっしゃい
映画観たいな
町を歩きなさい
少し疲れた
ねたら
うん、寝る
じゃ、おやすみ

今日が、きょうという日をのみ込むとき

海は海色を嫌うらしい
そらが、お空に変わるとき
鳥が三羽とぶらしい

あしたの神は
あした目覚めて
きょうから、一瞬
預金を引き出す

だから、最後ね
もう、眠らなくちゃ
神さまだって、人恋しくて
ま夏の海を
想像している

よく噛まなくちゃ、お腹痛いよ
最後の夜は
これから沈む

もう一度だけ、あさひが見たい

## 伊藤結菜

### 眠らせたままでいて

床に擦り付けた額は君の静脈と繋がって、
二十二時三十八分、息をしている五秒前
寂しいままの薬指をあいして欲しくて、揺れる
真夜中、僕の心臓は左側になんてない
緩やかに　瞼を閉じればいい
そのままあいに　身を委ねていればいい
宇宙はきっとからっぽだから、君と僕、ふたり
きりの戦争が鮮やかに広がり、唇を重ねる、性
器を交える、睫毛の先端から溢れる情欲で君は
僕を殺してしまう
それでいい

それだけでいい
君と僕の間に夕方なんてハネムーンなんて羊なんて写真立てなんてエメラルドグリーンなんて脊髄なんてモスコミュールなんて高層マンションなんて酸素水なんてなくていい
今世界
ここが僕らの真ん中
真珠色の太陽が眩しく光って
破綻した夜空に、君の眉間は濡れていて、

## アフターピルとそれから

かなしみのなかに浮かぶたったひとつのまばゆいひかりに
わたしは毎晩いちごみるくの入浴剤を溶かして
揺らめいていくのです、閃光
愛情の途絶を感じながらまぶたを閉じる、
ベッドの上できしむわたしの背骨はあなたのすきなかたちだけに歪んでいく
もっと
みつめて
あなたの瞳に心にわたしだけが映るように射影機の角度を調節して、そのまま夢をみるように息を止めてもいいよ、だってどうやってもわたしばかり毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩
あなたの影に濡れて
伸ばされた指の感触だけを辿って。

# 青森県

## 竹森絵美

### 時非の花

爛月の夜
連理の枝が月光に浮かび
うっそりと比翼の鳥が頭上を行く
この世の輪郭は
脆く崩れ
名前に似ず
非常で卑しい郭公
見たい夢があるときは
会いたい人がいるうちは
のめり込むように眠った
夢を見尽くしたと思ったとき
なぜ出会ったのか
明るいあなたの体温
捨てたはずの真っすぐな誓い
あなたの背後に
涙のように懐かしい黄金の砂の波
諦めていた全き死

日輪のように晴れやかな気性の
あなたに
この杯を捧げる
昔まだ神を呼吸していた頃の
涙を汲んだ杯を
それはあなたに出会わなかった罪を
償うためのもの
今　この中有に止め置かれ
その意と形を保ったままで
魂の杣屋あなたと暮らす
その夢を共に見
この道を共に歩む
同じ臥し所に休み
愛を語り　時を食み
ただ　目覚めれば一人
あなたが笑う
花の一輪も差し出しそうなやさしい顔で
これは夢
終わるのが惜しくて
いつまでも醒めないでいる

あなたに辿り着き
あなたの知己を頂くまでの
一生であって構わない
この一個の身において
報われて余りある
わたしの頑迷な愛ひとつで
理すら曲げてみせる
世界の繋がりさえこじ開けてみせる
あなたを求める想いひとつで
想うがままの回路を開いてみせる
人を追い人を想うことで
まっとうされる生など
ありはしない
それでも　ただ
出会ったというだけで
それまでを失う
露を含んで冴え冴えと揺れる
竜胆のような横顔
触れるはおろか
同じ空気を吸うことも

叶わなくても
はるか昔
彼の日に消え
その輝いていた時を
見たことはなくても
日々に新しく
甘く切ないあなたの命
あの空はあなたの生きた空だろうか
この星は――

# 岩手県

## 三浦恵子

### 希望の空へ

光の向こう側から吹いてる　あの日の　優
しい風

心の内側から溢れ出す　この切なさは
君が流した　いくつもの涙と　同じ理由

その思いが
ただ　一度きりの声を上げる

過去の辛さなんて　早く忘れるべきだと
皆が　口々に言うけれど
この体が感じた　悲しみも　苦しみも
大切な人が　悩み　悔やんで　どうしよう
もないとき
誰より　側で
その痛みを察する何よりの　学びになるなら
僕はこの気持ちを　けっして　忘れない

辛くて　涙を拭ったあの日
張り裂けてしまいそうなほど　込み上げてくる
思いを
誰にも　気づかれないように
無理やり　飲み込んだ

本当に　誰も側にいないから　一人だと感じ
るときと
大勢の中で　感じる寂しさ
どちらの絶望が　孤独から溢れ出るものなのか

うずく記憶が
冷たい胸の内を流れるたびに　胸の鼓動は
熱い血潮となって　見えない傷を　震わせる

僕らは生きづらい時代に生まれ
夢を　描いても
実現できずに　散ってゆく

満たされない心を
見上げた空は　いつもと変わらぬ優しさで
包んでくれるんだ

消えてしまいたいと　叫んだ夜
泣き疲れ　眠ってしまった命に
優しい　朝の光が　頬を撫でる

そして　言うんだ
まるで　どんなに苦しみ
絶望する日に　打ちのめされても
明けない夜はないのだと

癒されぬまま　歯を食いしばり　生きる
無数の魂たちの悲しみに向けて
空は　命の限り　叫び続けている

どうか　自らを　終わりにしないでおくれ

ひとりじゃないと思えたのは
寄り添う愛を　学んだ人たちの　優しさが
何より　寄り添う力になっていたから

僕らは　傷ついた思い出を
人の痛みに重ね　いつの日か　共感できる
心を養う

どんな命も　誰かの生きる力となり　支えと
なれる
だから　誰一人として　必要とされない命
なんてない

すべての命を　世界は必要としている

その悲しみが何を求めているのか
心の痛みを聴くことは
君が　君自身を
必要としていることに気づくのと同じで
辛い日々を耐えしのいだ分
誰かの心に寄り添える　意味を
確かに　僕らは　知れるんだ

僕らはいくつもの逆境という試練を体験すること
で

幸せのありがたみに　気づける
寒い冬を越えた　僕らの心も
いつの日か　強く　咲くことができる

あの日の傷　すべてが
今　優しい空を見てる

雨　その静かな愛が　降り注ぐこの時代に
生きる希望を　空に描いて
このときを　生き抜いてゆくんだ

宮城県

## 来栖　優

### 煙草

あなたはいつも呼吸を詰めたがる
泳ぐときに便利なのだと
凪いだ息に怯える私に説明しながら
自分自身に課した愁いを眉に寄せ
僅かな悼みを私に刻みつけ
個々に至り他人なのだと知らしめたがるものだから
感嘆までには至らないだろう他に誰を信じたというのか
紫煙は下らない。昇ってゆくよ

この譲歩が他に漏れるとするなら
あたしは、いっそあなたの肺になればいいの
明日(あす)も元気だとしても暫く居場所を喪えってしまえ
己の景色にもうすでに限界を隠していたし
偶然にはない産物を捉えたくて

疑問符を浴びせて欲しかったのでしょうか
拙ない傷口から滴るには未だ早いので
現在地からは遠すぎるだろうけれども
二人の距離が離れてゆくのが怖かった
舌鼓を打つとしよう。心から

底へ底へ
潜ってゆくあなたは冷えきってゆくね
底へ底へ
泳いでゆくものだからもどかしくて

誰かに、宛(さなが)ら故意のようだと揶揄しながらも
声になどならない答えを冗句にしながら
当てにならないのに想像などしてはいられない
あたしは残像みたいね。他の女の子以上に
誰かを待っていられる余裕などずれた意図にしかならないのに
不意にすさぶ風は案外強い
ガードレールに添えられた花束のような

これ以上他に何を求めたとでもいうなら教えてくれよ
夜明けなら晴れがましくあれ。雨のうちに

## 溝に

斑に染まり天幕は掠れた声で囀ずる
鳥籠のうちに在るカナリヤにも似た
呪縛のようにそれは人の心を締めつけてやまない
命！
叫んでいるようでもあり
溝に転がる石榑(いしくれ)のような
助けてくれとばかりに泣き叫べたらどんなにか
あなたも負けじと救いを求めたはずなのに
春に遭えば薔薇が差戯れたようになるし、秋になれば月が高くなるし。
此のまま私(アタシ)が私(アタシ)で居られるだなんて
なんて、反吐が出るくらい感嘆な脚本(シナリオ)なのだろうと問うよ

カナリヤ、君は君なのだろうか
鳥籠のあるうちはよく解らない
盲信は既に辞めたのだということを私は誰に伝
えたら良いかな
若かりし時分の過ち、しがらみに罪と罰を与え
るとしたなら
どうせこの世と説くけれども。
明日は我が身と乞うけれども、

# 山形県

## 阿部みずほ

ヒトガタ

夢を見る

人が無造作に死ぬ
否、壊れていく

使い古した人形のように
何の前触れもなく
ただ
ぼろりと崩れ落ちる

それを見ても私は何ら感情も湧かない

何故か

問う

元々何も感じないのか

感じなくなってしまったのか
傷つくことが多すぎて
泣くことにも飽いて
辛くて、辛くて、息もできない
そうして、ただ、感じなくなる

ああ、そうだ
あの時崩れ落ちた古びた人形はおそらく
私、なのだろう

私はそっと、崩れたそれに手を伸ばす
それは、私の手の中で、さらに弾けて、崩れて、
ただの土塊になる
そうなって、初めて、涙が出た
ぽろり、ぽろりとそれは流れて落ちて
私だったものを潤していく

そうして
どうしたものか、そこから小さな芽が出ている
ことに気付く

失くしても、失くしても
崩れても、壊れても
そこにまた、息づくものがあるのだと
小さな命が教えてくれる

# 福島県

## 渡辺八畳

### その硬度は光度の低さゆえに

空は万力の片割れ
清々しすぎる青さは潰してきます
ほら見てみ　通勤時間になるから
ゴム人間たちが駅前にがやってくる
頭も手もただの楕円形で
装飾の一つも持ちやしない
唯一口の部分がスコスコとへこむ
呼吸はできなくても肺は動いているからだ
（ゴム照りの肌に少しでも穴が開いたら彼らは
死にます）
車輪に誰かが弾かれるので
チーズみたいな肉体破片がアスファルトの隙間
に入り込む
雪は当分降らないし
結局酸素もないままに詰まり続ける

てりてりの人間の動くさまの
雑居ビル群は開店前

鋼鉄製の大車輪が幅広い道路のまん中を転がっていく
金属の硬さ　冷たさ　強さ　逞しさ
一糸乱れず一列で移動するゴム人間
アスファルトに詰まった肉片が微かに震えている

さぁ燦々と太陽に焼かれて死のう
さぁ燦々と太陽に焼かれて死のう

# 群馬県

## 西谷恭介

### 鬼畜

善人面した正体はただのケダモノ
愛という偽善の裏側にあるのは
死の色を纏った刹那の衝動

今夜もあいつが跋扈する
この閉ざされた扉の内側で
剥き出しになった狂気
アタシたちを檻に閉じ込める

あどけないアタシの分身を
屈折した衝動で蹂躙す

アイツにとっては
要らない邪魔者
鬱陶しいだけのあどけなき笑顔
鬱積した感情をぶつけるだけの
血の系譜のなき肉の塊

幸福を求めて開いた扉の向こうは
幸福と対極の収容所
残酷な暴力の行きかふ日常
お金という虚飾で
アタシはアイツに服役した奴隷
快楽という渦に支配された只のオンナ
行き場のない液体がアタシの身体を汚す
独善的な感情がアタシの分身を傷めつける
嗚呼！！
アタシの中の良心がアイツに洗脳される
アタシの中の善良がアイツに犯される
嗚呼！！
アタシの中の悪魔が母親を殺そうとする
アタシの中の悪魔が分身を苦しめている
アタシも狂人の共犯者

服従しかできぬ　只のロクデナシ
閉ざされた扉から差し込む
一筋の光　救いを求める円(つぶ)らな瞳
偽りの愛で愚弄した狂人に
いますぐ天誅を！
刹那の快楽でアタシを犯したケダモノに
いますぐ制裁を！
幸福を求めて開いた扉の向こうは
幸福とは対極の収容所
ここは都会の中の地獄
線路を軋ませて暴走する電車
フミキリの音がかき消す悲鳴
ここは都会の中の地獄
繋がりの遮断された

モザイク状の空間で
血に染まったアイツの亡骸を
呆然と眺めるアタシ

偽りの愛で愚弄した狂人に
下した天誅を！

刹那の快楽で私を犯したケダモノに
下した制裁を！

悪魔に犯された私の魂
理解不能な正しさを
裁くのはだれ？

守りたかったのは
あなたの生命
扉の向こうから射し込む
一筋の光

悪魔に汚されたアタシの魂に天罰を

# 埼玉県

## 吉村健二

### 引越し

信州の山奥から十八の春に
東京に出てきて七度
西武新宿線都立家政
東急東横線日吉
ＪＲ中央線阿佐ヶ谷
営団丸の内線東高円寺
ＪＲ中央線西荻窪
小田急線登戸
都営新宿線一之江
西武新宿線新所沢

ホームズならこれだけで
僕の素性を探りあてるんだろう
強引に書物になぞらえば
全部で八章ということか
一章は一年から五年だが
なにしろ記憶の虫食いがひどくて
すぐ前の章の事ですら忘れている

隣の部屋の奥さんの二の腕の
菱形の痣は覚えているのに
夜泣き怪獣の名前が思い出せない
ユカちゃんだったかユミちゃんか
そもそもあの子は女の子だったのか

三畳一間の賄い付きがフリダシで
郊外のささやかな一戸建てまでの
通り過ぎた街を思い出すのに
手がかりはなじみの本屋と喫茶店だ
本屋には娘が二人いて
鬱病気味の姉さんを気にいっていたのだが
丸顔の妹に区民プールに誘われた
なぜだか僕の通う本屋には
まるで似てない姉妹がいて
僕はいつも姉の方を好きになった
喫茶店のマスターは全共闘あがりで
天気と野球とジャズの話をぼそりぼそり
そのくせ茶髪のウエイトレスと
突然店を休んで温泉に行くんだ

なぜだか僕の通う喫茶店のマスターは
左翼でなければ右翼だったり
ジャズが美空ひばりだったりするのだが
決まって巨人ファンで
決まってウエイトレスと浮気をしていた

七回も引越しをすると
荷造りも転居の手続きも慣れたもの
電話番号の語呂合わせが得意で
何度も変わったがこれだけは暗唱できる
昔の番号にかけてみたい気もするが
ちょっとこわい
「おかけになった電話番号は」
つい忘れるのが郵便局への通知
宛先不明で十年も迷い続けた手紙が
ぼろぼろになってある日届くという怪談
そういえば手紙って捨てるのが厄介
生ごみで燃えないゴミで
おまけに粗大ごみとくる
言いたかったのはつまり

存在証明はきれいさっぱり無くなって
たとえ親しげにたずねていっても
どの街も他人の顔ということさ
それにしても
空には自衛隊機が行き来する
里芋畑に囲まれた分譲地がアガリだなんて
僕にはとうてい納得できない
なじみの本屋も喫茶店もありゃしない
それで八度目の引越しがあるかというと
気が遠くなるほど長いローンや
本屋の娘だった女房と相談なのだが
少なくも来年の三月までは難しい
自治会の副会長を押し付けられて
防犯灯の点検をしなきゃならんのだ
西武新宿線新所沢からバスで十五分
近くにお立ち寄りの際はぜひ

# 千葉県

## 森　由右子

### 里山の夜

夜露に濡れる稲穂に舞い降りる仄かなあかり
風に　舞　揺れるあかり

闇夜に響く踏切の音
田んぼの中の線路を電車が走っていく
窓から溢れるばかりの光
疲れを全身に纏った人々が
心地の良い揺れに身を任せながら運ばれていく

そしてまた
静寂が訪れる

母さん
幼き吾子はわが手を振りほどき
揺れるあかりを追いかける。

消えてはともる仄かなあかり
その命もまた

その暗闇の中に
はかなく消えていきそうで
慌てて吾子の手をひく

ここにいるよ
圧倒的な存在がその手から伝わってくる

踏切の音が私を
ここに引き戻す
あふれんばかりの光を乗せて
現実は闇の中を走っていく

帰ろう
仄かなあかりを追う
吾子の手を引き
私は
街中への道を歩き出す

## 青木さえ

### 無題

今年も暑い夏があっという間に終わり
秋の香りが漂い始めました。

今年の夏はどんな夏でしたか？
想い想いの夏を過ごしたことでしょう。

海には行きましたか？
砂浜には人が沢山いて、海の家があり
陽気な音楽が流れ、笑顔で溢れていた海。
浮き輪で浮いているだけで
楽しかったあの海も
今はもう入ることはできません。
砂浜にも誰もいない。海の家もない。
切ない。胸が苦しい

私は「夏」というと、どうしても未だに
長い夏休みがあった学生の頃を思い出します。

お金なんてなくても
自転車さえあれば何処へでも
行けたような気がした中学生の頃。
友人と、魔法のマグカップが売ってるような
雑貨屋を探す旅に出た日々。

短大の夏休みは、最も長くて
あまりにも輝かしかった。
時計を気にせずに、怖いものも何もなく
ただ楽しさだけを求めて生きていたあの夏
朝の浜辺での眩しいほどの晴れた朝。
あの日差しを感じたのはもう五年も前。
夜中に山の上から見た夜景も、
格別に綺麗だった。
夏と共に消えていった一夏の恋を思い出す。

今年の夏も、ハワイや伊豆へ旅行へ行ったり
海水浴やＢＢＱもした。
とても楽しかった。

けれどやっぱり、「長い夏休み」があった
輝かしい「夏」を超えられないような気がする
自分だけでなく周りもみんな学生で
長い夏休みがあったあの頃にはもう
二度と戻れないのだと思うと
胸が締め付けられる。

今はどこで何をしているのかもわからない旧友
今、当時と同じ事をしても
きっと「つまらない」と感じるだろう。

大人になって働けるようになり、車を持ち
自転車には乗らなくなった。
一人暮らしをしたり、結婚や出産をしてる
友人もいる。あの時よりできることも増えた。
出来ることが増えるにつれ
何か大切なものを失っていくような感覚がある

「大人」になったんだなあ。

早く「大人」になりたいなと
思っていた時もあった。
でも「大人」になんてなりたくなかった。
どの瞬間から、「大人」になったのだろうか。

気付けば社会人になり四回目の夏が終わった。
短大の夏は、二回しか来なかったのになぁ。
二ヶ月近くあった夏休みも、五連休になった。
季節の流れは、年々早くなった。
「仕事」はどの季節でも

あまり代わり映えがしないからだろうか。

今朝、冷たい風が吹いた。
今年の夏も終わったんだなぁ。
あっという間だった。
秋は一瞬で、また街がざわめく冬が来る。
あのクリスマスを共に過ごした彼は
今どこで何をしているのだろうか…
私と過ごしたことすら
忘れてしまったかもしれない。

秋になると、切なくなる
それは人間の本能なのだ。
時は無情にも流れる。
また、あの夏が遠くなった。

# 潮 寝子

## 無題

横顔映る 窓ぎわの花びん
開いた花びらが散ってゆく
砂糖を溶かしたコーヒーは
苦味をなくして丸くなる

傘をぶらぶらぶら下げて
地球の端っこ叩いて歩く。
散歩しながら牛乳盗み、
薄明かりの中笑うのさ。

朝の入り口で君を待つ、タバコの山ができるまで。

高い空 飛行機飛んでゆく
ピカピカと、星よりも輝いて。

傘をぶらぶらぶらさげて
地球の端っこ叩くのさ
雨が上がれば溢れ出す
見上げてた灯りの中でのこと

今夜は逃げてしまおうか
思ってる間に朝が来て
散歩をしながら牛乳盗み
空ビンに流れ星 閉じ込めた

迎えに行くよ、また今日も

東京都

## タナカジュリ
### 連続する日々に

毎日が
連続しているという人間の思想を
拭い去って
ただ面々とした
水面の上の
波紋でいたい
私が魚だった時代、
毎日という思想はなく
群れる魚のひとつであった
十匹より二十匹
二十匹より百匹
の渦の中で
とどまることを知らない
ただ一つの動体でいたい

動体は天体になる
天体はわたしの内臓の形に符合している
牡牛座の天敵が
頭上で引き割れて

私の脳を
真っ黒に焼いてしまった
脳の焦げをふき取ったところに
杏子の種があった
私は窓の外に手を伸ばし
それを必死で植えた
太陽はいつだって
私の味方だった
味を感じられるのは
太陽のおかげ
性を甘露にするのは
太陽のおかげ
太陽をむしり取るのはやめて
太陽にそのまま飲み込まれていく
ただ一つの動体でいたい

天体は私をひも解く鍵となる
小鳥に口を押えられて
私は私の器から
全てを吐き出してしまった

手を伸ばした先にある杏子の木は
すっくと伸びている
幹の中に
牡牛座の
啓示が潜んでいるとも知らずに
すっくと伸びている
その形状に
ゆうらめいている
瞼が眠りの世界へといざなう
瞼の前なのか
後なのか
私は
まぶた以前の存在になる
百匹の魚の中を動く
一つの動体になる夢を見た
私は忘れられた
全てを失った
どこの記録にも残らなかった
だから私はただ一つの結晶として
ここでうたっていられた。

# 浅井かおり　東京都

## ベイビーズアイ

蝉の声をＢＧＭにして緩やかな坂を下る
隣を流れる車は私なんて見えていないかのように通り過ぎる
窓をのぞく一瞬では中をうかがうことができず
私だけが晒されているような居心地の悪さは
乾ききらない汗がもたらす不快感と似ている
手を伸ばせば触ることは出来るほど近い世界なのに
それをしてしまえば指を掠めるだけでは済まないことを知ってしまっているから線の内側に留まる
広い世界を見てしまえば今の自分を思い知らされる
だこら最小限の景色があればそれでいい
無難な道の真ん中を歩き続けて何も感じず幸せへ辿り着くほど真っ直ぐではない
ぐにゃりと曲がり少し熱を帯びたわたしの感情は思いの外ややこしく人を遠ざける
シンプルでいいシンプルがいい
いらないものを取り除いたら世界はいたってわかりやすい
一を二にしようと足掻くよりいっそのこと０にしてしまうほうが簡単だ
足し算も容易い
自分も周りもリセットして焼き付けた情景と感情を胸に踏み出した一歩は
軽く自信に満ちているはずだと信じて世界を０に戻そう
二度目の景色は私を怯ませるけれど以前よりも
私を受け入れてくれるような
都合の良い気のせいは十分に今日を生きる希望なのだ

# 赤穂 肇

## 地下鉄に窓はいらない

都市をモグラの巣のように
あるいはクモの巣のように
地下トンネルを交差する人々の思いは
疲れていたり夢見ていたり
昼か夜かも忘れていたり
大切な何かを思い出せない振りしたり
来る日も来る日も最終電車の箱の中
収容所送りの囚人さながら
ガラス越しに此方を見詰める
もう一人の後ろめたい影と
嫌でも面会を強いられるが
互いに黙秘権を行使しているので
どちらが容疑者と弁護人を演じるか
今のところまだ決めかねている

合わせ鏡のように映る他人の視線からも
目のやり場のない居心地悪さからも
逃れる事は許されない・・・・

黒いコンクリートより他に風景のない
地下鉄にどうして窓はあるのだろう？
目的の駅に着いたかどうかなど
車内放送とモニター画面で分かる
知るべき事は地上で今何が起きていて
この奇妙な生き物たちの乗り物は
いったい何処へ行こうとしているかだ！

科学によって退化した人間の五感では
放射能を感知出来ないので
セシウムが致死量に達し
公園で遊ぶ子供らが突然バタバタと
倒れた頃には最早手遅れなのだが
最終陳述では臆面なく述べるつもりでいる

地下鉄のみならず
地上を走る在来線の窓も全て
鉛の板で塞いで下さい

# 窪谷沙織

## ミクロマクロ

悲しみとか怒りとかやるせなさとか虚しさとか、良くないとされる感情も大切に生きたい。わたしの中の宇宙に生まれた感情一個も蔑ろにしたくない。そりゃいつも穏やかで優しい気持ちで過ごしていたい前提だけど。良いことにも悪いことにも動じない平常心って不感症じゃないの？感受性殺したくないよ。均一な心なんていらない。

ここ三日間くらい、愛とか魂とかカルマとか宇宙について考えてた。神の一部のわたし達は、みんなでより高度で純粋な魂に成長するため、この世でカルマを造って清算する輪廻転成繰り返しているらしい。目指すのは究極の愛、らしい。

でも、物事には良い面悪い面両方あるじゃん。誰かにとっての希望が、誰かにとっての絶望とかってザラじゃん。祈りは呪いだし、呪いは祈りだし。そしたらこの世の全ての現象はカルマだから、カルマを返し終える日なんて一生来なくない？罪が無いえぐみゼロの愛の中身ってなんだろう。それとも罪を重ね償うことで全てを経験し全てを手に入れた愛を追求しているんだろうか。誰も傷付けない愛って存在するんだろうか。なぜ神は魂を成長させたいんだろう。その先には何があるの。何が目的なの。

こういうことを考えてると、ブラックホールに飲み込まれそうな感覚に陥る。小さい頃、オゾン層が崩壊した地球について考えてたのと似てる。幼稚園児だった、自分は死ぬ、世界は終わる、そこで生きる意味について考えて恐怖を感じた。でも死ぬのは世界が終わる時かもしれないし、明日かもしれないし、今かもしれないよね。ただ全てが無かったことになることが怖いと思ったんだ。今はそうでもないかも。

壮大なことを考えた時、やっぱり大事にするべきなのは、明日何食べようかなとか、あの人どうしてるかなとか、人間の生活の温度だと思う。

人が生きてるのは、罪だとしても美しい。そこに生活があって感情があって命があるって事実を、想像してさらに創造していかないと。
この宇宙の果て、それぞれ人間みたいに悩んだり苦しんだりしてる何かがいて、より良くなりたい愛したい愛されたいってもがき苦しんでいて、それが神で、神が一人一個持ってる地球は心のことで、その心の感情の一粒一粒がわたしたち一人一人って意味だったらわからなくもないかも。でもわたしはわたしだし、この心の中で生まれた意志を大切にしたいし、好きな人を愛したい。

## 花沢菊男

### 皇居宮殿

正月二日。皇居へ来た。
一般参賀だ。
とはいえ、皇族方には興味はない。
祝意も蔵していない。宮殿を、御所を、
あるいは参内人の風俗をとくと御覧に入れたい、
そう思って来ただけだ。
参賀に行く人、終えた人が
皇居前広場を埋め尽くしている。
種々相な参内人がいる中、なかんずく、外国人
が眼を引く。
彼らは参賀を知って来たのか、あるいはたまた
まここへ来て、何事かと行列に並んだ、果てか。
今しも私の前を行く、
二組七人の、白人と東洋系の外国人はそれぞれ、
渡されるままの日の丸の小旗を手に
列に付き従う。一般参賀ツアーで遠来した団体
客がそこかしこに見かける。

折々、晴れ着をまとった手弱女（たおやめ）もいる。どこの寺社の帰りか知らぬが、破魔矢を手にした清楚な外国婦人もいる。深紅の制服に身を包んだ女性騎兵を乗せた警視庁の白馬が、この種々雑多な人々に何ら憶することもなく、泰然自若して参内人を出迎えている。紅白の妙も手伝って、新春の陽に毛艶が照り耀き、美しい。

ボディチェックを受けて、いざ皇居へ向かう。靴の下で玉砂利がきゅきゅと音を立てる。皇居正門前に架かる、二連のアーチ橋を、一部のメディアまでもが「二重橋」と喧伝して、そのゆえに、観光客や団体客はこぞってこれを背景に記念写真に収まるが、これは二重橋ではない。通称「眼鏡橋」といい、二重橋というのは、

その先の宮殿入り口の中門という

その門の前に架かる橋を言うのだが、

かつては上下二段の木造の二重橋だったが、

今は一重の鉄橋だ。「二重橋前駅」というのはあるが、現在は「二重橋」は存在しない。眼鏡橋を渡ると壮麗な門があり、これが皇居正門である。正門を抜けると、

琴が奏でる雅やかな楽の音が鳴り響く中、ゆるやかな右回りの坂を上って行く。

京都伏見城から移築した

伏見櫓が、屈曲美を見せる松の木の緑と

漆喰壁の白とが絶妙な色合いを見せて綺麗だ。

だが、のちに宮殿前で皇宮警察官に聞くと、「中は埃だらけですよ」と言った。

その櫓に誰もがカメラを差し向ける。

皇宮警察官が「立ち止まらないで下さい」と連呼する。

とはいえ、外国人ならずとも写真に収めたい構図である。

中門をくぐる時、機を見るに敏なる我れ、目敏く、石垣に眼が行った。

石垣に紋様が入っている。石垣の石にだ。

何の模様かのみは分からないが、

それぞれ鑿で穿ったような跡が刻まれている。

おそらくこれは、太田道灌の築城の際ではなく、家康が入城したのちの増築の時のものだろう。が、それでも四百年は優に超えている。

目当ての宮殿に到着した。
がっかりした。何そととみなれば、それはさながら、
中は知らぬが、外見はそこらの中学校の体育館だからだ。
宮殿といえば、「ベルサイユ宮殿」や
「アルハンブラ宮殿」「ウエストミンスター宮殿」等、
諸外国の絢爛豪華な宮殿を思い起こすが、ここは二階建てに過ぎず、あまつさえ、横にただ長い平面的な造りといい、
事実は銅瓦葺きらしいが、見た目は単に水色をした屋根といい、それは紛う方なく、出来の悪い生徒が通う中学校の体育館だ。
外観だけに限れば、百年ぶりに蘇った
絢爛たる東京駅のほうが遥かに宮殿らしい。

宮中三殿や天皇の居所となる吹上御所は
ここから見ると、宮殿の裏に当たるのであろう。
緑濃い木立に囲まれているが、
しかしぐるり上方を振りさけ見れば、
樹々の上から霞が関や丸の内のビルが見える。
さして高くもない、警視庁の赤い電波塔も見えてしまう。
なぜ、ここから視界に入ってしまう建物を規制せずに建てさせたものかと訝る。
皇居に入ってまでして
見たくないものが目に映じる。興ざめする。
まさか陛下が、散歩中に急に催したからといって、立ち小便はしないと思うが、
ここから見えるということは、すなわち向こうからも見えるのである。

と見る間に、参内人が次第に増えて、
さしも宮殿前の「東庭」も―先の皇宮警察官の話によると二万五千の収容が可能という―漸次余裕をなくしていく。

やはり外国人が眼につく。日本人の集団にあり、ゆえに余計にきわだつのであろう。戦争体験者とおぼしき老壮もいる。
しかし砂利道を踏んで、かくしゃく坂を上って来るだけに矍鑠としている。まだいとけない子供連れもいる。
日の丸の小旗が一斉に打ち振られた。
天皇皇后両陛下が、続いて、皇太子同妃両殿下や
秋篠宮親王同妃両殿下らが二階のバルコニーに現れた。
期せずして「天皇陛下万歳！」と歓声が上がり、そしてそれに和して、
そこかしこで天皇陛下万歳を唱和して、両手を天に突き上げる。
さすがに外国人はやらない。我れもやらない。
天皇陛下が参内人の祝意に応えて
新年の祝辞を述べる。五分ほどである。これほどの外国人が来ているのだから、世界語たる英語を文字に起こして流せばいいだろうと思った。
それにしても、
例のスローモーな口調には地団太を踏む思いがする。
それが終わり、皇族方が踵を返すと、たちまち帰りを促された。
来た道とは逆の宮内庁前の坂道を下り、坂下門から外へ出た。
次の参賀の人々で皇居外苑はいまだ溢れている。

## 三休　健

### 裏道

ありのままの自分たちで良い
そうしたらいじめにあった
ありのままの僕で良い
人の気持ちがわかるようにと言われた

ありのままの私で良い
誰ひとりいなくなった

ありのままで良い世界なんてどこにもない
ありのままでは人と壁にぶつかる
僕たちは結局生れた時から奴隷道を歩いている
人の顔色を伺いながら
自由のない時間に縛られている

見える戦争はなくなった
でも見えない戦争はなくならない

ありのままで生きれていたら
とっくに世界から戦争はなくなっている
戦争が起きない為に
僕たちは嘘をつく

ありのまま思った事を歩める道がある
僕たちはその裏を歩いている
ありのままの自分でいい
僕たちはその逆を生き続ける

## 金澤　汀

### 月下の心、惑う夜

何かを捨てて
ここにいるはずなのに、
その重みさえ忘れたまま、ここに朽ち果てようとしているのか。
何かを燃やして
ここに来たはずなのに、
その熱さから逃げて、何に成り果てようというのか。
翼を失った鳥。光を失った蛍。
そんなものではない。そんな、美しく、儚い喪

失ではない。
これは、
もっと人間らしい醜さで、
恥ずかしいほどの臆病さで、
ただ逃げることしかできない自分に、気づいただけである。

ここまで来るのに、どれほどかかった。
ここまで来るのに、誰を泣かせた。
ここまで来るのに、どれだけ懸命に、生きようとしてきたのか。
思い出せ。
思い出せ、燃やした炎を。
思い出せ、動かす涙を。
思い出せ、見つけた光を。

たどり着いたものにしかわからない、苦しみがある。
何かを捨て、たどり着いたそこにもまた、新しい道が続いている。

どこまでも続く道に、
絶望を見るのか、希望を見るのか。
そこで新たな炎を、
燃やすのか、失うのか。

人生は決して、終わることはない。

終わりがないから、
最後まで苦しく、あしたが見えないまま、
そのうち終わる、ものなのだろう。
全て月下で、惑うものたち。

## 吉田有花

### 魚

魚になりたかった
深く底のない海に泳いでいたかった
海水がしょっぱいのは私だけだろうか
どうか泣かないで

魚
魚になりたかった
静けさの中で流れていくものは心だった
止まれず泳いでいかなければ死んでしまう
心は捨てていった
それが私の魚
魚
何も言えずただ泡を吐き出す
こんな風に何もかも泡の中に納まってしまえば
いいのに
と私は思う

## しるる

### 夕飯の一品

真空パックされた蒸し鶏のブロックが
コンビニやスーパーに並んでいる
サラダやおかずの一品に簡単に調理しやすいよ
う加工されたもので
気付いた時には目にするようになっていた
何年前からなのだろう、今ではお手軽食品のひ
とつである
その加工チキンを見るたび
石田徹也「燃料補給のような食事」がチカチカ
する
羽をむしりとられた鶏が何羽も何千羽も
つるされてベルトコンベアで流されていき
大量のチキンがパック詰めされていく
画を想像すると
そこには生物の鶏ではなく
大量の成形肉が真空パックされており
ベルトコンベアのチキンは
プラスチックおもちゃの「ギャッ」と鳴く黄色
の鳥が吊りさがっているのだ
パッケージ成分表の（加工食品）という文字を
見るたび
数十年後
あるいは数年後の
食品事情がこわくてしかたがないのだ

# 沢木遥香

## 風鈴

簾を買おうか、と
父が尋ねるので

うん、そうね
と、棒読みで答えた

ついでに風鈴も見てくるよ、と
うちわを扇ぐ手を
忙しなく動かしながら
父が言うので

冷蔵庫の中のハムときゅうりを切って
そうめんを茹でて
待っていようと思った

近くのスーパーに向かう
後ろ姿を見送って
色気のない夏を

粛々とこなしていく

ガラスのお皿
二枚と
ガラスのコップ
二つ
夏にしか使わない食器たちを
テーブルに並べて

盛り付けが終わるタイミングで
汗だくの父が帰ってきた

炎天下の道を歩いてきた
その顔は赤く
少年のようだった

左手には
簾と風鈴
右手には
アイスが二本

ちりちりりん
りりりりん
ガラスの響き
喉を伝う夏の味
風鈴に描かれた二匹の金魚が
ベランダを抜け出して泳ぎだした

## 脚本

生まれた時に
白紙の脚本を渡された
監督と名乗る人物は言った
〝これは自由にお絵かきしていいし
破ってもいいよ。
藍染めしてもかまわない。
でも、僕は知らない。
君のこころが
なにを感じ
君の足が
どこにたどり着くのか〟
高校生の時に、部活の先輩が笑って言った
あたしたちはゆとり教育の失敗作だ、って
受験戦争が落ち着いた頃に生まれて
なんとなく四年生の大学を目指して
企業説明会では美化された会社の説明を受けた
まっさらな脚本に
だれかが話した言葉を
ボールペンで書いていく
私はとても素直だった
本音と建前も
正しさの脆弱さも
深く考えることはなかった
企業パンフレットに掲載された人物の様に
自然と自分も成長するのだと信じていた
だって誰も彼も
人間のお腹から出てきた同じ生物なんだもの
就職した企業では
出産後に復帰した女性がいることをアピールしていた

男性社員が家族サービスだと笑って定時退社し
ていた
女性たちは子供のお弁当作りに保育園の送り迎
えにお化粧に
回転速度を増すメリーゴーランドの世界を駆け
まわっていたけど
男性の前ではみんな笑顔だった
白紙だったページが賑やかになってきた
文字の最後にクエスチョンが増えた
自分の考えなのかだれかの考えなのか
判別の付かない言葉が溢れた
会社の外に出ると
空気が美味しかった
私は
どこに向かっているのだろう
この脚本の主人公は
だれなのだろう
監督と名乗る人物は
もうどこにもいなかった

## 冠ゆき

### 夜の懐（ふところ）

夜が　空に染み渡り
時が一粒　落ちてくる
冷たい背表紙　開かれた本
文字に重なる　私の想い

闇が　窓から忍び込み
ひっそりと肩　包んでいく
白い光が　静けさたたえ
眠りの街に　私は一人

この透明な空気を震わせ
言葉が心に追いつく前に
胸を塞ぐ思いのたけを
細く　遠く　吐き出そう

街は深く覆われて
蒼く蒼く底まで　煙る

動かぬ空気　音を吸い込み
しめやかに跡 消していく

このビロードの奥深くまで
運命の手が届かぬうちに
うずくまった背のこわばりを
そっと そっと 緩めよう

冷たい翼に囲われて
どこまでもただ落ちていく
優しい夜の懐のうち

## ひとかけらの静寂

踊り疲れ、つかの間、喧騒から逃れようと、広間の外へ出た。途端に音楽が遠くなる。左手にはテラス。十一時頃までは向こう遥かに見えていたパリ市も、今は暗闇に横たわり、白とオレンジの明かりだけが、闇の底に浮かぶように光っている。

午前二時を過ぎていたろうか。テラスに赤い煙草の火がちらりと光り、近づくと、それは父であった。

「疲れたでしょう」

「おう」

闇に白い私のシルエットを認め、父が返事ともつかぬ声で応じる。

フランスでは式のあとの披露宴は、軽いスナックと食前酒で始まる。その後ようやくテーブルにつくと、時間を掛け、おしゃべりを楽しみながら、フルコースを賞味し、新郎新婦のワルツを皮切りに、明け方まで皆で踊り明かす。もう一つのメインであるウェディングケーキが出るのは、いい加減踊りくたびれた頃で、同時にシャンパーニュで乾杯となることも多い。最後は、ドゥミタスのコーヒーで締めくくる。

その日、私たちの結婚式も例外ではなかった。日仏折衷の式らしく、ダンスパーティでは、親戚による盆踊りが飛び出したり、父の熱唱する「君といつまでも」に乗って、フランス人の叔父叔母がスローに興じたりした。ロックの乗りになっても皆停まることを知らず、老いも若きもはちゃめちゃにはじけて楽しんでいた。

花火付きのケーキが出た頃は、午前一時を過ぎていたか。乾杯の後、一息ついて再び踊りだした皆をおいて、父は一人テラスへ出ていたらしい。

普段は早寝の父である。こんな夜更かしは何年かぶりに違いない。

「コーヒー持ってくるわね」

言い置いて、喧騒の中に戻る。

何度目かの祝福の抱擁を、左右に受けつつ、ドゥミタスを二つ持ってテラスへ戻った。

「あんた…　主役が、みんなほっといていいんか」

「いいわよ、ちょっとぐらい」

薄明かりの中で、斜めに向かい合った父の白く浮かぶワイシャツに、いつだったか私がプレゼントしたネクタイが、緩んだ影を落としていた。考えてみれば、父と二人きりで言葉を交わすのは、この日はこれが最初だったかもしれない。朝からドレスの着付けを手伝ってくれた母と違って、父はずっと十歩ほども離れたところにいたように思う。

「…　ああ、うまい」コーヒーの香りの向こうで、息をもらすように父が微笑んだ。私も和んだ気

持ちになって、小さなカップを傾ける。実際、ほっとするような静けさだった。

夜景の底のパリに目をやったまま、少し置いて、父が言った。

「あんた、よかったな」

まるで自分に確認するかのような声だった。

「うん」

素直に肯き、そのあと、何も言えなかった。

広間の入り口から笑い声が広がり、「ゆき！ゆき！」新郎の声がする。

「ほらほら、呼ばれてるぞ」

「…」

「お父さんももうちょっと踊ろうかな」ためらう私を急き立てるように、父が先に腰を上げた。

〜〜〜〜〜〜

うたたねする父の寝息に誘われたか、

二十年も前の一コマが甦った。

父の記憶は、いつしか、砕けたウエハースとなってしまったけれど、

その欠片のどれかにも、あの夜の静けさが、刻まれているはずである。

# 絶歌

## 夢占い

起きて最初に思ったことは、窓の外に見えるあの雪は有毒なのだろうかということだった。オレゴンのサンリバーにある別荘地で迎える初めての朝だった。例年ならば一月のこの時期にはとっくに雪が積もっているそうだが、どういうわけか今年はまだ一度も雪が降ったためしがないと昨夜叔母夫婦から聞いていた。十時間に及ぶドライブの果てにこの別荘地に辿り着いた昨晩、彼らはこのログハウスの二階の端の部屋を楓に貸し与えてくれた。天上、壁、床、ベッド、すべてが木でできているこの部屋で楓が一番気に入ったのは、ベッドの枕元の辺りの壁に、丸く切り抜かれた直径一メートルほどの窓だった。昨晩は真っ暗で窓の外に何も見えなかったが、今朝はその窓から、松ぼっくりや針葉に覆われた地面に、白く細かい雪が溶け落ちていく様子を見下ろすことができる。あの雪は実はやはり有毒なのだろうか。それから楓は、先ほど夢の中で自分が歌ったあの歌のメロディーを忘れないようにと、何度も頭の中で繰り返した。あまりにも美しく、自分が夢の中で考え出したとは到底考えられない響きだった。何度も何度も頭の中で繰り返し、もう忘れないだろうという確信が持てたところで、楓は下の階に降りていった。どういうわけか朝から従兄弟のアディとブルーは喧嘩していて、アディは泣きながら何か叫んでいた。階下ではいっそうはっきりと、雪のにおいがした。

相変わらず騒々しい日だった。バチェラー山にスキーに行く準備をしている間、アディは怒鳴り、ブルーは歌い、叔母夫婦はひたすらそれらを無視していた。楓はまたこの暴れん坊たちと狭い車の後部座席に押し込められてドライブしなければいけないのかと思うと憂鬱だった。昨日のドライブは何しろ散々だった。メドフォードの叔母一家の自宅から別荘に向かう道の途中、

バーガーショップのドライブスルーでは、気難しいブルーのハンバーガーへの細かな注文と優柔不断な性格による煩悶が永遠と思われるほどの時間続き、一帯に小さな渋滞を引き起こした。この一家はそういったことをまったく気にしない様子だったが、楓は気にする質だった。スムーズに流れていたものを乱すことは、楓にとって耐えがたい苦痛であった。もっとも、彼らとこのクリスマス休みをともに過ごすまで、自分がそれほどまでに神経質な人間だということに気づきもしなかったのだが。様々な色のサインペンと奇抜な形のたくさんのルービックキューブ（そのほとんどの色は揃っていない）が散らかった後部座席で、背後にウクレレを抱えてキンキン声でオーバー・ザ・レインボウを歌い狂うアディと、隙あらばハンバーガーに食らいつこうとするゴールデンレトリバーのルビーの荒い鼻息を感じながら食事をするのは、なかなかにぞっとするものだった。ブルーがポテトを回してくれないと、アディは二度耳障りな声で運転席に座る父親のトミーに惨状を訴え、脂ぎった手でウクレレをかき鳴らした。食事のあと隣に座るブルーは、一番のお気に入りだというヨギ・ベアの映画を楓に見せたがり、だがしかし映画鑑賞用のヘッドフォンが二台しかなかったので、一緒に観たがったアディと、楓と二人きりで観たいブルーとの間でまたもや一悶着あった。結局まだヨギ・ベアの面白さを知らない楓に見せてあげたいのだというブルーの言い分が勝ち、楓とブルーが後部座席の天井から下がるスクリーンで映画を観始めたのだが、これがまた苦難の始まりだった。ヨギ・ベアの引き起こす単純な愚行に、九歳のブルーがキラキラした眼で喜び、横に座る楓の表情を毎度毎度覗き込んでくるので、楓は一時間半の間さも面白くてたまらないというように笑わなければいけなかった。何よりも苦痛なのは、ブルーがいちいち説明を挟んでくるので、次に何が起こるのかわかりきった状態で映画を観なければいけないことだった。時にブルーは、擦り切れるほど観て

すべてを暗記しているこの映画を少し巻き戻して、誰が見ても一度で理解できる笑いを敢えてもう一度丁寧に説明してくれるのであった。その様子を冷めた目で見つめ返すほど幼い子どもに対して冷酷になることのできない楓は、いちいち大げさに驚き、笑い、相槌を打って納得した振りをし続けたのであった。

昨日の悪夢が再び繰り返されると覚悟して、車に乗り込んだ楓であったが、状況は思ったほど悪くなかった。アディは両親にウクレレを車内に持ち込むことを諦めさせられ、大人しかった。ルビーは別荘の犬小屋で留守番をしており、ブルーは山頂に向かうにつれますます降り積もっていく窓の外の雪をじっと見つめていた。しばらくすると楓の叔母に当たるパメラが、子どもたちのために本の読み聞かせのCDを流し始めた。少年がどこからか手に入れた宝石を売ろうとするのだが、意地悪な商人に安く買い叩かれそうになる、というような場面なのだが、何しろ途中から聞き始めた楓には何がなんだかさっぱりわからなかった。しかしそれでもこの兄弟は大人しくしているし、降り積もる雪は美しいし、喧騒に比べたらよっぽど良かった。

スキー場の受付で会員証を作るための写真撮影や簡単な手続きを終えた後、トミーとアディ、ブルーは滑りに行った。楓はスキーをする気分ではなかったので、パメラにと一緒に休憩所に向かい、ホットココアを二つ買って暖炉のそばの席に腰を下ろした。辺りではスキーを終えた人々が頬を赤くして、あたたかい飲み物を飲み、軽食を取っていた。楓はやっとパメラに、朝から話したくてたまらなかった話をするチャンスが巡ってきたと思い、口を開いた。

昨日の夜おかしな夢を見たんだけど、話してもいい。楓が尋ねると、パメラは身を乗り出してもちろんだと答えた。楓はパメラのこういうところが好きだった。楓の母のドレリアとパメラ

とは姉妹であったが、楓の話に対する二人の態度はまるで違った。ドレリアが適当に相槌を打ち、ときにまだ続くのかと嫌そうな反応をしてくるのに対して、パメラはいつだって真剣に聞き、楓の期待に沿った反応を示してくれるのだった。もちろんそれは、楓が従兄弟のブルーの話は真面目に聞いている振りをしてあげるが、兄の柊には家族ゆえに気を遣わず、ちっとも話を聞こうとしないのと同じかもしれないが。

楓は話し始めた。ゆっくりと、ときに自分の解釈を交えながら。パメラはじっと楓の語る言葉に耳を傾けたが、ときたま楓を遮って質問した。それは夢の中で思ったことなのか、それとも目が覚めてからその考えに至ったのか。たくさんというのはどのくらいか。日本語で会話していたのか、それとも英語か。楓は話している最中にここまで細かなことを質問してこられることに慣れていなかったが、パメラの質問は嬉しかった。興味を抱いてくれているからこそ質問が湧き出てくるのだということを、楓は知っていた。楓は、白い光のことを幼い子どもが透明な光と呼んだこと、だけど透明な光などどうやって見えるのか、という疑問を持ったことを口にするうちに、その事に対する仮説を自ら立て始めた。もしかしたら光が空から降ってきたのは、昼間ではなかったのかもしれない。自分が夢の中で目覚めたのが日中であったから、その直前に光が降ってきたのだとばかり思っていたが、もしかしたら自分は思ったより長く倒れこんでいたのかもしれない。もしも光が真夜中に降ってきたとしたら。透明な光と言うものがいったいどんな見た目をしているのか楓にはてんで見当がつかなかったが、暗やみの中でなら、光が透明であっても人の眼に映ることができるかもしれないと、そう思い至ったのだ。それから有毒な雪について。幼い女の子は夢の中で楓に、光が降ってきて人が倒れ始めたと言った。しかし楓が目にした世界では、人々はむしろ、地面を覆う白い雪のようなものに触れたとき、次々

と倒れこんでいくように見えた。このことを総合して楓が導き出した結論とは、もともと光に毒性があって、それによって人々は倒れたが、その後光が降りやんだ後も、雪がその毒性を吸収して有毒化していったのではないか。そういうわけで楓が見たときは、人々は雪に触れると倒れこんでいったのではないだろうか、というものだった。

楓のこれらの解釈を聞く間中、パメラは嬉々として明るい緑色をした眼を輝かせていた。起きたら窓の外で雪が降っていたと、楓がすべてを話し終えた時、パメラはほっと溜息をついた。それから自分には二つ、今の話を聞いて思い出したことがあると言い、語りだした。ひとつは、幼い子どもは概して、五感以外の感覚が発達していることが多いこと。地上に降り注いだ光は、本当に透明な光だったかもしれない。目では見ることができず、本当に透明だった可能性がある。その女の子は、眼で見たのではなく、何故か光が降り注いでくることを感じ取ることができたのかもしれない。だからその子が透明な光という表現を使ったのだという可能性があると、パメラは言った。ふたつめに、空から有毒なものが降ってきて、それが人々を苦しめるという状況は、原爆に似ていると言った。日本で生まれ育った楓にとって、原爆やその恐ろしさについて見聞きする機会は多かったのではないか。それらの体験がこの夢を作り上げる役割の一端を担っているに違いない。パメラはそう言った。

確かに原爆が投下された後、何かが降ってこなかったかしら
もしかして黒い雨のこと？
そう、そうだった。そしてそれは有毒ではなかった？
そうだった気がする

ある胎内被曝した者の手記には、原爆が投下されたとき、彼女は確かに胎児だったにもかかわ

らず、強い眩しい光を見た記憶だけが鮮明に残っていると書かれていると、パメラは言った。胎児の目はまだ開いていないから、眼を開けて光を見たとは思えない。目を瞑っていたにも関わらず光を見たというのなら、それは「透明な光」というのにふさわしいのではないかしら。パメラのその意見は、この上なく理にかなっていた。透明な光を、放射能と解釈することだってできる。目には見えないけれど、子どもなら何らかの形でそれを感じることができたとしてもおかしくない。楓の母や館の女主人が雪に倒れることはなくても、多くの子どもたちが倒れこんだという事実も、子どもにより放射能の影響が出やすいという事実を鑑みれば辻褄が合う。毒が土壌に染み込み、後から人々を苦しめ続けるというのもまた、放射能の特徴だ。考えれば考えるほど、楓はパメラのその仮説に納得させられるのであった。パメラは、楓がそのような夢を見るのは、被曝した歴史を持つ日本人だからこそだろうと言った。幼少期から積み上げられた被曝に関する知識が、楓にそのような夢を見させたのだろうだと。

楓にとって自分が日本人であることは大きな問題ではなかった。むしろ、雪の夢を見たその朝に、長く降ることがなかった雪が降り始めたということに特別なものを感じていたのだが、ここに来て日本人ということに焦点を当てられることになるとは。いつだって楓は、日本人じゃなかった。日本にいる間ずっと楓は、欧米人の血が混じった、日本人になり切れなかった日本人だった。黒を基調とする人の波の中で、ただでさえ人目を引く容姿をしているのに、挙手をしないことが暗黙の了解になっている教室内で臆することなく自分の考えを口にする楓に、周囲はいつだって騒然とした。行き過ぎた集団行動に異を唱えた楓に対して、日本ではこれがスタンダードなのだよと、まるで楓は日本人ではないかのように教師たちは言い放った。だのにパメラは今、楓のことを日本の教育を受けた一

人前の日本人として扱っている。楓はそれが不思議でたまらなくて、寝不足の日の朝のような眩暈に似た感覚を覚えた。今日の雪はやはり有毒だっただろうか。パメラの輝く緑の眼を見るうちに、楓は母のいる東京を思った。夢と現実との境が曖昧になってきている。ぬるくなったココアをぐっと飲み干した。

## 藤真ユイ

### たいくつ

日曜のお昼すぎ
窓べのカーテン開ける
パンツがたなびいてる
きのうからあるトランクス

今日もなんかたいくつ
むずむずする気持ちと共に
たなびくパンツを見ていた

### 蜘蛛

真ん中からすっくりと
広がって　繋がって
巣をみればそんなふうに
まるでたくさん　繋がって

けれど独りで作ってる
真ん中には　なにもない
今日も独りで閑古鳥
ひっかかるのは　雨の玉

## なかみ

ふっても音はしない
けったら音がなるの
何にも入ってないの
誰も知らないでいる
遊ばれてた事あった
今じゃあリサイクル
新しく生まれ変わる
そんな事あるもんか

カラなんじゃないの
そんなカタチなだけ
だからなかみはない
なかは大事じゃない
このみがひとつだけ

## 手のひら

シワが増えるといやなのだけれど
手のひらだけならゆるしてやろう
なにかで讃えられた時
手形をとって　残すみらいがきて
そんな時みて　かっこいいように

手のひらに人生が滲み出るらしいが
それって手相なんだろか
手のひらのシワ　眺めてるだけで
手のひらのシワ　増えてる気がする

## ほっぺ

可愛いあの子はオレンジチーク
ほんとはちっとも似合ってない
だけど僕は笑うんだ
陽だまりみたいで可愛いほっぺ
きみにはいちばん似合ってる
だって僕は知っている
あの子がピンクのチークの時は
横にいるのは僕じゃない
友達のフリで付き合って
ほっぺにキスしてさようなら

# 石川大貴

## 焦がれる

今日よりも明日にあこがれる　今日は誰もい
ないから
私の色は変わらない　指先ひとつ変化のない
今日はなんにも起こらない
きっと今日が安らかならば　昨日誰かが祈った
からで
昨日私はなにを祈った　ちゃんと祈っていたの
かな

誰の　　私の
違う　違う
誰の　　私の
あなたの

今日明日にあこがれたなら　明日はなにに焦が
される
ずっと昨日にあこがれたなら

別れや死をもあこがれる　いっしょくたにあこ
がれる

こぼれた涙を取り戻したくて　私は明日にあこ
がれる
今は誰もいないから　私はきっといないから

焦げたいのちを押し止めたなら　私の時は止ま
るのか
それでも私はそうなれない　今日は誰もいない
から

# 神奈川県

## 田中修子

### 青い馬

黒い夜なのに、はっきりと見える。妊娠していたときに産院できいた心音はまさしく海の鳴く声で、体中に振動している。

波打ち際を、馬が駆けている。駆けているのに、透明な膜につつまれているようで、いっこうに近寄ってこない。

あまい潮のかおりが胸いっぱいに溶けこんできて、私の腹のなかにひたつく海も連動してどうどうとうごめいている。

向かいの半島にひかれた道路に走る車のヘッドライトは橙や赤の光の粒だ。運転席の男、助手席の女、うしろにいる子どもはとおい目で物語を幻視している。あれは、過去の家族だ。

馬の足もとには銀飛沫が跳ねかえされて、空中にいっしゅん硝子のように浮かび、落ちていく

のが奇妙にくっきりと見える。
濃藍の波と白い波頭が無限に繰り返される。
馬はくちちもとから真っ白な泡を吹きだしていた。
こんなにはっきりと見えるのは、わたしのあたまのピントがずれているんだろう。そもそもここはどこだろう。いつ、このよるべのない浜にきたのか。
馬の上の人影は甲高く笑っている。

もうわら一本でくずれようとしているのね。
音は耳に唸っているのに、心は異様にシンと静まりかえっている。
何千何万の鳥が、しらなみという名になって、あしもとに打ち寄せられている。
すくえない、くだけちる、踏みしだいて、こわれていく、呆気ないもんだね！！
数え切れぬ、あの鳥。
明かりが欲しくなって、身にまとっていた大きな赤い布を、ひんむいて浜におろす。浜辺にライターが打ちあがっていないか探した。耳を舐めるような音がして振り返ると、布は勝手に赤い舌をだしてめらめらと燃えてあがっており、ゆらめく炎があった。
馬のうえにあるのは、十一面観音のようなひとびとだ。母と父、また見知らぬ、なつかしい、断絶した一族が混ざり合っていた。
ああ、あなたがたは、そこにいたのですね。子のことをおいてけぼりにして、うっとりとして溶け合っているのでしょう？
月のきらめきの落ちる浜はひろすぎてとどこおることもない、こわれていく鳥たちは一羽一羽がちいさな三日月を身に宿しては毀れていく。月が満ちたときに、腹のなかの海はいっせいにしたたり落ちる。
馬の細い脚はもうすぐ軽い音をして折れる。

そうして一族に撃ち殺されることを待ちながら
墓所にひざまずく姿は、祈りを帯びて青かった

# 武重路子

## 友

きょう
君の細い肋骨のような雲が出ていた
その中を夏が渡って行くのが見える

ベッドから見上げる君は
ただうなずいて笑うだけだ
ボクも手を握ってうなずく
密度濃くなっていく言葉のないやりとり

ボクは君に十分聞いただろうか
君はボクに君を話しつくしたか
ありあまる時間があったのに
ボクは　ポツリ　ポツリの君の言葉を拾っていただけだ
今
錨のようにボクの中に沈んでいる言葉が
重みを増していく

晩夏になる頃
君はもういないのだ
そして
雲のような君の肋骨を
ボクは拾うだろう

## 還暦

夕陽が射し込んで
居残りさせられていた児童は次々と帰り
私は最後まで残っていた
先生は丁寧に教えてくれて
つるかめ算も植木算もよく分かった
教室を出る時
私は

社会の仕組みも真実もよく見えていた

Ｘイコール Ｙが始まり
数学は分からなくなった
同時に
見えていた世界は
霧の中に隠れてしまった
山あいの校舎に夕陽は当たらない
図書館の裏庭で
私は途方に暮れていた

あの庭から
ずっと生物として暮らしてきた
女の眼で男を見　社会を見た
閉経の後
世界は明晰だ
夕陽の射し込んだ教室にいた
私がいる

## 佐々木由里

### こころが HEAVEN

欲しいものは整合
だからあたしは整理整頓繰り返す
要らないものは混沌
だからあたしは毎日ゴミを出す
分別だってちゃんとする
集積所で毎朝会うのは
濡れ羽色の烏
それともあたしの髪が
濡れ羽色だったんだっけ
どちらでもいいわ
だってあなたと
あたしは
一体じゃないの
誰も話し相手がいなくって
あたしは今日も
繰り言紡ぎ出す
聞いてくれそうな

相手を
探す
そして今日も
情報のシャワーを
浴びよう
存分に
見たくもない広告と
聴きたくもない
商業ミュージックと
知りたくなんかない
どなたかの何か
甲高い女の声も
もう気にしない
だって
烏の羽は
黒々としてるし
あたしの髪は
白と黒が
綺麗に
混じり合って来たし

そして
昨日のあたしと
明日のあなたとの間には
可愛い子供が
生まれるし
まだ口はきけないくせに
目配せが上手みたい
ゴミ収集車も
もうすぐ来るし
綺麗さっぱりと
全部持って行ってくれるし

## 落知之仁美

### 夜に幻

飛ばない蝶々に名前をつけた
「ただのアゲハ蝶」と
あまりにも羽根を伸ばさないから
「ぎこちないのね」

あたしは嘲笑ってみせた
夜のネオンを覆えるぐらい
色っぽいその身で
人々の虚栄をすり抜けていく
「随分、低空飛行ね」
あたしはベンチに独り座った
そして、喘ぐように呟く
嗚呼、これは酩酊による
美しい笑い話なんだと
もう一回、消えるように
「飛んでいきたいわ」
そう言って右脚を組んで
瞳を瞑ってしまった夜の入り口。

## エンヴィ

尻尾を優美に
今日も振りまく
辛い餌が欲しい
甘い液が足りない
淫靡な舌が
踊りを教える
教訓は「歩けるわ」
合言葉は「大事に思ってるわ」
小さく鳴く、愛くるしいあたし
大きく振り舞う、憎いあなた
アンビバレントな心と
ニュートラルな会話だけ
今日もトーク履歴に、残しておこう
綺麗で子供みたいな格好だけ
あの野良猫と似てるような気がしてる。

## 各駅停車

ちゃんと止まろう
忘れられないのなら
アスファルトに焚かれる
影法師のあたし
後悔する前に
降りて外を見渡そう
乗り過ごした思い出のぶんだけ
新しい場所を覚えておこう

全てを見捨てた、あなたを愛して
今ここの駅で、深呼吸をしてみよう
未来への期待を抱いて
希望という名の、夢を数えよう
「ここが待ち合わせの駅じゃん」
そこに降り立ったあたしは
もう他が為でもない
気になる誰かとの思い出を待ち合わせる
たった一人の女の子。

## イヤホン

意味すら分からない洋楽を聴くのは
もうあなたの言葉を知りたくないから
教えてくれた恋歌を聴かないのは
あなたの幸せを分けて欲しくないから
流れる、何か切ないものたちと
一緒にただひたすら歌ってる
あなたを見つけて
居場所を手に入れて
繋がる想いを抱いて
眠って、目を覚ました
可愛らしいあたしの日々
この曲の和訳だけ
痛みの歌詞だけ
理解してもいいのかな
淡いブルーのイヤホンが
真綿で首を締めるかのように
あたしの愛情を縛り続けてる。

## 高鳴り

金髪の彼女から
「これから彼氏のお家行くの」
なんて甘い噂を聞いた
微睡んだ両目に
何故か平穏と安らかな
恋を覚える
「お幸せに…どうか気をつけて」
歪んでいるような、でも真っ直ぐな
愛らしい片手に
そっと、あたしの純粋さを置かせてもらう

古びた左腕に
若い胸の高鳴りを感じて
だからこそ、あたしは
いつものそこらで身体を弾ませてみせる
大好きで憎い何かと誰かに
人知れず動悸を求めて
「ありがとう、やっぱ素敵ね」
なんて黄昏て
ロマンは歪な羽虫が語り
「恋愛って怖いよ…」なんて
またまた吐露して飛んでいったの
あの娘はきっと、あたしより
胸を高鳴らせてるのかもね。

## はなびらとまざる

出逢ってしまったの
何人とも言えるアナタに
変わりゆく季節と一緒で
とても理解し難くて
…春の櫻の様に、可愛い人は
手を繋ぐことが大好きで
…夏の陽の様に、許せない人は
話すことが難しくて
…秋の葉のように、寂しい人は
自然と放っておけなくて
迎えることを信じた、寒い冬の人は
いつも互いの中に在る気がしてる
割られた窓に映るのね
本当のアナタが、ただ一人
破片の様に痛いのね
粉々にされた過去が四つ
結ばれた春と
傷を舐めあった夏と
無視を続けた秋と
そして、何も出来やしないと悟った
冷たすぎる最後の冬
授かった生命線すら
トラウマと言う思い出にしてしまった
二度と帳消しに出来ない、終の季節
何処にも捨て場がなかったから

枯れた枝にも優しく接吻をした
散っていった花弁を想像しては
あたしは、その一枚一枚と混ざり合った
そう思い、忘れゆく償いの準備をした
「ごめんなさい、でも逢いたくて」
やっぱり今日も、アナタを愛してた。

## 泡沫

誰かが選んで
適当に置いていった洗濯洗剤を
たった独り、舐めてみた
飲むな危険
知っているよ、そんなお話
幾度となく繰り返した行動を
泡沫の物語として、起こしたいから
僕から今現在のあたしに
成り下がるようで、昇華する
早くシャボン玉にでも乗って
あの頃の自分たちに、羽根を渡しに行こう
飛び込んでみた君の洋服が
何故か洗い立ての様にいい匂いで
そう微笑んでいたよ。

## 愛情だなんて

言わないで欲しい
愛情とは
情が付いてしまったから
人の為にもならなきゃ
犠牲が生まれる心になった
感じたモノを取っ払ってでも
情けは全ての言の葉に、持ち込まないで欲しい
友情もそうね
でもせめて、愛情だけは
愛に情けだけは
否、そのままでいてくれたから
「要らない」だなんて
言えなかったのだから。

## あい

それは何かの言いなりになる様に

知って朽ちていくんだ
嘘を飾りにするかの様に
傷をひけらかすんだ
あたしもあたしで無いかの様に
愛も愛で無いかの様に
何も持てない自分自身を
壊せず、保ち続けるんだ
時計の針と共に
狂った胸が煽り続ける
打っていく言葉の意味を
まるでこの身に置き代えるかの様に
これは尊い遊びの一つで
実はそれまでの出来事なんだ
あたしがアナタの一時で
アナタがあたしの鏡に成ったのなら
きっと、これからも共に生きようと
そう、誓っていたんだ
愛が愛で居てくれようとしたのなら
あたしもあたしで居てよかった、と
嘘でも仮でも情でも
あいだったんだ、と
また今日も、呟いてしまったから。

## カルテ

黒いサナトリウムの、白いカーテン。
打たれた窓と、破れた包み紙。
上流の血液と、下流の吐瀉物。

誰にも知られず保ち続けた、青空。
はじめてこの身を裏切りました。

柔らかい純粋さが、とても素敵でした。
まだ溜まっているであろう、過去の涙も。

無色な固形物が、溶けた心を荒らし
錆びた刃先が、鈍麻した腕を煽り
また会いたい人の、密かな嘘さえも
きっと視えない幻です。

手紙は絶えません。時に隔たれた病と憎悪すら、

一秒さえも眠らせてくれずに。

歪まれた欲求と、陳腐な交わりが
いとも妄想症を切り裂く様に
両脚を震えさせます、両手を冒涜させます
心を壊し続けます、歌も歌えません。

ですから、ある日。
意を決して自身は物語になると叫びました。
激しく陽が降り注ぎ、隔離された一室を
残された体温で放火してみせたくて。

なので、こうして
錠剤を舐め回し舌を突き出させ
愛想を売った成り下がりの造物は
やっとこれが、人生の道中だと解り
アスファルトの破片で傷つき、通行人に分別さ
れる未来を選びました。

愚かだと嘆き、白痴だと罵倒されつつも
当然だと言わんばかりに、紙束に言葉を吐露し
続ける彼女は
とてもありふれた世界の一人でした。

花も無ければ棘もなく
救済もなければ慰めもない
その目眩と過呼吸と平凡すぎた自己破滅感だけ
を、一人は不安性及び恐怖症だと
謳えてました、謳って下さいました。

嗤い続けられた病める時期を、この身は愛して
います。異常に愛されてもいます。

そう未だに、愛おしく胸を締め続けているから。

季節が過ぎたら、病院の影を
思いが心になったら、足りない涙を
流して微笑みんでみせましょう。

「さよなら、また会ってしまう日まで。

ばいばい、言えずに。
でも、ありがとう。
だって、忘れられないから。」

めくられず放置された書類は
もう見ぬカルテの一つだった。

帰郷するみたいで、不思議だと
その人は口を開けて、息を吐く。

一枚めくったのは、一枚分の出来事を見送りたかったからだろうか…。

『診断書曰く、本人に病識はなく自身を物語として見ている様子。極度の妄想癖及び自傷行為、他人に対しての攻撃性がある。誰かに見られた い、誰かに助けて欲しい
恐らく…
必要以上に愛されたい気持ちがあるのだと私は感じる。』

## Satoko

### カタチ

水渦にもどりゆく人のカタチ

水面の穏やかさに委ね水平線に向かう

道を描くは色鮮やかな花々に
水渦にはまっすぐに

水面には長く長く湾曲な道を描き水平線へ

核に個は瞬く間に吸い込まれ
水面にはゆっくりゆっくり湾曲な道を描く

花々の造る道を観
目に雫を浮かべ花贈るはその人の人生を歩んだ
華々

見送られるは
彼らに道に花を生けたひと

## 忘れな草

泣かないでもう
僕はここに居る
でも旅立ちのとき
たくさんのありがとう
後悔もあるの十分なのに
愛する君は泣いている
涙枯らして過ごした日嘘にするの
悲しいなら今は僕を忘れて愛しいひとよ

青空の中あなた旅立つ
胸の中のあなたここにはいない
穏やかな青空の思い出道さよなら言って進むよ

温かな焔に抱かれるあなた
空を見上げる

大好きな君これからは未来を歩いて

僕らはまた出逢う

場所は決めてないけど未来の約束

## 佐々木裕雄

### なつかしい湯たんぽ

雪国の夜の寝床
きーん　きーん　冷えた空気の音
窓の隙間から風　ぴゅー　ぴゅー
身震い　身震い　ぶる　ぶる
首だけ出した重い蒲団
くらやみに吐く白い息が飛び出す

蒲団の中の母の入れた湯たんぽ
じわじわとあたたまる
気持ちがふくらんでゆく
猫のように体を丸くして
ブリキの湯たんぽを
ぎゅー　ぎゅー　抱きかかえる

遠くから酔っ払いの声

大きな調子はずれの歌
軍歌だ　貴様と俺とは同期の桜
飲んで歩く雪の道は気持がいい
寝てしまうと凍え死ぬ
母は言う　雪国の夜の酒飲みはいけない

静まりかえった窓の外
しんしんと雪が舞っている
大きな灰色の綿
月明りの綿雪を数える
一　二　三　四・・・・一〇〇
夢の中

朝の日差し
どさっと屋根から雪が
どどー　どどー　どどー
家が揺れる
つららの融けるしずくの音
ぽと　ぽと　ぽと
ぬるんだ湯たんぽを抱えて起き出す

洗面器に湯たんぽの湯
ぼこ　ぼこ　ぼこ
湯気でつつまれる
洗面の湯に顔を入れる
母のやさしさの湯

母は九四歳で逝く
われは七四歳
今は電気毛布
なつかしい湯たんぽ
なつかしい音と声
なつかしい温み

# 新潟県

## 駿二

### ブコウスキーが喋れば

ブコウスキーが喋れば、
ありふれた言葉が
すべて文学になってしまう。
ブコウスキーが唄えば
出逢った人は、
かぼちゃに化かされてしまう。

酒と博打と女たち
使い古された
風俗的なクリシェが
場末で語りつがれる
噂話になる。

ブコウスキーは云う。
難しく考えるな。
人生はいたってシンプル。
お前が愛するものを

死ぬほど愛し抜く。
たったそれだけなんだぜ。

どんなに惨めな夜だって
よろよろと町をぶらつけば、
月明かりは足元を優しく照らし
野良犬も後からついてくる。

言葉にさえできればしめたもの。
どんな落ちぶれたものにも
それぞれの役柄があてがわれる。

ああ、神様。
このクソッタレた人生を
やり過ごす為の
上等なコメディをくれないか。

ちぇ、しけた顔したお月様め。
げっぷでもくらいやがれ。

## かくれんぼの樹

愛するものが死んだと告げられる時、
耳の奥ではパチンと何かがはじけ、
あたりはしぃんと静まり返る。

我々と死者とを隔てるものとは何だろう。
かくれんぼの鬼役と隠れ役のように
それは同じものではないだろうか。

母親が死んだ娘に話しかけている。
娘を死者の国へと見送ってはみたが、
何だかまだそばにいるような気がしてる。
あの世に逝ってしまった娘とは、
今もかくれんぼしているだけではないか。
母親が娘の面影を思い浮かべ、
名前を呼びかけつづけている限り、
今もまだ木の影に隠れているのだ。
ただ疲れていつのまにか眠ってしまい、
目覚めるのは、たまの一瞬ではあるが。

すでに死者のことがぼんやりと忘れ去られ、
話しかけも呼びかけもしなくなるとき
辺りは薄っすらと夕暮れ時に差し掛かり、
あちらこちらでひぐらしが鳴き始める。
彼らは本当の帰り支度をはじめるのだ。
誰も知らない森の奥処へと姿を消すために。
その後ろ姿には、未練も悲しみもない。
もう思い残すものなど何もないのだから。
生者と死者とは、ひとつのこだまなのだ。

# 富山県

## 笹川　雪

### ぬれたアスファルト

ぬれたアスファルト
走り抜けるトラック
灯る外灯
夜のアスファルト
落ちては消えてゆく、私の思いや感情たち
そしてそれを私は遠くから
ながめている。
落ちては消えてゆく雪
何を言うことがあろうか。

水たまり
はねる水

今はただ遠くから
ながめ見つめることしか
できなくて
アスファルト

# 片口理恵

## 夜の門

夜の門というジャズバーがある。聞こえてくる演奏はいつもピアノだ。壁一面が漆黒で、時間をかけて塗りと乾燥を繰り返し、上質な硬さと光をたたえている。

東の壁には、目の高さに金が細長く埋め込まれ、闇夜を破る最初の閃光を目撃したような気がするが、しばらくそこに佇むうちに、深海に溺れている心地に支配される。それとも、ここは宇宙か？　もしかして今、天地創造に立ち会っているのではないだろうか。

天井はなく空に吹き抜けていて、不思議なことに、見上げると必ず弓張りの月が大きくかかっている。やはりここは地球らしい。

女がそこへ出かける時、必ず濃い菫色の夜会服をまとう。髪は烏の濡れ羽色でなくてはならず、長いほどに美しい。壁には、偶然を利用してか、計算され尽くしてか、ところどころに小さい螺鈿や金箔が埋め込まれ、それが女の睫ごしに鈍くきらめくと、男たちは皆、幕は切って落とされた、という勘違いをしてしまう。

女が睫を伏せていると承諾の合図かと思い、目を見開いて宙を見つめていると拒絶かと思い、劣情はかき乱されるばかりだ。

酒器も漆黒で、弓張り月が影を落とす仕掛けになっており、人は酒を揺らして月を砕けさせたり鎮まらせたりする。女は「後朝のあわれについての一考察を述べよ」とささやいたりする。

男たちは酒の水面をゆらりゆらりと揺らして見せながら、真意を確かめようとするが、女は唇を濡らすばかりで、菫色の夜会服の中身は謎を深めこそすれ、何一つはっきりしない。

漆黒の壁に、流星の跡が金彩で勢いよく落ちているのを認めると、いつもそれを初めて見たように心が突かれて、女はそれを潮に去って行くのだった。

そうすると、清潔で妥協のない漆の壁とは裏腹に、取り残された男たちの、今夜も道筋さえつけられなかった、という不満や無念が澱むのだった。

ピアノの演奏は続いている。吹き抜けの空を見上げれば、弓張りの月が、夜明け間近の空にかかっている。

## 草野元瑛

### 芳ばしい伯父

――伯父が死んだ。伯父が死んで「死」の語源がますますわからなくなった。火葬場で伯父の頭蓋骨の欠片をつまんでも伯父の肉体が焼かれて僕の世にはもう存在しないという皮肉が残酷に滑稽だった。そのまま伯父の頭蓋骨の欠片を口に入れ噛み砕いて食いたかった。骨壺に入れないと伯父が欠落してしまうので諦めた。指に残ったパウダー状の伯父を外に出て舐めた。人差し指と親指とを交互に舐めた。伯父を僕の今日から。にすべく舌舐めづりを繰り返した。まさか死ぬとは当の伯父が一等思っていなかった筈だ。伯父が生きることを諦めたようには誰の目にも映らなかった。死の前日まで自力で尿もできなくなっていることすら気づかぬ風情の伯父は「トイレに行きたいのに誰も連れていってくれない」と泣いていた。ただその泣き方も云い方も妙に可愛らしくて一流のコントのように間も抜けていて一同は伯父への信頼から安心し切った

ように笑っていた。酔っ払ったときに箍の外れる伯父を一同が揃って好きだったのと同じようにだ。アイロンがけしたパリパリパンツしか履かず、ティッシュペイパーに至るまで(値段ではなく)素材や材質にこだわる頑固者でもあった伯父が【病院(或いは不可解な組織)に閉じ込められ監視までされている】という認識で僕に助けを求めてくるなんて限界まで痩せ細った伯父を見るまでは想像もできなかった。それまでの伯父は脚や腕に水が溜まっても理解できずに動かそうとしては苦しむ無邪気な存在ではなく自分なりに賢く生きていて当然の存在だった。何か僕がやらかして伯父として怒られるくらいなら距離も置くし、ごく普通に腹も立つ肉親の一人。そんな当然の存在であった。肉体という不完全性を憾むように人間が生まれて死んでいくものなら、ずる賢くとも温かい人道より単細胞のごとき業道を照らしてくる宗教など自ら喪うためにも生まれて死んで、明日を恐れる人間の感情ほど「今」が死角化するものなどなく未来の子供達のためにと口を揃えてまで代替えするためにも生まれて死んで。どうか、それでもいかがわしい神や仏になど僕は伯父にはなってほしくないのだ。あなたが死に際まで生きた覚悟はそのベールに包まれても丁度いい潮時なのかも知れないが、もう病気になど苦しまずつくづく自由にあらゆる駄目出しをして性懲りもなく悪態までついてほしい。生きても死んでも身の丈など顧みない一介の人間にいかがわしい聖など求めない。僕はそこまで弱くも下劣でもない。そんな僕の強がりがあなたのお気に入りだった筈だ。それでもいつも他人様に気を遣いながら黙り込む伯父の背中に潜んでいた饒舌が今や嬉しくて前のめりに僕は執着する。伯父が最期に見たもの。伯父が最期に見たものは何だったのか。―大きな黒子。伯父の大きな黒子がたった今、顔のどの部分にあったか思い出せないでもいる。「生きていれば卑怯になるのは当然である人間を許せ」だのと数年間引き籠もりだった僕の耳許へとそれとなく伯父は届けてくれてもいたっけ。

それでも僕の減らず口に辟易とする伯父の顔が本当に厭になったとき一度あなたは僕を強引に抱きしめ頬ずりまでしてみせたから何が起こっているのか理解できないこともあった。そのときの伯父の感触は、几帳面な人間でも剃り残すような頬骨あたりの僅かな髭の感触だった。そんな伯父は僕も人間の端くれであることを僕に正確に知らしめるためには大いに役立った。幼少期の僕のヒーローであった千代の富士が膵臓ガンで死んだときなど伯父は僕を気に掛け駆けつけてもいる。あっけにとられている僕がもうそこまで子供ではないという実態を把握した折に安堵する伯父の顔はとても優しかった。伯父は律儀で規律正しく若干神経質だがユーモラスで平常心に映えてもいる男だった。伯父を悪くいうものはその伯父でさえ時々喧嘩相手だと思い込む僕くらいのものであった。それでも平成の終わりを告げられたとき二三日ほど眠れなかった僕はきっと誰かの子供のままでその元号と連なるように伯父は余命を告げられた。だんだんとその病の性質から脳へと血液が循環しにくくなった。それが原因で起こる伯父の世から見る認識の乱れ。何ら忌憚のない可愛らしい子供のような伯父そのものの塊になっていった。その塊とは「自己という牢獄から手をのばしはじめる歓喜」だったのか「自己という地獄とも握手しはじめた歓喜」だったのか。それともどうしようもないほどにかるい(自らの)命に挑みはじめた伯父の可愛らしさをはじめて知って居たたまれなくなった僕の反映だったのか。当時の伯父の世から見て病院という牢獄。或いは不可解な組織からの脱獄を叶えてくれる唯一の肉親。その最終手段として指名され握られたこの右手に、僕自身が追いつかないまま少しでも伯父に寄り添おうと決めたのだった。伯父はこの右手を握った刹那乳呑み児のように「助かることを確信」してしまったのだ。僕の感じた重圧は確実に僕のものではなく伯父の可愛らしさという重りだった。伯父そのものの塊から見れば、この右手は僕そのものの塊だったのか。僕にはまだ自ら

のその塊など知りうるすべもなかったのを束の間にしてだんだんと周りが見えなくもなって「おじちゃんは死なない」だのと胸を張る確信へと変化してしまった。――平成最後の十一月九日。午前十一時頃よりF病院にて何度も動かなくなっては蘇生を繰り返す伯父の鎖骨あたりを摩る僕とその向こうでずっと声がけをする伯父の献身的な妻がいた。伯父は天井に向かって頭をガッと持ち上げ「いぃぃぃ」と小さな声を絞り出すようにその前歯を口の外へぐぅぅぅっと突きだした。ついで左右の肩を胸の内側へと折り畳むような形で強く震わせたあと柔らかいコマ送りのようなスピードでベッドへと沈んでいった。

それが伯父の最期だった。

「今から元気になる私の邪魔だけはするな」とでも云いたげな伯父の肉体は次第に絶望の色を経ていったが、その表情は穏やかになって潰えてゆく。という人間の矛盾そのものの光景。伯父が自らの肉体を棄てることでの特異な元気を手にしたあとの病室でも、きっとその死を掴み損ねているに違いない僕は伯父の鎖骨あたりをずっと摩りつづけていたようであったが既にその病室は不思議な空白でしかなかった。

……

その感情にもし一片の慚愧も下りてこないならその理性や知性も果ては父性や母性に至るまでもその感情的な愛によって齎される排他的な火の粉でしかないなんて人間とは何と美しいのか！――と僕に云わせるのは誰か。そもそも生とは何か。僕の世が自分の言葉になることでの引換えによる忘恩ですらもないならいったいその死とは何か。どうやら醜さの象徴にはなりたがらない生と死とは水と油とは異なるらしい。

――読経の音が、汗だくになって油まみれにもなって響くような葬儀は終わった。

――あのとき、この指に残ったパウダー状の伯父をなんとしてでも皆に隠れてでも舐めていなければ、僕は掴み損ないの空白のままで言葉が軽薄な意味合いでの自分の言葉だけになって生きねばならぬ空白の土地へと向かわされそう

であった。きっと芳ばしいに違いないその骨を舐めずに終える結果が僕には恐ろしくて堪らなかったのだ。そんなご馳走のついた無数の指を拭うためにも当然の如く配られるおしぼりがあった。僕と伯父とを引き裂くような誤魔化しに充ちたおしぼりの現実は僕の存在理由が日々翻るように喪っている宗教を二度も喪わされるようなものであった。伯父自身が化けて出てきてくれるほうがどれほど有難かったか。肉体を棄てても伯父の骨は伯父の意志の味だった。繰り返す。肉体を棄てても伯父の骨は伯父の意志の味だった。ただあれからその伯父に合掌しにいく度にたとい雲行きが怪しくなった日も雨に遭遇した試しがない。帰宅した直後に決まってこの家の屋根や地面を叩き始める雨の音を聞くのだ。伯父によって遺された一同を雨から避けることで伯父は自らの居場所を示してくれているのであれば、そんな嬉しいことはない。と既に暗くなった窓外を捜し始めてもいた矢先のことである。いつものことだが僕の母が突発的に

「……泣いてる……」とこれもいつものように全く主語のない母の世からじっと天井を見上げているのである。「誰が？」と問えば、母は優しかった自分の兄(伯父)の名をがさつに呼び捨てにした。肉体を棄てた伯父が僕の中ではじめて腹を抱えて笑う瞬間だった。既に伯父は僕の舌でずっと芳ばしい味のまま僕になっているようでこれからぞっとするほどせわしくなりそうなそんな気配がする。死の前日まで皆を笑わせてもいた伯父は通夜や葬儀中以外は人の号泣と爆笑とを交互に巻き起こさせる天才であった。「優しかった私など私以外の誰かご先祖様の名残だったのだからもう泣くな」と伯父は今一度僕を買い被るように面白い顔までしてみせる。(伯父にとって母親である)氷見の祖母が死んだときに自分の母親の死を悼みながら棺から離れずしがみついていた男が、

　自分を棚に上げて、僕に泣くな。と面白い顔をしやがる……。肉体を棄ててもなお伯父はこの隙間を埋めようとしてくる。

# 石川県

## 西村　薫

### ニュースで十秒取りあげられた

屋上のフェンスの向こうは
三歩で空を踏むほど狭い
錆びた鉄のにおいがして
指にはダイヤモンドが食い込んでくる

眼下に人はなく
少しほっと息をつく
望みが叶った
僕は完璧な孤独を求めている

踵を踏んでいたシューズを脱ぐ
あの日と変わらない二十四㎝

重力に従って
永遠の無重力へ
裸足の足の爪が目に入る
切っとけばよかったな

下へ向かうスピードは
およそ何キロなのだろう
目を細めて考える
僕は理系だった

答えを出せずに重力のもとへ
あの日と同じ二十四㎝

## マジシャン

つまらない日常に抵抗しようとしても
大あくびを繰り返しては
悪い空気を吸って
涙を流すだけの日々

僕が蒔きはしたが
育てきれなかった夢の種を
あの子は花にするのだろうかと
駆けてく麦わらを眺める

幼かったあの頃
友達のおもちゃを奪っては
虚しさに震えていた
手の中の物は僕の物にはならなかったから

この世に魔法はない
だから急に何かが変わることはない
だけど種と仕掛けをきちんとやれば
ほらね　少しだけ何かが変わる

そんなのはその場しのぎだと
君は言うかもしれないね
だけど僕はやっと見つけた自分の生き方を
手放せないから

今日も
「マジシャン」だと僕を名乗るよ

# 順番

そこに長い椅子の列がある
左側は空席だらけで
右側には人がたくさん座っている
うつむいたままで座っている
昔は人がたくさんいた
一人一人去って行った

僕の隣にいた人も
ごめんと言って去って行った
僕は首を振るしかなかった
だってほかに何ができたろう
あんなに悲しそうに席を立つ人に

ねえ　右の君
僕たちは見たくないものばかり見て来たね

喪服の天使
呂律のまわらない正義の味方
机に浮かんだ血管

恵まれない雨
暗い冷たい闇の雫
叫んでは響くだけの声

そんなものばかり見ているうちに
脳は糸みたいに溶け出して
毛穴から流れていく　流れていく
思考が　思考が　流れていく
残るのはいつも残ってはいけないもの

ねえ　右の君
本当は気付いているよね

隣の人が席を立つのは
「番」が自分に来たからだということ
そして僕はいま席を立とうとしている
残ったものの命令に従って

どうか君は席を立たないで
残酷だけどお願いだ

どうか僕で終わりにしてくれ
こんな惨めな思いは

## 傷

朝　目が覚めるとすぐに
首に手をやる僕の情けない癖
出るたびに僕は苦く笑う
鎖を求めているなんて

髪を指で梳きながら台所へ行く
昨日の残骸が僕を待っているだけ
音も臭いもそこにない
君は何も残していかなかった

傷んだ羽ときしむ骨で
君を空へいざなった日々
僕の背に痛みが走るたび
君は嬉しそうに笑っていた

そんな思い出しかないのに

なぜだろう　僕は君のことを
許すことも憎むこともできずに
ただ追い求めている

宝でもないのに……
その価値もないのに……

## ともだち

もしも君が涙を流すのなら
僕はずっと横にいて
海が出来るのを待つよ
僕たちは漂流者になる
冒険にいこう　どこまでも

もしも君が怒りのせいでダメな火を作ったら
僕は君に水をかけて
僕にもかけろと言うよ
僕たちは風邪をひく
同じ布団で眠ろう　いつまでも

もしも君が自分は独りぼっちだというのなら
僕は黙って君に背をあずけて
君が好きな本を読むよ
僕たちは同じ体温になる
一緒に読もう　何冊でも

もしも君が今みたいな笑顔でずっといるなら
僕は君よりうれしくなって
君に笑顔勝負を持ちかけるよ
僕たちは気のいい馬鹿になる
ねじは緩い方がいい　何本でも

これは僕と友だちの話
「もしも」が紡ぐ愛の話

## 殺人鬼

牧師を言い負かすのが趣味の
無邪気な気分の彼が笑っている
どこにだっていそうな彼の中には
空っぽでぎっしりな心が詰まっている

彼はいつもナイフを持っていた
いつ止まるか分からない心臓に頼って
生きようとしないやつらに
後悔の涙を流させるため

彼はナイフで人を刺した
決して心臓は刺さなかった
それは勝手に終わるものだからと
誰よりもそれを愛でていた

今日も彼は牧師を言い負かす
無邪気な気分で笑い
生を意識して
心臓を愛でる

## 海よ

綺麗な金の髪は
潮風で傷むことなく綺麗で
タバコをくゆらすその指には

小さな火傷と治りかけの切り傷

小さなレストランで
自分の親だと言ってくれた恩人に報いる為に
そこを動かなかった背を
押したのは他でもないその人で
腕を引っ張ったのは役に立たない雑用で
彼はやっと夢へと進む

広がる世界は牢屋よりも孤島よりも大きくて
見たことが無いものが多くて
振り向けば仲間がいて
そんな幸福がうれしくて　彼は今日もご飯を作る

そんな彼の大事な腕に手錠をかけたのは誰だ
泣かせたのは誰だ
降りしきる雨の中　点かないライターを延々と
いじらせたのは誰だ

ねえ　海よ
どうか過去に自分を殺された彼を
世界が気にかけてくれますように

## Aice

一杯

揺れる車内
付属のおまけみたいなほっそい鏡で
器用に化ける女の子
あぁ　私だってあんな風に
おはよう
前髪を抑えながら来た　あの子
恥じらいを孕んだ　滴り落ちそうなほど　瑞々
しく潤んだ目の上
整った眉
切り揃った艶っぽい黒髪
切りすぎちゃった

笑う唇も　吸い込まれそうで
切りすぎちゃったの
嫌そうな口調と　少し歪ませた顔
隠しようのない　自覚してない　溢れ出る自信
切りすぎちゃったよ
初々しい黒髪に入れた　鋏が滑る
どこまでも　どこまでも　いつまでも切りたい
傷付けたい　もっと
綺麗にしたい　そっと
だから　きっと　かっと

スカートから伸びた白い足
どうしたって作れない白
私には若くたってなれなかった白
あぁ　私は私　あの子はあの子
何度言われたって　何度思ったって
死が怖いのと同じ　ずっと同じなの
せめて集めて　欠片を集めて
見た目だけ少し作ってみるけど
何もかもが　本質が違いすぎて

大好きなあのモデルさん
他ならぬ　あなたの願いが
私の姿を光らせている　なんて
じゃあ私の姿は誰が光らせてくれるんだろう

スケッチブックで受ける授業
ドイツ語サマースクール　一年生かな
文系かと思いきや　元素手帳
全てが私を乱す　なんで　どうして
たくさんたくさん増えていくけど
この子の優しさが眩しすぎて
ありがとうございます
精一杯　最後に小声で
目一杯　この子の心に触れてみたい
心一杯　どうしてこんなにも

どうしようもなく　溢れそうな心に手こずりながら　キャンパスを歩いた
次の部屋にたどり着いた時　気付けば心は空だった

こぼした欠片
銀杏と一緒に踏み潰されて
みんなに避けられ　めり込んでいた
集中した目は　絞った焦点は固まって
世界にたった　二つきり
考える間も無く　吸い込まれた

## 魚の飛ぶ時

上澄みを流れる先生の声
　私たちはまだ　クジラの泣くのを知らない
うんざりするような　薄暗い空
　私たちはまだ　天に昇る雨を知らない
沢山の人に囲まれたって
波に飲まれて何も分からなくなったって
　私たちはまだ　朝のむくみを知らない
私たちはもう　色彩の終わりを知っている

誰だ　私が呼ぶのを遮るのは
　私だ　あなたが泣くのを助けるのは
誰だ　肉に刺さるよりも痛いあの刺激

　私が　誰よりも自由になりたい
例えばあの朝だって
　そう　薄く消えかかる
その　少し欠けた月のような陽だまりだって
そうだった　私は

いつだって変わらない

そうだった　私は
いつまでも　ここに

## 歩道黙祷

どこにでもある住宅街だが
ここでは蝉がまだ　うるさく鳴いて
夏が去ることに　ようやく気が付いたそれは
一本に一匹　激しく鳴いて
分かったよ　分かったって
もう分かったから
ねえ分かってよ
私の鼓動を速めたのは

暑さか　焦りか　それとも罪悪感か

蝉を轢いてしまった
この前　これで轢いてしまったの
数年前　急に自転車を止めた彼女は　そう言って
歩道に手を合わせた
真夏の昼間　住宅街は静かで　繊細な木漏れ日のみが降り注いだ
真っ直ぐ　どこまでも素直に
彼女と私の面影は　私の前を駆けて行った

周りを見渡せば　道端
隙無く求める虫に囲まれて　蝉が転がっている
逃れようともがきながら　身体を失いながら
何匹も　何匹も
ここにも　あそこにも

福井県

## みかん

### 人類へのラブレター

弱ったときに人の弱い所が出る
だから病んでるときは、強化裏プログラムを受けているってだけ
愚痴って本来恥ずかしいことよね
だけど辛いと言っちゃう
けれど吐き出して脳内整頓するためとか、建設的に使わないと毒にしかならないのもわかってる
自分のいたらなさやその物事を引き寄せた未熟さをはき違えてしまうときもある
聞いてるのも億劫だよね
聞いてる身にもなってくれ、だよ
花が凍る
溶けたときは元気
だけど、ほんとは花じゃない
私は人間で、
人間だからしかたないってがははって笑いたい

優しい人になりたいけど、
辛く責め立てられ続けたら冷たい心も生まれるよ
冷たいままでいい
冷たい心を、
人間らしいってがははって笑ってあげる
あなたの気持ちは、人間らしいって認めてあげる
大好きだよ

## ロマンチックに寝そべって

まだ咲かない桜の枝に塩コショウ、
揚げてサクラを食べましょう
枝振りがよい桜の
水分はさぞ旨かろう
みずみずしい
空中にビニールシート
ケロケロケロッピーの柄の
そこでロマンチックに寝そべろう
そこから階段を登り、
お釈迦様の町にいこう
人間なんかが何故来たと、
頭ごなしに怒られにゆこうぞ
春の妄想は度を越していく
度を越して、
花になり
虫を食べる
そぉれ

## けつべったにガムつけて

祖母は
お尻のことを
けつべったと言う
あぁ無常
ふわふわしたけつべったにガムつけて歩いて
ヒールにけつべったにガム
つま楊枝で掘り返す
けつべった
けつべった
けつべったー

祖母は施設にいてこないだ私をわからなくて
おばあちゃんはまんまるのお顔
お月さまみたい
大好きだよ

## 旅

柔らかくオーラを
体はゆるめて…
つぎはぎだらけじゃない
一枚のまっさらな布
巻き付けて荒野に出よう
言いかけたまあるい言葉は体から出ず、
空気中の、水分になった
一旦線を引こう
ぼろぼろの棒を使って
ここから出たらわたしの旅だ
これからもよろしくあの木漏れ日
また会えるかな面白い人
風ががさがさ轟くなか
私へメッセージが降りる

今送り主とわたしと鳥しか聞いていない
魔法の絨毯が足もとすくって私を座らせる
今から空に祈ります
色々な意見を発信したあと
わたしの体は蒸発して
水になってどこかへきえた
そんな幻想を見ながら私は歩く
歩きながら体に沢山細かい穴が開き、
風が押し寄せて
ため息みたいに私を通る
自然のなかにいるとき
私一人のとき
送り主は私に素敵な手紙を宛てる
涙が出そうになる
銀色の混じった黄金の光を纏ってる
地球の神さま

## あなた

あなたはまるで雪のようだ
ひんやりした気にしない力持ってる

あなたはナンテンの赤い実についた砂みたい
じゃりじゃりして、うまく飲み込めない
あなたは丘にある、長い滑り台のカーブみたい
とても上手に生きてるようにみえるから
あなたははっさくの皮のしぶきみたい
仲間を護る強い心を持ってる
あなたは先の折れた爪楊枝の先みたい
お酒に弱いのね
あなたは飴をつけるまえのりんご飴みたい
何か考えてる
あなたはペガサスをペットで持っているみたい
きっとほんとうのあなたは私の知らない柔らか
さや謎を持ってるよね
あなたが泣いているところ、想像できない
私とあなたは浅い関係
だけどあなたが気になるの
なぜかわからないけど
気になるの

# 岐阜県

## 後藤　順

綿毛

落ち葉が雪のように舞い散る
村の命を守る水源地
日銭の母を捜そうと
幼い妹が惰眠した私を見放した
どれ程の歩みが
死への扉を開いたのだろうか

火葬場で盗みとった
小指ほどの妹の骨が
私のズボンのポケットのなかで
誰にも知られない青白い炎が
　にいちゃん、こわいよ
呼ぶ声に脂汗が流れる

どれだけ私は身を縮ませ
残った命を妹に捧げてもあの世の
時は嘲笑う
過ぎ去った悔恨など
なにほどの愛があるというのか

幾度も妹を呼ぶ老いたものよ
父を弔い母を弔い
いつか私が弔われるのを
幼いままの妹が私を幼くし
　にいちゃん、かくれんぼしようね
幾層にも積もった枯葉から
私は深い夢の住民になる

妹が沈んだあの水源地が
街の公園へとカタチへと変った
この悲しみを誰に伝えようか
地面がヒトの償いで作られていようとも
小さな瞳の妹が見上げた空に
真っ赤に滲んだ夕陽が闇を呼んだのだ
　にいちゃん、まだまだだよ
見えない妹が鬼の私に声をかけてくる
頭髪がなくなり皺が体をおおった
私を小さく笑うだろう
風に舞うタンポポの綿毛を追った
時はやさしい心を伝えてくれる

## 白い糸

夏祭りの露天商から買った
風船を青空に浮かべての帰り道
“絶対に放したらあかんよ”
しっかり握るか弱い手に
滲む汗が白い糸に滲みるのを
親の僕は知らない

病んだ復員兵のオジが
幼い僕を肩車して連れ出した
人里離れた山間の祖母の家
蚕棚から吐き出された糸が
顔や首に纏わりつくのを
嘲笑するオジに怯えた

切り返しの細い途をだらだら進む
わななく四十雀が土手に
オジが破れた藁帽子で捕まる

盛んに産毛が風に舞い
足や羽が折れるのをかまわず
僕らは得意げに帰った

オジは鳥の片足に白い糸を結んだ
その先を僕に渡し
凧のように天井にあがっては
石のように畳に落ちる
その哀れさを母も一緒に笑った
苦しまぎれの大はしゃぎ

裁縫箱から白い糸を盗み
チョウやトンボの足に結ぶ
少年の僕はオジの仮面をつける
“自由に飛んでゆけ”
五十過ぎて戦闘帽を脱ぎ捨てた
オジの足に残った白い糸

廃屋になった祖母の家のどこか
野生の緑蚕が吐く音が
一本の糸に織り込まれる

消えた四十雀が鳴く森へ
おとなの僕は今も捜し続ける

棺桶のなかに残る
母やオジの足に刻まれた
結び跡
命のために翻弄され
白い糸に繋がれる
ヒトもいつか地面に墜ちる

ふいに幼子が糸を放した
風船の臍の緒が空へ
行先を告げずに逃げていく
僕は足にある白い糸を隠し
“ごめんなさい　ごめんなさい”
震える小さな体を強く抱きしめる

## 紵台の息遣い

日溜まりを母の部屋と呼ぶ
板張りの廊下で
野薔薇を刈るように

毀れゆく母を抱きしめる
その匂いが私を眠くした

子を糧として
いつも縫い物をしていた母
寄り添う紡台は祖母の形見
縫い終わるたびに
ひとり背影に話しかける
　これでいいやね
母は少女になってゆく

初めて縫いあがった着物をね
母さんは黙って
　背縫いの糸をハサミで切ったんよ
　涙ながらに縫い直したわ
　母さんは鬼やった

紡台の針山が固くなった
中に納まっていた白髪まじりの
埃にまみれた祖母の毛髪
寿命を終えた折れた針

シャンプー液に浸し
櫛で梳きながら洗う
ていねいにドライヤーをあて
椿油をすりこむ母の瞳が濡れる
　母さんの匂いがするわ

かすかに「大正八年吉日」と
墨跡がある祖母の父が桑の木で作った
黒光りする紡台は今では母の形見
ものは少しずつ姿を消し
記憶もいっしょに持ち去られるが
さみしくなれば母は針山を洗う

歳月は沈黙の暦だが
この家のあり様を見守ってきた
紡台に残るささやかな息遣い
記憶を衣装ほどに飾らなくても
ひと針ひと針縫いあわせてきた
人の繋がりを私は断ちきれない

# 静岡県

## 神谷美幸

### 世紀の母へ

億年経った母は
この時代(とき)に何を感じる？

太陽の恵が染み込んだ地には
憎しみを与え
愛を生みだした証に
囁き続ける

口から溢れる情は
貴方から注がれ心に閉まい
秘密兵器が守られた

荒波に揉まれ島に
辿り着いた野人は
己の心から感じたまま
言に発する

お父さん　お母さん
こんなに幸せが訪れるって

私の悪い所は何でしょう
こんなに幸せを分けて
頂いてもいいのでしょうか？

お義父さんお義母さん
こんなに素敵な
家族の一員席を頂いても
いいのでしょうか？

こんなに自信のない
人間なのに
こんなに醜い私なのに
幸せが訪れても
いいのでしょうか？

島国が踊り迎えて
笛を吹き

太鼓を鳴らし炎が漲る
いらっしゃい
どうぞ　どうぞ
おいでらっしゃい

これこそチャンス
これこそ感謝
眼で感じた瞬間(とき)に
全てが永遠へ蘇る

愛知県

## 田代真耶子

### 空っぽの膨らみ

腹の膨らみに男の子が耳をあてた
けど、まだドクドクするよ
男の子はそういって
わたしの瞳の中に答えを見つけようとした
これは空っぽの膨らみなんだ
ドクドクとしているのはお母さんの心臓
いった先から目の前にすがりつく物がなくなっていく
悲しいね
男の子は何も包まずにそういったから

この人には心を偽るフリができないのだ、と思
うのと同時に
悲しんでいないフリなんてしなくていいのだ、
と心の奥の方でホッとした

わたしは空っぽの膨らみを両手で包み込んでみ
た
空っぽの膨らみは温かかった
空っぽだけど温かかった
空っぽなのに温かかった

# 三重県

## 藤川六十

### 廃屋

久しぶりに帰った故郷の町。
家は、どうなっているだろう。
不安な思いを抱いて、ゆっくり歩く。
辺りをきょろきょろ見ながら、歩く。
通りの家々は、何も変わっていない。
とうとう着いてしまった。
ここまで来て、目を背けているわけにはいかない。
向かいの駐車場の前に立って、恐る恐る我が家を見た。
老いてぼろぼろになった家が、素知らぬ顔で私を見下ろしている。
かつて亡き父母が住んでいた家。
二人の死後、随分長い間、空き家のままで、ほったらかしにされた家。
そうしたのは、家と同様に老いた私。
人の住まない家は劣化が早い、というのは本当

だ。
色褪せた壁。灰色に汚れた窓ガラス。外れた雨樋。
ひどく腐食した、ベランダの手すり・鉄製の円柱。
駐車場の出入口の柵は、バラバラになる寸前だ。
家が、ひそかに泣いている。
私も、泣きたくなる。
草がいっぱい生い茂る、玄関までの通路。踏み石は、どこだ？
ふと、人の目が気になった。
辺りに、人はいないか。
こそ泥のように、見回す。
昔親しかった人でも、会いたくなかった。
幸い、町内の端から端まで、車一台、人一人、いない。
みんな死んだような街。
昔は、こんなにさびしい通りではなかった。
家の裏側に回る。
予想した通りの、荒れ放題。何もしなかったのだから、当然のこと。
だけど、そのように開き直ってはいけないぞ。
近所の人々の迷惑を考えろ。
庭の草木は、勝手気ままに、人の背の高さ以上に伸びている。恐ろしいくらいの勢いだ。とても私一人の手には負えない。
家を見ると、ひび割れが広がった壁。物干しの雨戸が倒れている。雨樋や雪止めの金具が、下に落ちている。ただ、心配していたガラス窓は、割れていない。
重い心で、表に戻った。
通路の湿った草をかき分け、水道の堅い元栓を開けた。
しつこくまつわり付く蜘蛛の巣を両手で払いのけ、玄関に立つ。
汚れたドアに、鍵を差し込む。
郵便受けの様々な書類が、あふれ出ている。長く雨露にさらされて、縮んで変色し、みじめったらしい。
家の中に入る。

壁に手を伸ばして、電気を点ける。
「お帰り」
父母の声。
ありえない、私の心の中の、幻の声。嬉しく有り難い声。
「お帰り」
昔は、そのやさしい声を聞いて、長旅の疲れが一遍にとれたものだ。
「お帰り」
父母がいなくなって、待ってくれている人がいなくなって、聞けなくなったこの言葉。
「ただいま」
わざと大きな声を出す。
「ただいま」
この家にいるに違いない、父母の魂に対して。
六畳の居間に入り、蛍光灯のひもを引く。
テレビもラジオもない。床の間の掛け軸もない。あるのは、仏壇と、壁に掛けられた父母の大きな肖像画くらいだ。
この絵は、父が勤めていた会社の同僚が描いてくれたもの。
仏壇に手を合わせ、「帰ったよ」とつぶやいた。
ふと、感じるものがあって、肖像画を見ると、笑って、何か言ったような気がした。
私も、小さく笑い返す。
明治の時からの、仏壇の扉を開いた。
下手なお経をあげる。
《帰命無量寿如来　南無不可思議光
法蔵菩薩因位時　在世自在王仏所
覩見諸仏浄土因　国土人天之善悪…》
途中でやめた。
深い静寂が戻る。
何もかも、むなしい。
無の深淵にいるようだ。
コンビニの弁当を開け、酒を飲み始めた。
さびしさが、少しは紛れる。
しばらくして、何か小さな音が聞こえた。
耳を澄ます。
やはり、何か聞こえる。
色々なものが混ざっている。

それぞれの音が、次第に大きくなった。
お寺の鐘の音。読経の声。
駅の方から、今は走っていない、蒸気機関車の汽笛。貨車の連結音。
この町の祭りの山車、でか山・ちんこ山の、太鼓・鉦・掛け声…。
昔が今に入り込んでいる。
その中に、懐かしい死者達の声も混ざっているようだ。
「もう一度、生きたい」、父の声。
「もう一度、皆で暮らしたい」、母の声。
　それが出来れば…。私もそう願う。
父母を懐かしみながら、思いをめぐらせる。
死んだ人達に会いたい。
懐かしい過去に戻りたい。
時間を超え、過去と現在をつなげたい。
死者は、生きることが出来ないという障害を持つ障害者なのだ。
悼むとは、そんな人達に寄り添い、共に生きようとする心情だ。

ここは、そんな死者達や過去のたまり場。過去と現在が交信し、生と死がすれ違う交差点。
様々な音が、時間の壁に反響する。
その壁の亀裂からにじみ出てくるものがある。
昔の残像…。
過去と現在が絡み合う。
廃墟にたたずんで心打たれるのは、ピカピカの新居にはないものがあるからだろう。それは、過去・思い出…。
家には、住んでいた人の心がこもっている。
住むとは、外での緊張から心をほどくこと。固体から流動体に変わるようなこと。
ほどけた心が、ゆるい液体のように、家にしみ入る。
古い家には、しみ込んだたくさんの心がある。
どろりとした昔がある。その中に、懐かしい死者達が潜んでいる。
あの世は、未来でも、現在でもなく、過去にある。過去が積み重なった古い家にある。
多分、いや間違いなく、この家の中に、先祖の

死者達がいる。そして、私の中に、その死者達がいる。だから、この家は私。
古い家こそ、死者達の居場所。かつ、私の居場所。高齢の私にふさわしい場所。
そこでは、時間が止まる。逆転する。あるいは巻き戻されている。意識の外で、いつのまにやら…。
突然、床の間の隅の電話が鳴った。
見捨てられた、古いダイヤル式の黒電話。
受話器を取り上げた。
ただ、無言…。
この電話は、線が切られている筈だが…。
背中の方から、声が聞こえた。
「あんよ、あんよ、あんよ」
歌うような、間延びした、老女の声。
私が高校生の時に死んだ祖母の声だ。
この家には、ずっと子が産まれず、私が初めての赤ん坊であった。喜んだ祖母は、私を思うがままに溺愛した。
あの戦争の最中、私達は田舎のお寺へ疎開した。
終戦になって、我が家へ戻った時、私は「あんよ、あんよ、あんよ」と言いながら、喜んで、家の中を駆け回ったそうである。
「むとかず」
私の名を呼んだ人の方に、顔を向ける。
祖母が、両手を広げて、笑っていた。
仏壇の中に飾られた、かなり若い頃の、数少ない写真の姿であった。
私は、赤ん坊の頃に戻り、誰かに抱かれている。暖かい。その人の笑い声も聞こえる。父が祖母の横にいるから、母なのだろう。
「あんよ、あんよ、あんよ」
祖母のやさしい言葉と共に、歩き出す。
敷居の向こうの部屋は、一段と暗い。道路に面した、二代前の家の「しとみ（蔀）」のある部屋だ。果てしない闇が、奥へ深まる。
そこに、何人かの黒い人影がある。これも、死者達なのかもしれない。隣の部屋は、死の世界なのかもしれない。
「あんよ、あんよ、あんよ」

黒い人影が、私に呼び掛ける。
「転ばないように、気を付けて」
「ゆっくり、こちらへおいで」
私は、素直にその言葉に従って、危なっかしい足どりで、暗い部屋の奥へ向かう。

京都府

## 江口久路

### 種（syu）

あたしはおとうさんのもの
あたしはおとうさんのものに
あたしはおとうさんのものになるため
あたし自身を切りきざむ
あたしは死んでおとうさんだけのものになる
　　おとうさんけだもの
おとうさんの鼻があたしの髪をにおう
おとうさんの指があたしの唇をなでる
おとうさんの口があたしの胸をすう
おとうさんの舌があたしの尻をなめる
あたしの中におとうさんが入ってくる
あたしをひろげておとうさんが入ってくる
あたしの中でおとうさんがはじける
あたしの中におとうさんがあふれる
あたしの修羅が朱にそまる
　　受粉の呪文
syura syu syu syu

syura syu syu syu

あたしはおとうさんの種の宿主
あたしはおとうさんの血の縮図
あたしはおとうさんの醜悪な情婦
あたしはおとうさんの執着物
あたしはおとうさんの充塞物
あたしはおとうさんの従属物
あたしはおとうさんに愛された腐ったたね
あたしはおとうさんに殺された腐ったたね
おとうさんの腐ったたねを宿した糞ったれ
　　腐ったたね腐ったね
　　腐ったたね腐ったね

syura syu syu syu

syura syu syu syu

あしたあたしは立ち上がる
あたしはあたしの種を断ち切る
あたしは死の祝祭を主宰する司祭
あたしはおとうさんの死を蹂躙する支配者

あたしは
呪縛と収奪の象徴を銃眼から照射する
シュールな狙撃手
朱にそまる手法
あいつを殺す　あたしを殺す
殺　す　！　　殺　す　！
あしたあたしは死ぬ
あたしは死んで　もう誰のものにもならない
もう誰のものにも
ならない
あしたあたしはあたしだけのものになる
　　あたしけだもの？
あたしけだもの？
でもあたしだけだもの
でももう
あたしだけだもの

あたしはあたしの宿命を祝福する
あたしはあたしの守護神になる
あたしはあたしを愛しつづける

あたしを
廃しつづける
あたしはあたしの背理を培養し排卵する
あたしはあたしの敗北に拝礼する
あたしはついに灰になる
あたしはついに
罪深き灰になる

そしてあたしは小さな胚になる
あたしは
胚になる
意味の膿に倦んだあたしは
あたらしい海に産み出される
あたしはあたらしい種(syu)になる
あたらしい
種

ここであたしは

もういちど

あなたと
出会う
あたしという
あなたに
もういちど
はじめて
出会う

## 異人の町

気味の悪い絆が僕を縛りつけていた
喘ぐように息をし
その場を逃れようとする僕を
ぐるぐる首を絞め上げ窒息させる
僕のこころを
不自由な杭にがんじがらめにし動けなくする

たくさんの手
視線
ねじれてゆくそれらは
人のかたちをしている
空疎なにんげんの
魂の群れ
いたましい出来事で満ちあふれた大地は
いまも僕のからだに取り付いて揺れ続ける

早朝の雑踏めがけ
突然
屋上から大量の鉄パイプの僕が落下する
激音が反響し
その反響が
乱叫し
頭蓋が責め込まれ
視神経が圧迫せられ
歪んだ視界の中で
のた打ち倒れた僕の体を
踏みつけ
踏みつけ
踏みつけて
ましろき貌で
立ち去って行くにんげんたち

夜になれば
誰もが気軽に声をかけ
殺しましょうか
殺してあげましょうか
にこやかに僕に手を差しのべ
赤い眼をした終バスが
轟音たてて疾走し
明滅する街灯がとらえた不在の椅子に
生き場を失った亡霊のようなにんげんたちが
折り重なるように座っている
無人の町

ひとり
僕だけが死んでいる
異人の町

# 成瀬真綾

## 段差

今のわたしたちはまるで
言葉を奪われた籠の中の鳥みたい
さっきまであんなに笑い合っていたのに

どうしてだろう

しん、とはりつめた空気と
冷えた夜景が窓を曇らせる

あなたの正面のわたし
わたしの正面のあなた

ながいながい青い夜

時の止まった部屋でふたり
ひとつの月を眺めて

## 約束

金魚よ　金魚
今日もまた行き場のない水をおよいで
金魚よ　金魚
ガラスの向こうに想いをはせる
金魚よ　金魚
せっかくの赤い浴衣は

針がみっつも進んだ
雨の帰り道に一人濡れた

## 瞳

あの子の目は本当に綺麗で
青い煌めきに吸い込まれそうだった

心に宝石を宿す彼女は
風を纏って走り出す

砂の城を飛びこえて
たとえ転んでも決してめげない

そんな子にそだってくれますように

## 夢の灯り

私の中に浮かぶ
夢の灯り
ふいに灯るその火は
うずくまった私の心を
やさしく照らしてくれる

例えみんなが寝静まっても
時計の針がいくつ進んでも
ずっと照らしていてくれよ 光

## わたしのいえ

わたしのいえ 向かいのコロッケ屋さん
リンゴ入りのポテトサラダ
わたしのいえ 近所のビデオ屋さん
大きならせん階段 オレンジの電球
わたしのいえ 黄色いメガネ屋さんの看板

そこで三時に待ち合わせしよう
わたしのいえ 毎日通った駄菓子屋さん
カードの当たりくじ 好きだったねりあめ
わたしのいえ みんなが集まる公園
ブランコくぐっておにごっこ 隣はあの子のお家
わたしのいえ 夕暮れの図書館
からすはどうして鳴くんだろうね

わたしのいえ わたしの町

わたしのいえ 石のベンチ
家族で天の川を眺めた夜
わたしのいえ 優しいおっちゃんの散髪屋
くるくる回る あかしろあお
わたしのいえ 後片づけしたグラウンド
さびしく響く 校内放送
わたしのいえ 青いドアの家
開くといつでも「おかえり」が溢れた
わたしのいえ とってもかわいいネコがいた

わたしのいえ 私の街

今はもう変わってしまったけれど
今はもう何も無いけれど
心の中にずっとあるよ
ずっと在り続けるんだよ

わたしのいえ わたしのまち

いつかまた、こんなまちに出逢いたい

## 愚行

私の願いとあなたの想いは違うものでしょう

いつか、そう口走った
歳をとってようやく気がついた
時間の重みと己の軽薄さ
無駄遣いして何枚も破いたノートは
そのほとんどが空白だった

残り数ページ 筆が走るはずもなく
端の方からゆっくり燃え散るのだ
あの頃分からなかった 切なる母の想い

どうか、どうか、どうか、

健康や幸せは失われてからその存在を示し
愛や恩は忘れた頃にふと思い出す

無礼者、無礼者、無礼者

「もう少し凛々しく生きろ」
きっと母はそう言うだろうか

## HaNa

### 白虹(びゃっこう)の下で

人間らしい感覚は無で見つかるものだ。
心と体は一定の年齢を過ぎると途端に
弱気になり始める。

誰しもに平均的に訪れ、
そこから人は老いに諦めはじめる人生と
老いなど気にせず心伸ばす人生に
枝分かれしてゆく。

ついに、そんな時期が私にも訪れた。

在り来たりと言われるような日々の
少しずつ老いることを受け入れ
若くありたいという欲も
過度にならないように
細やかく捨てながら
生きることは、

ただ、窓ガラスから見えた
毎日変わる鮮やかな景色であっても
記憶に残さず生きるようなものと同じだった。

仕事帰り、一日一善、そんなことすらも忘れき
って、
疲れた体は誰のことも視界に入れずに
家路終わりまで座りたいと思うほどだった。

疲れた目を閉じて、何もない。
無だ。
見たいものも特別これといって感じていなかっ
たから。

理由を歳を重ねただけのせいにしては
自分に申し訳ない。
だから、過去のせいだと思った。
こんなに疲れる心は、
ろくな過去を過ぎてこなかった
せいなのかもしれないと。

からだ揺られながら、目を閉じると
心地よい無を繰り返した。
そんな機会があれば何度も何度も。

繰り返してゆくと次第に
暗闇だった瞳の奥のむこう側に
見えたものがあった。

私の姿だった。
何故か子供に戻った私が背を向けて
しくしくと泣いていた。
何故泣いていたのか、最初はわからずにいた。

真っ暗な無が私に見せたものはそれだけではなく、これはほんの氷山の一角に過ぎなかった。

その無が、私にとって
目覚める一歩になりはじめていることを
その後、徐々に気づき始めた。

人は何かをきっかけに目覚める。
それは子供時代に感じた空しい過去かもしれない。
悲惨な事件かもしれない。
儚い別れかもしれない。

もしかしたら美しい愛かもしれない。

その日からたくさんの涙が流れた。
過去を思い出す度、激しい怒りも苦しさも溢れた。

涙は心のバケツに一杯だったのだろう。
掬っても、掬っても
流れる涙に、体が堪えきれず、
どこでもいいから逃げたくなった。

人知れず、布団の中で枕を濡らして
そのまま寝入る日々が続いた。
そして、ある時、枕が濡れなくなった。

胸の奥も次第に温かくなった。
胸が温かくなると
溜め込んでいた過去の辛さを
忘れないでいたことを誇りに思った。
忘れずにいて良かったと思った。
無が古い過去の形を変えることを
教えてくれたのだと知った。
心が捲(めく)れ、私の心は新たな未来の景色を
探し始めた。
誰しもが見ている同じ空を
普通の空と思うか、私だけの空と思うか
変化させる自由は、生まれる前から与えられている。
人はそんな自由ですら手放し
生きている間に、何者かに操縦され
心には自分らしくないものまで
溜め込んでしまう。
無を繰り返す内に、雨上りの夜空に
私の空には虹も見えるようになった。
白虹とも言うらしい。
そんな空の下で私は想った。
愛する人ですら、いないと思えばいないと思え、
いると思えば必ず現れるのだと。
無は今も多くを私に与えてくれる。
木々の美しさ、言葉のやわらかさ、
命の大切さ、
老いがあるから
こんな秘技が人には出来るのだと
人の命の凄さを知った。

ありがとうを、本当のありがとうと
捉えられる心、
愛したい人に愛していると言える
素直な心も誰でもにある。

白虹の下で

無になって、そして、私は何度も想う。

この地球の、
人という姿に生まれたことは

無の心がちゃんとわかってくれていると。

これから見える景色を
楽しみに想う。

# 大阪府

## 井上　稔

**阿婆擦れの夜は傷ついた男の心を踏みにじる**

悲しいからと　それだけで訪れるはずもないス
トリップ
場末の路地に片隅にあるコンクリート打ちっぱ
なしの建物
あちこちに女たちの　情念が宿りまた狂う

昼間はただの古ぼけた景色
正午を過ぎたあたりからまだ昨夜の気怠い雰囲
気を纏った舞姫が
常連の客しかいない小屋で踊る

さやさやとした衣擦れの音も
必要以上に耳に響く音楽がかき消していく
襦袢を床に落とした見返り美人　まだ二十歳過
ぎだろうか

人の心移ろいやすく　昨日まで舞台にいた娘の
顔は忘れてしまった

この娘も次来演する頃には忘れているだろう
そんな毎日が過ぎていく

男たちは螺旋階段をのぼり
壁にある蛍光カラーのポスターを眺め娘たちの
肢体を想像する

重たい扉を開けると　まず音楽の喧噪に襲われ
次に舞姫の肢体に目を移す
娘のカラダは細く　あばらの骨が透けて見える
近頃はこういうタイプがモテるのだと周囲の若
者の表情を見て独りごちる

ゆらゆらとした舞姫の視線にあわせ
音楽も最高潮へとアップテンポに変わる
ターンテーブルで客に微笑む舞姫の笑窪　まだ
幼さが残る

人の心の傷は癒えがたく　舞姫の裸に集中でき
ない自分がもどかしい

立ち止まってうろたえる様は
まだまだ半人前なのかも知れない

女の酒をつくる手つきがぎこちない
さっき見ていた舞姫より十は齢を重ねているは
ずだが
この娘まだ見習いなんでごめんなさいねと　チ
ーママが私の心を見透かし謝る

今夜は何処へ入っても中途半端
我を忘れて楽しむこともできず酔うこともでき
そうもない
せめて時間を忘れることが今の自分には必要だ

殺伐とした世間の噂も
無味乾燥した週刊誌の記事も
十日もすれば忘れ去られる　新たなネタにとっ
て替わられ

人の心移ろいやすく　去年クリスマスを過ごし

た女の顔も忘れてしまった
やけにきつい柑橘系の香りだけが
記憶のなかに残っている

## 塚本正治

### 源田湯

鶴橋の町で五十年　湯を炊いてきた
百草湯の源田のおやじが　今年亡くなった
あれは夏の午後
「湯を炊く」と言い残して赤十字病院で息を引きとった
おやじは享年七十七歳
銭湯が寂れる中　おやじはいい時に死んだのかも知れない

おやじの炊く湯は　半端なく熱かった
一度湯に入ると身動きできなかった
身体がジンジンにしびれ　額からは汗が流れ落ちた
この湯が鬱の僕には好みだった
湯から出て　溢れ流れる全身の汗を感じていると
心の奥にたまった鉛のような不安が消えていった
それはどんな精神安定剤や抗うつ剤より効いた

「いい湯だったか」
おやじは風呂上り　いつも僕に語りかけた
その語調はまるで扇風機の風のように
僕の身体と精神を扇いでくれた
コーヒー牛乳を飲み干し
銭湯から出る時
「ありがとう」と番台からのおやじの声は
「明日も生きろよ」と僕の心に快く響いた

兵庫県

## 板倉　萌

### ぐちゃぐちゃ

ぐちゃぐちゃに握りつぶしたい
どくんどくんと鳴り続ける
心そのものを

「大切にしてね」
皆が口を揃えて言うそのセリフ
私には
大切にすべきそのものが
大きすぎて手に余る

だから
ぐちゃぐちゃにつぶしたい
ぐさぐさと刺したい

他人に対しては
こんなこと思わない
自分にだけ刃(やいば)を向けたい

夜見る夢も　のしかかる
起きていても寝ていても
同じ名前だから
だけど本当は超越したい
美しい花が静かに風に揺れるように
やさしく己のこころを
抱きしめられたなら
ぐちゃぐちゃになった紙の
シワをそっと掌で伸ばしてあげて
「がんばったね」と
ささやいてあげよう

## 目に見えないもの

妖精のかすかな羽音だけが聴こえる
鏡にはスカイブルーの一色
透明な気持ちに
さらさらと水が流れて
森のほとりに立っている
気がしていたけれど
本当はここはマグマ溜まり
だったと知る
長い黒髪から零れる
水滴を掌で
ぽたぽたと
受け止めて
どんな強い熱風にも
飛ばされない
と心に誓う
わたしは
目に見えないものが
すきだ

## シャンプーとリンス

社会の裏側を見たことによって
汚れてしまった心を
シャンプーできれいに
洗ってあげよう

人間との摩擦によって
冷え切った心を
人肌のお湯で
温めてあげよう

人に優しくし過ぎて
パサパサに乾いてしまった心を
リンスで潤してあげよう

シャンプーして
リンスして
まっさらに洗われた私は

透き通るほど透明で
妖精の羽根さえ生えていた

これで世界をふわりふわりと
飛べるから
もう恐れなくていいでしょう

シャンプーとリンスするだけで
変わることができると
知ったから

## ぶざまな生きざま

感触をなくすと
生きられない
涙を流したいから
人に寄り添う
包まれたいから
心を閉ざす
笑顔が楽だから
愛想を振りまく
一人でいられないから
人を愛憎する

逃げたいから
道を探し回る

だけど生きていたい

## 教室から手をふるわが子

大切なものを探すのに
いつだって袋小路の中だった
行き詰まってもがいて砂を噛んだ
抱きしめてもするりと抜けられた
どうしても空回りして
結局一人夜を堪えた

大切な人をやっと見つけ
幸せを掴んだと思ったら
それは試練の始まりだった

たった一人で母になり
いたいけな子を抱えて
海に立ち尽くした

世界はいつも色を変えるから
どう動いたらいいのかさえ
分からなくなる

それでも泣いて怒って笑いながら
共に歳を重ねた

教室から手をふってくれる
その顔がまばゆ過ぎて
視界がぼやけた

私には
もったいないくらいだね

# 村松　瞳

## 朝焼け

目覚めた瞬間に僕の輪郭は形作られて
この身体に新しい朝が染み渡るまで
世界は決して僕に触れられない

この時間を永遠と呼べばいい
これ以上何も知らなくていい
これ以上弱さを知りたくないんだ

夜の延長を何となく転がり始めた始発は
次第に濃くなる朝焼けを
切り裂くほどに
スピードを増して
それは時間が今を編み上げる速さを
通り越してしまうから
僕は朝が美しいと思った

人生の意味を頻りに知りたがる季節
近いようで遠い心
冷たい空気に蔓延る寂寞
引き攣る頬
濁っていく皮膚感覚が
偽悪的な僕を囃し立てるから
僕は他人の中にすら
居場所を探してしまう
それでも依然
瞳の中で燃え続ける
朝焼け

心臓の鼓動が追いつく前に
僕は消えてしまいたい
腐りきった都会の空気を
この肺でちゃんと燃やしたい
全て台無しにしてしまうような僕の本能も
両手の指先まで感覚を尖らせて
全て頬張りたい

幽霊の様に透き通る意識が
真っ赤な朝日で全部燃えて
それが生きている感覚だとすれば
毎日訳もわからず
朝を疾走する
空っぽな僕もまた
この朝焼けの一部

## 忘却

昼の空は やる気がないのか
雲一つ拵えず
安いCGみたいな空が
薄い天球に被せてある
やけに煮詰まった青で
不透明
気持ち悪い
騙されているみたいだ

僕が足元ばかり見て歩く間に
誰かがきっとすり替えたのだ

走り回る子供の声が
誰も追いつけないスピードで
肥大するというのに
この空の厚さを通り抜けられないのは
不幸というより災難だ
ざまあみろ

返してくれよ
知らぬ間に移り変わる
美しい空
美しい空を忘れた
馬鹿みたいな僕

## 最期の少女

幼い私が夜と呼んでいた時間の延長に
まだ知り得ない空間を
大人は隠していた
ずるい

冬になりかけの空気がアルコールみたいに
私の唇を痺れさせた
無機質な蛍光灯の光が
私の肩に降り積もると
せっかく垣間見えた私の断片が
平凡な哀しみに一般化されそうで
また瞳の奥に隠れてしまう

何を恐れているの？

獅子座の流星群が
本当に空を駆け巡っているなら
私の血液の摩擦と共鳴して
早くひび割れてもらいたい
限りなく透明な夜の空気と
あまりにも密な恋人たちの吐息を
この身体の中で均すのはやめてくれないか

私の瞳がまだ透き通っているうちに
この夜の感覚を
ちゃんと指先に留めておこうと誓う

十九歳の夜

## 旅ダルマ

### 感情線

辞令が出た夜　一睡もかなわず
生きるためには働かなくては
居座ることが最良の選択
だが自己肯定感はズタズタに

朝が来て　暗澹たるまま自転車こぎ出し
見上げた空は昨日と変わらず立派な秋晴れ
心の乱れが異様に引き立つ

テレビで誰かが言っていた
今、命を燃やして生きていますか

胸が熱くなるのを感じながらも
この仕事以外に何ができるか分からない

何かに夢中になりたい
でもそれが何かは分からない

それでも生きるために　働かなくては
何も定まらないままぐるぐる回る感情線

こんなに苦しまなくても　嫌ならやめたらいい
んだって
俯瞰し　自分に言ってみても

また明日にはいつもと変わらぬ日常へ
分かっているけど変われない
僕の世界は広くないから

いつまで経ってもぐるぐる回る
いつもと同じ感情線

## 部分と全体

朝日に向かう通勤路
目を細めてみるこの景色

赤いタオルを首にかけ　ぶつぶつ言ってるおじ
いさん

二階から　心配そうに子どもを見送るお母さん
常に立ちこぎ　全力疾走　女子高生

いつもと変わらぬこの景色

全部が変われば気づくだろうけど
一つが欠けても気づけない

僕にとって世界は全部で
世界にとっては僕は一部

僕が消えたら世界は気づくか？

# 奈良県

## 福田智子

### 母へ　（夕暮れて　あなたを想う）

おかあちゃん
気がつくと　日暮れて　空の色が暗くなったよ
町に燈が灯る

幼い頃
年の離れたねえちゃんは　遠い町の学校へ
あなたは　野良仕事
わたし　ひとり
遊び上手だった
背戸を出て　一本道を行くと　そこは谷
あなたがいるの　知ってた
「よう　きたなあ」って笑うんだもの
暮れかかると　おんぶされて帰ったね
山に帰る鳥の鳴き声　夕空に溶けて
あなたの背なか　あったかかった

小学校の修学旅行から帰った日も　夕暮れてた

ね
バス降り場に
手を広げ　頬を染めて
泣き笑いみたいな
あなたの笑顔があった
こどもながらに思ったよ
谷間に咲く花みたい
ひそやかで　たくましくて　きよらかで

わたしが遠くへ嫁いでも
あなたは　ふるさと自身だった
疑いようもない　娘たちが帰る場所だった
ああ　でも　あの頃
あなたの日常が　おそろしく変容するのを
だれが予想したろう
いろんなものが　記憶から　抜け落ち
得意なお味噌汁も　魚の煮つけの作り方も思い
出せず
立ちすくみ　わたしを見上げた
夜中には　畳に　何枚もの着物の波

日暮れには　川べりを　あてどなく歩く息づかい
そこにいる連れ合いの姿を　「いない」と
探し　錯乱し　ぽろぽろ　涙をこぼした
そうして　幼子になってしまうまで
消せないプライドだけが　あなたを苦しめた

おかあちゃん
いま　なにを思っていますか？
おとうちゃんに会えましたか？
安らいで　いますか？
糸を繰って　編み物してますか？

この　あったかい湯気のたつ食卓で
あなたが　なにもかも包んでくれた歳月を
思いながら　わたしも家族を待って生きてるよ

# 尾上　文

## かあさん、ハハハ

鬼の形相で僕の名前をどなる、かあさんに追い
かけられて
いつも僕はトイレに逃げ込んだ
内側から必死でドアノブを引っ張って
「もうしません、もうしません」と何度も叫ん
で
笑顔がかわいいと評判で、姪や甥から慕われた
母をいつも怒らせたその理由は今はもう遠すぎ
て思い出せない
逃げ込んだトイレには『トンボ釣り、今日は、
どこまで行ったやら』と画布の右隅に墨で書い
てある父の描いた絵があって
その絵が好きだった
モンチッチを腕にはさんで、母の膝に乗ったり、
庭のトマトを一緒にもぎ取ったり
母との思い出は、どれも日常のたわいもないこ
とだけど
母との一生はかけがえがなかった
かあさん、ハ、ハ、ハ
今、僕は何をすればいいのかわからないんだよ
どうやっても取り戻せないものを僕は確実に知
ってしまったから。

## 地上の歴史〜母に〜

僕をこの世界に連れてきてくれた
あなたに感謝する
例えば僕は、泥臭い池の草の間に身を隠す
トンボの幼虫のようなものだった
寒い月が北の夜明けに残る
その時刻
あなたは僕のゴムボールの身体に
光をあててくれた
暗闇の中で手足をばたつかせていた僕は
ゼリーの羽を背中に広げ
オギャーと一声泣いたんだ

あなたはこの世の最上の顔で
僕を見て
あなたの血液と
精神と
願いを
僕に流した
あなたは本能のように
僕を抱き
体温で愛情を示した
池のある公園に面した窓から
太陽と
青空を
僕に見せた
僕は豚の子のように
あなたの乳房を探し
ギャアギャア
身体を動かした
そうして、僕はあなたとつながる臍の尾を切られ
この地球で

たったひとりぼっちの形を
ころころ転がしていったんだ

あなたは今、生まれたばかりの我が子を見るように
まるく笑い
目を閉じた
あなたと僕の出会いと別れが
円のように繋がり
僕とあなたがいた
この地上での歴史が終わった

# 岡山県

## 夕凪　旭

### あかね色

慌ただしく過ぎた一日
壁の時計に目をやる
ふと西の窓から見える
外はあかね色

今日の慌ただしさを思い返し
帰り仕度も済ませて
ふと見上げると
空はあかね色

慌ただしく通り過ぎる人たち
目の前の信号が赤に変わる
ふと見渡すと
街はあかね色

混み合う電車の中
目の前のご年配に座席を譲り

ふと通り過ぎる景色に目をやる
世界はあかね色

# 広島県

## リュッツオ

「A Cricket (コオロギ) ー『わたしは美しい (The Beauty, that、s me.)』より」

最初の記憶。それは夜。男は女を殴る。子供が女をかばう。どうかお母さんを殴らないでください、殴るなら僕を殴ってくださいと、生意気な小僧がどこで覚えたのだろう田舎っぺの土人の分際で標準語で懇願する。

部屋には大きな鏡台。

今は築百二十年のこの屋敷の廊下の片隅に埃よけの染め風呂敷を掛けられて鎮座している鏡台。

女は男と死に別れてもこの鏡台を持ち帰った。

男は自分の息子かもしれない子供を殴り、踏みつけにする。

女は難を逃れる。夜に。

この屋敷に来てから悪夢を見るようになったんだ。

棺桶の部屋で。

例えばユダヤ人の娘が父親に縛られてクローゼ

ットに閉じ込められて折檻される。
目が覚めたとき、まさか母がそんな目に……。
この百二十年の間に、そんなことが……？

次の記憶。また夜。
次ではないかもしれない。夜だった事は確かだ。
眼下が真っ暗だったから。
男はベランダから子供を逆さまに吊るす。子供の両足首を夜の黒い手で掴み、落としてやろうかと片方ずつ手を放す。
五十年が経ち、男の子はあの時落とされていたらとてつもない空（ku）の幸福の中にいられたかもしれないと、ノートを見つめる。

でも青い車のあなたと出会ってしまったのだ、今は。

話しを切り上げて医療点数の計算をする精神科医の眼。
こんな話しを聞かされるお前が憐れでならない。

あの時だったのか、男の子が父を怖れ、同時に愛する……ようになるのか？
時間がないんだ。時間がない。話しているヒマはない。

時間がかかったんだ、あなたと出会うまでに、五十年も待っていた。

これも夜だ。座敷に入り込んだコオロギを、必要以上に大きくなってしまった両手でそっと囲って外の夜へと放とうとしたら、手の隙間から飛び逃げてどこかの陰に隠れてしまった。男の子は茫然。
A cricket は自滅を選ぶのか？

いやきっと、男の子のあずかり知らぬところで生きながらえるのだろう、死ぬまで。

世界は常に瓦解を抱え、

その破綻はとてつもなく美しい。
ともかくわたしたちは生き延びてきた。

わたしはなりたかった夢に届かなかった。けれどもあなたと出会ってしまった。
すべての夢が終わり果てたあとにまだ、またもうひとつの夢を描ける？

今夜はおやすみ

## 上田しお莉

### 曙の子

大きな重たいドアから細く漏れる灯りは眩しかった。

隙間から見えるリノリウムの床に反射して白い。

ステンドグラスの色とりどりを擦り抜けて、光たちが着地して整列した。赤、青、ばら色、黄色に、緑。めいめいが、お前の顔は赤過ぎるだの、そっちこそ、変な色だのと、たわいも無いことで騒いでいる。

ステンドグラスには神話に類する逸話が描かれてあった。三賢人が現れた場面のようであった。椅子の上に着地したやつは、お爺さんが隣の席からはみ出させている膝に登ろうとして滑っている。

歌は知らない曲目だった。

神父が、そこにいる皆を祝福をするために片手をあげた。

教会は祈りでいっぱいであった。

うしろのふたりのはいる隙間はなかった。

# 若宮恭子

## 慟哭

私は夫を愛していた。
私の帰る家が彼の帰る家であることが嬉しかった。
私の見たい映画が彼の見る映画であることが嬉しかった。
しかし彼には、彼の帰る家が私の帰る家である必要がなかった。
彼の見る映画が
私と見る映画である必要はなかった。

愛は満たされず、
私は苛立ち悲しんだ。

家に帰ると私は忙しかった。
しかし彼と一緒に語らいたかった。
家に帰ると、
彼はくつろぎたがった。
そして自由でいたかった。

私の愛は執着であった。
私の愛は情念であった。

触れ合い、抱き合い、求め合い、ぶつかり合い、
憎み合い、けなしあい、傷つけあい、罵り合い、
それでも離れられない。
笑い合い、語り合い、伝え合い、与え合い、みとめあい、信頼し合い、
そして満ち足りる。

私の心は常に脈打ち、
ドクドクと彼を求め続けた。
一瞬でも愛情はないかと探し続け、
常にぎらぎらと血走っていた。
けれど、けれども彼の愛は見つからない。
探しているうちに足の裏には豆ができた。
肉が切れ、血が滲み、爪は割れ、土が入り、
私は汚れ、髪は荒れ、肌はカサカサになり、
年老いた。

彼は平安を好む人であった。
自由とくつろぎが好きであった。
自分が欲しいだけの思いやりを
私が示すことを好んだ。
彼は当然与えられる権利として、
家庭の中で独身貴族を続けた。

愛は満たされず、飢え乾き、
ののしり怒り、暴れまわった。

彼はその様子を眺め、
しばらく佇んで、去った。
去っていった。
去っていった。

愛は満たされず、取り残された。
絶望が寄り添ってきた。

私の愛は執着であった。
私の愛は情念であった。
私の愛は、永遠の片思いであった。

## 大瀬名　凜

### 繭

繭をまとって
ふわふわと浮かんでいる
ぶつからないように
転ばないように
飛ばされないように
目立たないように

気づくと
まわりは繭だらけだ
顔のない
手も足もない
数えきれないほどの繭が
ただふわふわと浮かんでいる

繭たちは知らない
永遠に羽化することはできないことを
それがフツーのことだから

何も考えない
ただふわふわと浮かんでいる

ときおり
繭からこぼれたモノが
深い闇に落ちていく
真っ逆さまに落ちていく
幸せそうに落ちていく
そして消える

何事もなかったように
たくさんの繭が
今日もふわふわと浮かんでいる

福岡県

# 佐倉伊由子

仮面舞踏会

ここには誰もいない。
誰も私を見ていない。
とある本屋のレジの内側。
目の前には今日もいつものお客さんがいる。
私の後ろで、先輩の店員たちが忙しなく走り回っている。
私はここにいるけど、ここにいるのは「私」じゃない。
「私」という人間はここにいなくて、いるのは名もないただの店員。
まるで歯車のようにひたすら動き続ける。

ここには誰もいない。
いるのはただの、店員と客。
学生、主婦、子供、老人、フリーター、会社員、どれでもない誰か。
それぞれがそれぞれの場所に属していても、そ

こにやってくれば一人の「お客様」

学生、主婦、老人、フリーター、どれでもない誰か。
それぞれどこかで別の顔を持っていたとしても、そこに立てば一人の「店員」。

私はここにいる。
だけど、「私」はここにはいない。
一人の、戸籍に登録された名前を持つ人間としての私はここにいない。
今、私に与えられた名前は「店員」。
だから「私」は、今この時間だけこの世界からいなくなる。
その代わりに、「本屋の店員」という存在の私が、この世界に降り立つのだ。

## 近藤尚文

### public yellow

盗まれた自転車と水曜の積荷、僕は風の中に立って、空想と正義、そして失われたみかんジュースについてかんがえていた。

十一月の寒気は無尽蔵なミルク母は、僕を産むだろう。

コップを持ち寄り、行き違う人びと。なれると信じていた。

車輪は空転して、
畦道は輝いた。
それだけの毎日
が、風を受けて
膨張するかなし
み。

ぼくは、ぼくと
釣り合う反対側
のぼくを、この
水曜日に捨てて
いきたかった。

## 感王寺美智子

### 父はあかるい空にいて

母、兄、弟、私、父の骨
縁側に並んで座る
山野草をこよなく愛した父の庭は、草木が生い
茂り、鬱蒼とした山の茂みようだ
父と同い年の杉の木の影が延びてきて、私の爪
先を掴む
置いてきぼりにされたゴムサンダルを揃えると、
風鈴が、ちりん。と鳴った
「ドクダミ、いっぱい咲いたね」
「どうすんだ？こんげな草茫々の庭。虫が、い
っぺことといて、我慢できねて」
兄は額にとまった藪蚊を、パチン、と叩く

『元気なうちに死にたい。枯れ木のように干乾
びる前に。
一生、よく働いた。高校を出て二年働き、小
金を貯めて専門部に入った。

少し給料がよくなった。そして大学を苦労して卒業した。倹約をした。車は、安い百万円以下で、一生過ごした。
ボートが欲しくて何度も考えたが、ガマンした〈子供や孫の為に貯めよう。そして残してやれ〉
自分は、事業者ではない、勤労者で労働所得なのだ。貯めることしかできないのだ。
そして少しであるが残して死ねる。それがオレの人生だ。K也よ、M子よ、S作よ、母さんよ、ホメてくれ。
でも、私は死を賛美しない。私が死を早めるのは利害だ。生物の自然の摂理としては、一日でも長く生きるべきだ。
死は、仕方なく選ぶべきだ。私の死に方は、決して最良のものではない。私は、子供に貧乏させたくないだけだ。
このエゴイズムが、この遺書を陳腐にしている。もっとカッコイイこと書き残せるのに……。
―カタクリの今年かぎりの草をとる―

朝からいい天気だ。早春の山草が咲き乱れて花が見える。今日一日を生きて、生を実感したい。ハナウタ歌ってオサラバだ』
父のノートには、筆圧の弱い文字が陽炎の様に揺れていた
「あのガクアジサイ、私が、好きだって言ったのよ」
母は、呟き何度も何度も頷く
「ともかく、草刈ってしまおて」
兄の眉間は大仏のように膨らんでいる
「家族写真、撮ろうよ」
弟が父の古いカメラを持ち出した
ちりん、ちりりん
風が、父のノートの白いページをパラパラとめくり始める

「やっぱ、入院させんばダメらて」
「家にいさせてあげたいわ」
「毎日、ひとりで庭にばっか居たらダメらて」

騒がしい台所を離れ、縁側にいる父の隣に座った
「あの黄色い花はなに？」
「カタクリだ。黄色いのは、珍しい」
「これは？咲くの？」
「ネジバナ。小さいが、とても可愛い花が咲くんだぞ」
父は、陽を浴びる一本の木のように、サワサワと揺れている
「木や草は、文句を言わんからなあ。大丈夫だ。とうさんは、空にいるから。困った時は、空を見て言いなさい」
目を閉じフッと呼吸を止めると、蜥蜴がシュルシュルと足元を通り過ぎるのがわかった

母、兄、私
杉の木の前に並ぶ
ジー、カシャッ
重いページをめくるように、スローなシャッター音が響く

弟の横顔が急に凛々しくなった
兄はそっと母の肩に手を添えている
キリリと唇を噛んだ母の顔は、泣いているようにも、笑っているようにも見える
多分、両方なのだろう
その横に立つ私は、もう娘ではなく姉妹だ
父が命を繋いできた庭の草木たちが、私たちを包み込む
そしてその上に、大きな青い傘のように父のいる空が広がっている
兄、弟、母、私、青空
これが今日からの私達の家族写真だ

パラパラと、天気雨が降ってきた
「父さん、水やりを始めたわ」
兄は空を見上げ、その雨を顔に染み込ませる
「どれが大事な草だか、いらん草だか、親父しかわからんっけ、このままにしとくか」

父は、あかるい空にいて

この庭に、光を注ぎ、水を注ぎ、命を繋ぎ続けていく
父は、あかるい空にいて
とうさん、ネジバナ、咲きました

## 廣渡まゆみ

### ビー玉を覗けば

昭和の名残を残す
美しきガラス玉。ビー玉。

幼い頃、祖母の机の引き出しの奥にある、千枚通しで、ビー玉に、穴を開け紐を通し、ネックレスにするつもりで
試行錯誤。
無理だとわかったのは左手に痛手を負った時。
鋭い痛みは、幼い身体には、あまりに耐え難く。
親から叱られるのが嫌で、
ドキドキしながら、隠そうとしたものの、痛さに負け
あっけなく自分から白状して、治療をしてもらい、
冷静さをとりもどすと、
ほったらかしのビー玉を、思い出し、庭に探しに行くと、太陽を浴びて、キラキラと光を放っていた。
すかさず拾い、スカートの裾で拭く。
若干綺麗になったビー玉。
いつものごとく覗くと、その不思議な世界は、
さながら、海の中にいるような気持ちになった。
このビー玉は、一番のお気に入り。

そのビー玉が、ある日ポケットに入れたはずが、いくら探してもみあたらず、何処かに失くしてしまった。

失くしてしまえば、更に思い入れが強くなる、子供なりに空虚さを、感じた。

時が過ぎ大人にって、娘を産み、孫が産まれ、久しく祭りの出店で孫とラムネを飲んだ。

カラン！と、響く音こそないが、プラスチックの容器の中で、ビー玉が転がるのを、不思議そうに眺める孫。

小さな指を入れて、ビー玉を取り出そうとする仕草に、淡く切ない思い出が、蘇る。

帰り道、夜風にあたりながら、後れ毛をひっつめて結んだ髪を、ほどいてやると、気持ちよさそうな仕草をみせて、ニコニコ笑う。

夜が明けて、居間を見ると、昨夜のラムネの容器があった。

ビー玉が、太陽の光を浴びて光ってる。

私の思い出も、いまだ、光を失わず健在だ。

それが、とても、嬉しく、愛しい、

ほんの、たわいもない事なのに、、、

# 熊本県

## 前津　光

### 水色アパート

２ＬＤＫ
家賃四万二千円
水色のアパートに
福耳の父さん
外が真っ暗な朝に
野菜と猫の待つ畑へ向かおうと
玄関にたつ

朝の暗やみは
空気を濡らして向かいの木々を撫でる
畑に行く父さんに気づいて
小さいわたしが起きるころ
母さんが慌てるころ

東にも西にも大きな窓
小さい部屋に
空はそれぞれの表情を見せながら

しずかに朝の準備がすすむ
小さいわたしが泣いて
父さんについていこうとする時間

ベランダの窓には
眠そうにきれいな薄白の月
藍色の西に溶け込んでおやすみをつぶやき
台所の窓には
葉っぱの先端　桃色に染めた植物がちろちろ揺れる
困り顔の母さんが着せた暖かい服で
困り顔の父さんにくっついて近くのパン屋へ
涙のあと残る小さいわたし
軽トラの助手席にのって
またおうちに戻る

２ＬＤＫ
家賃四万二千円
水色のアパート
福耳の父さん

少し明るくなってしまった朝
野菜と猫の待つ畑へ
やっと向かう

小さな部屋の
大きな窓の外を
たくさんの空が流れて
たくさんの光をしみこませて
わたしはだんだん
遠く離れて

少し大きくなったわたし
朝なんか大嫌いな日がたくさんあって
空の色を知らない日が続いて
たくさんの時間がしずかに過ぎていって
小さいわたしがまた泣いて
ずっと消えないでって泣いて
絵を描いた
2LDK
家賃四万二千円

水色のアパート

２ＬＤＫ
家賃四万二千円
水色のアパート
外が真っ暗な朝に
福耳の父さん
野菜と猫の待つ畑に向かう
ちょっと大きくなったわたしが
いってらっしゃいを言う時間

# 大分県

## 幸亜有美

### 茶色の欠けた足

毎日歩く大野川のコース
足の不自由な妻を支える
老夫婦の夫の手
見上げると赤トンボ
道端に息ついた押し花姿の虫のナキガラ
ナキガラの横を這う虫達

幼き夕暮れみの虫のみのをはがし
虫だけにしていた子を眺めていた頃
初秋に舞う枯れかけの
曼珠沙華の蜜をも食す蝶たち

スズ虫　コオロギ　赤トンボ
前に足の欠けた　コオロギ
羽を擦り合わせ秋の音色を奏でる
足が欠けようが彼らには
さほど関係ない様を見強さを見る

泣き 亡き 鳴き始める
散歩道に色をつけ
彼らはまた声を奏でる
その横を淡々と歩く

# 鹿児島県

## 久保田 渚

### 無題

外では雨が降っている
子供たちも
旦那も寝ている
私は眠れなくて
雨の音を聞いている
なぜかふと
あの人の旦那さんが亡くなった事を思い出す
だからあの人は皆にあんなに優しいのかと考える
生きているだけで幸せだって
きっとそれを知っているから
娘の同級生の男の子の涙を思い出す
弟を蹴って泣かせたあと自分も泣いた
私はそれまでその子が好きじゃなかったけど
泣きながら弁解するのを見て抱きしめた
レジに並ぶ
私は高校生

前に並ぶ若い母親の
抱っこひもの中には赤ちゃん
赤ちゃんがぐずって泣く
母親はなんとかあやしながら並び続ける
赤ちゃんはなお泣く
母親はそれでも列から離れない
赤ちゃんはお腹が空いているのでは？
周りへの迷惑は？
それでも母親なの？
私は母親を睨む

街に買い物なんてなかなか来られないから
赤ちゃん用品をいろいろ買っておかないと
服と、靴も見たいな
この子が起きる前に早く
買い物を済ませてしまわないと
ああでもそうだよね起きるよね
じゃあおっぱいだ授乳室
別の階にしかないけど仕方ない
急がないと船の時間に間に合わない

旦那も一緒に来てくれれば良かったのに
授乳室に着くと急いで服をめくる
ごめんね
おまたせ
なんとか服を選んでレジに並べたけど
娘がまたグズりだす
疲れちゃったかな
ごめんね
ここで授乳室に行ったらもう時間がない
ごめんね
もう少しだけ辛抱して
ごめんね
お願い順番早くきて
ごめんね
やっぱり無理かな
授乳室に行こうかな
でも赤ちゃんの靴下ここで買っちゃわないと
ごめんね
うまくできなくてごめんね
こんなお母さんでごめんね

私がここにいて
私の後ろに一秒前の私がいて

息子とサッカー教室の見学に行く
みんな知り合いの子ばかりだ
休憩時間にひとりが私のところへ来て
息子が下手だから一緒にやりたくないと言う
少し前に座っている息子は黙っている
横に座っていた同じ幼稚園の子が
お前も上手くなったなぁと声をかける
二十歳の頃
自分が結婚できるなんて思っていなかった
穏やかに関係を続けていける人達が羨ましかった
たくさんの人に迷惑をかけ
傷つけ
傲慢な態度をとった
小学生のころ
クラスにはボスのような女の子がいて
毎日だれかを無視するように言われた

それはときには私の一番の友達だったりした
私は友達を無視した
水道でふたりだけになったとき
ごめんねと言うと目に涙がにじんだ
友達は大丈夫と笑った
雨が降っている
私の前には一秒後の私がいる
すべての瞬間の私が手をつないで
今の私を未来へ引っ張っていく

沖縄県

## 比嘉景哲

### お爺ちゃんへ

私は今病気と戦っている
人に気づかれないほど静かに
病気と戦っている

私は二年前
沖縄の病院から
二週間の予定で
本土の病院の内科に入院することになった
一人で知らない土地の病院に
入院することになった

病院に知っている人は誰も居なかった・・・
心細かった・・・

私は手術を受けることになった
親族や友人から
「頑張れ」

「すぐ良くなる」
「大丈夫」と
応援してくれた・・・
でもその言葉は
一方通行だよ・・・
辛いよ・・・
たくさん検査して・・・
たくさん痛い思いして・・・
たくさん薬を身体に流して・・・
たくさん点滴を身体に流して・・・
たくさん腹部に直接栄養を流して・・・
たくさん頑張ったよ・・・
たくさん応援してもらったよ・・・
たくさん有り難う・・・
でも・・・
そんな言葉より
もっと話がしたいよ・・・
もっとキャッチボールがしたいよ・・・
元気出ないよ・・・
笑いたいよ・・・

病気していること
忘れたいよ・・・

私は二年前
沖縄から
本土の大学病院の内科に入院していた
十時間を越える手術をした

内科病棟の四人部屋の病室に
一人のお爺ちゃんが居た
別々のベッドで
お互い横になりながら
世間話をよくしていた

お爺ちゃんは肝臓の病気
私は十二指腸の病気
お爺ちゃんは肝臓提供者
ドナーを待っていた

十時間を越える手術が終わり

二週間の間
入浴が出来ず
食事が出来ず
水が飲めず
点滴で水分と薬と栄養を取っていた・・・

体重を計ると
五キログラム落ちていた
数日で体重が
七十キログラムから
六十五キログラムに落ちていた

私は内科病棟で
良くなるのを待っていた・・・
そんな中
大量出血した
輸血した
その後
発熱した
昼に

命に関わる発熱をした
寒気で身体全体の震えが止まらなかった
夕方を過ぎても
身体全体の震えが止まらなかった

太陽が沈んだ時
先生に手術を勧められ
私は震えた身体で・・・
涙目で承諾した・・・

承諾した数時間後に
緊急手術をすることになった
夜その事を沖縄に居る父に
電話で伝え
父は何も言わなかった
無言の応援だった・・・

深夜に緊急手術をすることになった私に
お爺ちゃんは言った
深夜に大きな声で言った

声を張り上げ言った
力強く言った
病室から遠ざかっても聞こえた言葉
「頑張れ！」
「負けるな！」
「お爺ちゃんも頑張るから！」
・・・

深夜の緊急手術が終わった
二回目の手術が終わった
目が覚めたのは昼
目を開けた時
私は昨日とは違う別の病室に居た
私は個室の病室に居た
カーテンの隙間から
暖かい日の光が差し込んでいた

麻酔が切れてくると
激痛で起き上がれなかった
身体を動かせられなかった

空気が上手く吸えなく苦しいかった
緊急手術前より呼吸が出来なくて
酸素マスクが欲しかった

私は二年前
栃木県の大学病院の外科に入院していた
私は二週間で手術を二回受け
内科病棟から外科病棟に移った
一ヶ月間
寝たきりになり
一ヶ月間
入浴が出来ず
食事が出来ず
水が飲めず
点滴で水分と薬を流しながら
腹部に直接
栄養を流していた・・・

体重を計ると
五キログラム落ちていた

数日で体重が
六十五キログラムから
六十キログラムに落ちていた

私は身体の様子を診ながら
個室の病室から
外科病棟の四人部屋の病室に移った

外科病棟の同じ病室の
入院患者の奥さんは言った
過去を振り返るように言った
「一人ひとり違う病気を持っている・・・」
「一人ひとり違う治療を受けている・・・」
「みんな同じように辛いよね・・・」
「みんな同じように苦しいよね・・・」
その奥さんも
命に関わる手術
入院を経験したと言う・・・

健康で元気な人が言う言葉より

病気や怪我で苦しんだ人が言う言葉
病気や怪我で苦しんでいる人が言う言葉
「頑張れ！」
「負けるな！」
「良くなる！」
一言一言に重みがある
魂のお守りが込められている

魂のお守りは
相手を勇気づけながら
知らず知らず
自分に勇気づけている

私は二年前
栃木県の大学病院の外科でリハビリしていた
自力で歩けるようになるのに
半月かかった

私は病院に二ヶ月間入院し
二ヶ月間の間で

手術を二回経験し
リハビリしながら体力を付け
退院した

退院したその日
元気になった姿を
内科病棟で一緒だった
お爺ちゃんに見せたくて
元居た病室へ行った
早まる気持ちを押さえ
早歩きで病室へ行った

病室に
お爺ちゃんは居なかった・・・
お爺ちゃんは・・・
もう居なかった・・・
ベッドには別の患者が居た・・・
病室のベッド全て確認した
お爺ちゃんは居なかった・・・

私は看護師に聞いた
「お爺ちゃんは退院したの？」と聞いた
看護師は言った
「ドナーが見つかって転院したよ」と
看護師は言った
私は今も
看護師の言葉を信じている

お爺ちゃん・・・
私は元気になりました
ちゃんと沖縄に帰れました
元気になった姿を
見せられなかったのが
残念です・・・

お爺ちゃんは・・・
今もお元気ですか・・・？
・・・

# 近岡 礼

## 白昼夢

何と無意味なのだ
生きることも
死ぬことも

すべては滅びるのだ
私の夢も
恋も
貯めたものも
この
春の萌す山手線のぬくもりも

私はニヒルに周りを見渡す
向かいには眼差しの強い女が座っている
私は誰に対しても恥ずかしいのでうつむく
でも　その眼差しも
次の瞬間には変わるのだ

旅だけが
私を癒すのかもしれない
滅びの予感がするから

今に
ブラックホールに呑み込まれる時が
必ず来るから

それは遠いことではない
私が永遠の眠りについた後だから
近い

だから
焦ることはない
好きなことをすればいい
すべては滅びるのだから
すべては無意味なのだから

と

電車の中で
怖ろしい白昼夢だった

表紙

Metrax-Craye

Division of B&T Textilia

***06006 AMANDIER "VAN GOGH"***

***70 x 90 cm.***

*82% cot – 12% pan – 3% pl – 3% vi*

⑩金澤詩人第十五号
二〇一九年三月一五日
発行人　金澤詩人倶楽部　代表　近岡　礼
九二〇-〇〇三六金沢市元菊町一三-一一-二〇一
〇九〇-三二九八-一六八二
hanka_siyui@yahoo.co.jp
http://bach2.sakura.ne.jp